

機業家 箕輪重助君

大島郡龍郷村嘉渡



「學べば乃ち其の中に在り」と佛の言はく「行すれば證乃ち其中に在り」と、未だ曾て學ばずして證を得る者

行せずして證を得る者を得ず、縦ひ行に信法頓漸の異なるも必ず行を待て起證す以上は曹洞の祖道元禪師が學道用心集に説かれたる修證不二の教へである。この教へをば君の家業たる大島紬製織の上に施すも其根本は於て何等の違背を見ない。行すれば證乃ち其中に在り、と家業繁榮、人生悦樂、社會共存の意義實に這個の消息の中にある。二十有餘年來、良質大島紬製織に腐心し斯界先覺として同業者間に敬重される君は、明治二十年三月五日箕輪貞氏嫡男として現所に生る。本格的に工場を起したるは大正六年の事にて當時、織機十數臺据付、女工二十名内外を置き、一貫大柄専門にて新圖案を工夫し専ら優良原糸を選擇使用し業勢愈々隆々たるものあり、家庭、令閨綱千代さん(五〇)間に長男武光君(二二)次男義光君(一九)三男隆司君の男三、長女かづかさん(一四)高小一年を擧げ令弟新助君、又同一部落に於て紬織機工場を有し協力斯界の發達に貢獻する等生々和易の善む可き一門をなす。

機業家 箕輪新助君

大島郡龍郷村嘉渡



盡日春の尋ねて春を見ず、芒鞋踏過す隨頭の雲、歸り來て偶々梅花の下を過ぐれば、春は枝頭に在つて已に十分、蓋し道は

近きにあるので之を遠くに求むる義を道破したのが戴笠の有名なるこの詩である。ともすれば人は自己を過重するの餘り徒らに大なる野望を抱いて眼前に爲さねばならぬ責務が横はつてゐるのを顧慮しないやうな事にもなり勝ちである。然し君が歩いて來た道は全く堅實な正義人道であつて、郷土郷黨を愛し愛され己が環境に順應して、それをより向上し、より善處せんとする努力の集積である。今は幽明界を異にする故箕輪氏次男として明治二十五年一月七日に生れ、郷村小學校卒業後、家居益々修養に努め本場大島紬製織界の人となるや、研究心旺盛なる君は次々と新柄を案出して大柄物及種類等を産出し、原糸亦、最優良なるを以て斯界に好評を博し、現在織機十數臺を有し年産二百反内外、製品の規模を有する工場を經營中である。令閨うちよさんの間男四女四を擧げ、長男太吉君(二二)目下佐世保海兵團入團中、次男武重君(一九)名古屋の著名商店祖父江糸店に在り、三男武雄君(一六)、四男武四郎君(五)長女糸江さん(一六)二女つ子さん(一一)三女まち子さん(八)四女江美子さん(三)皆健在なりと云ふ。

小組合長 碓山利五郎君

大島郡龍郷村赤尾木



吾人は常に使命を委託されたる神の使者として高貴なる地位に在る事を忘れてはならぬ。責任を重んじ身を犠牲にしても之

を遂行するは本分に忠實な所以であつて、人の人たるの道である。本郡主産物の隨一たる製糖界の先覺として當赤尾木共同製糖所創設者であり大恩人たる君は實性醇厚篤實、専ら農村振興の天目的に向つて奉仕的努力を捧げ公民の木鐸とするに足る君子人である。明治二十年四月十日國定氏嫡子に生る。紅顔十八、偶ま日露戰役勃發するや陸軍志願をなしたるも叶はず、更に海兵たらんとしたるも能はず、二十歳初めて合格、同四十年佐世保海兵團に入り同四十三年海軍砲術學校入學、大正二年滿期退團歸郷、同三年上京し砲兵工廠入りを見なれども意の如く運ばず仍て其年警視廳巡查を拜命し日比谷警察署詰となり爾後、勤続十六年、一貫治安の重責に任じ昭和五年七月に至り父君病ひの爲め退職歸郷し、當時本村製糖事業の甚だ振はざりしを慨し、其振興策として共同生産の要を痛感し、私財を以て組合設立に奔走し遂に支店より補助金千五百圓を得て製糖所を設置し以來、赤尾木共同製糖所を中心とする製糖小組合長となり一意製糖發達のみならず製糖小組合長となす等の呼聲あるも、一切耳を借さずと云ふ。熱血にして剛強の天性見る如し、家庭、母堂秋刀自(七一)、令閨たね子さん、一女和子さん(一〇)

元助役 松崎義榮君

大島郡龍郷村久場



樹木の亭々として大空に秀で能く暴風に耐へ大雨を忍ぶ所以のものは、抑々又之れに適當するの根あつて地中に蟠まるが故

也。社會に立ち堅實なる一步々を進めて目的の彼岸に邁進するには、先づ豫め根本の實力を養成するを要す。君が地方郷黨の白眉として、衆に重んぜられ、事に當つて責任強く必ず成就せずんば止まずて信念は、其の過去の修養努力に待つや大なり。永年、村の世話役(現在の區長)を勤め區内諸般に貢獻したる宗榮氏長男として明治二十八年五月二十九日現所に生れ、郷村高等小學校卒業後、家居學事に精勵し、大正二年二月二十八日付、本村書記を拜命し、同年十二月徴せられて鹿兒島歩兵第四十五聯隊に入隊、翌五年朝鮮龍山聯隊に守備として服務し同六年上等兵に進みて除隊歸郷し、再び村書記となりて、爾來恪勤精勵して昭和十二年十一月に至る滿二十三年間其職に盡し内、二年間、助役の要職に就き村治に貢獻する處大なるものがあつた。令室さと子さん(二七)、長男馨君(二二)縣立伊佐農林在學中、次男靜雄君(一六)在大阪、三男一君(九)小學二年、二女多賀子さん(一三)小學六年、三女禮子さん(一一)同四年に各在學中である。

元公吏 阿多利重六君

大島郡龍郷村久場



役場吏員たりし事十六ヶ年を経て、村會議員に擧げられ自治有終の美を盡したる事多年に亘りたる君が、過去に残して來た

功績こそ甚大なるがある。自治の効果は、各人の個人主義的な態度からは決して生じない事は吼々を要せぬが、自家を齊ふると共に一步進み郷里村民の爲めに些かなりとも力を添へたいと云ふ念に依つて協力しなければならぬ。君の家は實に其典型、嚴祖父は大島郡横目役を勤役し先考藤安氏は在世の頃、村會議員たりし事十六ヶ年に亘りしと云ふ家格で、君は少時より其香馨裡に人となりたるを以て家格、人物共に自治の第一人者とも云ふ可き人である。明治十一年四月二十三日生れ、明治四十一年本村役場吏員を拜命し大正十三年に至る滿十六ヶ年間一日の如し、仍て大島支廳長より記念品を添へ表彰の榮に浴したる事あり、後、村會議員に高點を以て當選し農村振興、産業増進、教育の發達土木設備の完備等に盡瘁し其功又著大なるものあり。令閨豐千代さんの間に男五を成し、長男清義君(三八)大阪市電氣局に勤務、次男弘藏君(三四)赤木名電車會社勤務、三男弘義君(三二)村居、五男重次男(二五)海軍人として目下出征中にて柔道三段の猛者たりと。

素封家 大島富長志君

大島郡龍郷村仲勝



貝原益軒先生曰く、人生最も日を受しむべき時三あり、其一是幼弱の時記憶と精力と俱に盛なり、故に博聞強記の功成り易

し。一度記憶すれば則ち終身忘れずこの時精勵せば則ち一日の功以て十日に當り、其二是壯少の時父母既に老ひ、久しく侍養すること能はず、是を以て定省の功一日も怠廢すべからず、此れ人子の當に日を受しむべきの時なり。其三是老境衰殘の日、躬既に仕を對せば、即ち公事暫く無く勞なし。此時に當りては須らく日々娛樂優渥して舟を終ふべし。これ老衰當に日を受しむべきの時なりと、君の生涯は正しく是れの實踐であつた。文久元年十二月六日、本郡屈指の名門、初期衆議院議員故大島信氏の次男に生る。村制施行さるゝや最初の役場書記を拜命し超えて同三十年大勝村外五ヶ村用掛となり、次で勸業委員、村會議員、紬織物、砂糖總代會議員、紬織物組合及び砂糖業組合創立委員等を歴任し、其間、自動車道路改修工事、水田耕地整理、土木道路工事、小學校建築、産業組合設立等、君の努力に依り成れるもの甚だ多く、特に本村内施設は殆ど君の手を煩はざるもの無しと言ふも過言に非ず。現在、悠々自適の境涯にあり、令閨は赤木名新寛説家の出、長男友熊君(五八)次男新三君(五四)三男猛君(三八)他に女二あり。

區長 押 長 英君



大島郡龍郷村大勝

試みに、貴下の御趣味は、と尋ねると言下に世の爲に盡すことだ、と答へる事程左様に實際公共の爲に骨身を惜まず働いたし、今現に働きつゝある。今の時代は、机上の名論卓説では救はれない。一人の實行家の出現を望む。此秋に於て君の如き存在は實に貴重と謂ふ可きである。明治三十一年十一月十六日福岡氏次男に生る。父君はシメ紙専門を業として常其優秀なる技術者並に染色技術者を聘して改良を怠らず其製品、本郡唯一と絶讃されたる優良品の生産者たりしなり、君は高等小卒後、父君の下にて其業を習得し數年にして夙も同業を驚到せしむるの技術者となりたりとの佳話あり。大正十五年には遠く山形縣置賜織物同業組合より招聘され本場大島紬染織の方法を指導し、大いに良績を挙げ昭和三年五月二十五日付を以て置賜織物同業組合長菅四郎兵衛氏より金三百圓を添へて感謝表彰され其年歸郷、以來、現業に出精し傍ら農事(砂糖製造、養蠶業)を兼業しつゝ今日に至る。天性、究理心あり而も決斷の人にして改良すべき事は躊躇なく實行に移す稀に見る活動家にして其前途は大いに刮目して見るべきものがある。家庭、母堂澤松刀自(六七)令閨千代さん(三三)長男康蔵君(九ツ)次男哲司郎君(七ツ)長女節子さん(五ツ)二女いつ子さん(二ツ)

村會議員 中 鐵 美君



大島郡龍郷村大勝

乃至世界觀に於て確かに俗流凡群を超越した處があり、自個一身の利害得失にのみ拘泥する事なく、眼を大局的に放つて利他幸福を念願とし來つた處は、その器量の如何に偉大なるかを雄辯に物語つてゐる。これ所謂達人達觀の面目躍如たる所以である。君は明治九年二月十七日我龍郷の里に其の名も響く中家の世繼として呱呱の産聲をあげた。先考當佐登氏は多年、村會議員其他の諸要職を歴任したる人にて十八年前享年七十八歳を以て他界せり。君は幼少已に明智適齡、夙くも熊本縣巡査となり同三十二年沖繩縣に聘せられ土地整理員となり滿五年を送り、三十七年本村書記を拜命し稅務、勸業各係を歴任すること七ヶ年、後、村會議員に推舉されて茲に果選三期目、本縣方面委員、大勝、産業組合理事等の要職をも兼ねて活躍す。其間、大勝産業組合長、土地賃貸價格調査員並に土地調査員、國勢調査員等を歴任し、手腕圓熟、經驗豊富の人として村治當局者及議員間に嚆矢を放つ。令閨かき千代さん(六〇)の間、長男弘君(三八)現福岡縣下漁業組合幹部、次男勇君(三一)現大勝産業組合長、三男諭君(二五)在佐世保海兵團、長女梅枝さん(四〇)二女愛子さん(二九)共に他家に嫁す。

村會議員 南 太 郎君



大島郡龍郷村中勝

南家は舊藩時代與人を勤役した家柄といふから、其の家系の正しい舊家たる事は判然するであらう。先代を喜祖泰と呼び、與人として本村の爲めに多大の貢献をなした功勞者で、今を去る約二十年前六十四歳を以て逝去した。太郎君は其の長男、明治十六年八月十三日出生。名瀨高小學校を卒業して農學校に學び、後ち更に縣師範學校教員養成所大島分校を卒業して大勝小學校に奉職する事十ヶ年、此の間明治四十五年本科正教員の免狀を獲得した大勝小學校より戸口小學校に轉じ、三年にして赤尾小學校訓練に轉補を見、在職一年の後ち再度大勝校に復歸し、居る事三年にして西方村小學校に轉出し、三年の在職を経て職を辭した教育界に在る事二十ヶ年、本島幼童教育に寄與せし所多大なりしは言ふ迄もない。職を辭して家庭に入ると共に農耕に精勵して之れが改善向上に努め、村内道路の開鑿、改修に努力して交通の便を計る等流石に父の子たるに耻ぢざる活躍ぶりを示し、現に村會議員並學務委員として自治教育の兩方面に努力を致しつゝある。曾て國勢調査員に擧げらるる事三回、内閣統計局より感謝狀を贈られた。美千代夫人との間に三男二女がある。

村會議員 前 田 豊 君



大島郡龍郷村中勝

昔から「恒産ある者は恒心あり」と言つてある。今日自分の生活にも窮する有様では、世の爲め人の爲めに公平な立ち働きをする事は先づ至難の事に屬する。常識から言つても、人の世話を爲す程の人である以上少くも自分自身が先づ他人の世話にならぬ事を心掛けなければならぬ。吾が前田君の如きは此の意味から見ても立派な公民の範であり、此人ならば眞に村の爲めに、村民の爲めに自治政に参畫する資格ある人物である。君は先考濱靜志氏の二男として明治二十六年三月二十五日中勝に生れた。大勝尋常小學校を経て名瀨高等小學校に學び、同校第一回の卒業生として世の中に送り出された。爾來家庭に在りて農業にいそしみ、傍ら副業として大島紬業を經營したのが今より二十年前であつた。業界の變遷盛衰に伴れて君の手元も多少の波瀾は免れなかつたが、兎に角日一日と隆昌の一途を辿りて今日では殆んど本職と稱するまでに發展した事は、全く君の努力精進の致す所である。君は此の多忙な日常を有するにも拘らず過去に於ては農業調査員として盡瘁する所あり、現在は村會議員として産業、教育の進展に、或は道路の改修開鑿に夫々努力を致しつゝある。四男四女の子嗣者。

村會議員 柳 原 清 良君



大島郡龍郷村浦

何れの事業に於ても、當事者を打つて一丸となし、適當なる指導者を置き、一切の進退を指導者の意のままにすのぞきなれば今日勉全なる發達を遂げ、豫期の収益を収める事は困難である。就中農家の副業として發達し來り、副業として經營されつゝある本島の糖業並に紬業の如き一段此の感が深い。此點に着眼して夙に製糖業者の組合組織を提唱し多年之を續けて止まなかつた君の熱眼遠識は流石にゑらいものである。これあるが爲めに浦區の糖業は顯著なる發達を成し遂げ得たと稱するも取て過譽ではあるまい。君は明治三十三年八月二十八日生、瀨留高等小學校卒業後家庭に在りて農事に勤み、模範青年として青年會長に推され、四ヶ年間其職に勉め、國勢調査委員を囑託せられて國家事業の遂行を佐け、現在村會議員の外方面委員を兼ね、自治と社會事業に精力を傾けてゐる外、昭和十年多年主唱して之れが實現に狂奔し來れる浦糖業小組合の設立を見るや、組合員二十七名互選の結果、君は選ばれて小組合長に就任し、爾來組合員共同の福祉増進に向つて今も尙努力盡瘁を續けてゐる。年齒未だ不惑に達せざる若さで早くも今日の地歩を占め得た人丈けに、やはり其の識見にどこか凡慮の及ばざる所がある。

村會議員 早 口 豊 重君



大島郡龍郷村瀨

實業家なるが故に必ず天狗の巾着を前から切る程の敏捷さ狡猾さがなければならぬ筈はない。それに反して狡猾なる者は次第に亡び着實にして誠意ある者のみが榮ゆる實情にある。これこそ天道未だ照し給ふの感があるではないか。早口君兄弟に就いて見るも此間の消息を會得できるであらう。君は故豊峯氏の二男、明治二十五年九月二日を以て瀨に生れた。十八歳の時嚴父に死別した君は、當時二十一歳の兄岩助氏と二人睦まじく手を取り合つて家業の農耕に精勵したが、後ち兄弟共に實業に志し、君は大正七年大島紬の機業經營を開始した。爾來持つて生れた誠實と熱心を以て業務に努力した甲斐空しからず、數年後には早くも大工場を増築し、五十臺の機と女工三四十名を使用して小柄専門の優良品を織り出し、京阪地方に販路を求めて無一物から今日の大を成すに至つた。現在年産額六七百反の生産をなしつゝある。昭和四年村會議員に當選して一期間村政に参劃した。二男四女あり。家兄岩助氏も元紬屋として非常な成功者であつたが、大正十三年頃商業上大失敗を爲した爲め、大阪に出で、大阪港水上商人となりて漸次地歩を占め、現在に於ては水上商人組合長兼會計検査に推され、四百人の組合員から慈父の如く慕はれてゐる。

村長 大野彌吉君

大島郡笠利村

世の趨勢は日一日と多岐繁雜を深め、國民の生活も是れに順應して年と共にあはたゞしさを加へ、相競つて利に走り、相率ひて私利を計り公益を顧みざるの風習滔々たる今日、黙々として村自治を統へ、郷村の振展向上と村民の福利増進に心血を注ぐ事は、之を口に言ふ事は容易であるが、實行、實現に至りては甚だ難事に屬し、餘程の人物に非ざれば堪え得ざる所である。笠利村長大野君は今正に此の難事に當面し非凡の人格と識見を以てやす／＼と之れをやり遂げつゝある。君が過去如何なる經歷より此の間の手腕と腹を養ひ來つたか、以下簡單に其の經る所を見る事にしやう。君は明治二年八月を以て故清實氏の三男として笠利村に生る。明治二十二年、二十一歳の時本縣警察界に職を奉じ精勵格闘を續くる事十餘年にして辭し、轉じて稅務署に入り、大島、岩川、宮崎縣高鍋等の各稅務署を歴任する事八ヶ年、歸來家庭にありて郷村郷黨の爲めに盡瘁し、其の晩節を盡しつゝあつたが、遂に村民輿望の歸する所となり村長に推されて村政を執掌するに至つた。君は人となり寛弘大度、常に高所に立つて大局を觀、自己の是を信する事を斷行して悔みざるの勇がある。現下非常時の笠利村長として蓋し適任たるは言ふ迄もない。其の財政に特殊の手腕を有するは稅務官としての修練を積んだ君にしては、寧ろ當然であらう一男三女あり。

赤木名 新徳吉盛君

大島郡笠利村赤木名

君は明治三十年十二月二十日を以て指宿郡額娃村に生る。大正五年二十歳にして郡内九玉小學校准訓導に職を奉じて教育界に投じた。爾來獨學研鑽を積みて怠らず、其の結果大正七年二月遂に訓導に進められ、全九年三月全郡別府尋常高等小學校訓導に轉じ、翌十年三月再び九玉小學校に復歸し、全年四月實業補習學校教師兼任を命ぜられ、次で昭和四年三月更に九玉公民學校助教諭を兼任し、昭和七年三月全郡中名尋常高等小學校に轉補せられ、全十二年三月大島郡赤木名尋常高等小學校校長兼訓導に拔擢せられて今日に至つてゐる。

正規の學校を卒業した人々でさえ、尋常高等小學校長に經上る事は、現下の社會狀勢に於ては決して容易の業でないのに、准訓導より身を起し、刻苦精勵、一路教育報國に邁進し、不惑を過ぐる一歳にして今日の地位を獲得した。劍道に精進し、學童にも之を奨勵してゐる。夫人との間に三男二女あり。本校は明治二十九年一月十八日の創立に係り、現在尋常科、高等科を合せて十二學級に分れてゐる。明治十二年三月奉安殿を建設し、名實共に教育殿堂たるの名に反かざるに至つた。初代校長義光良之助氏より石原彌吉、國師正壽、川崎茂助、玉利源熊、東伸一、永利愛亮、藤村前吉、伊地知季文、碓山國榮の十氏を経て第十一代の君に至つた。

教育功勞者 加 實良君

大島郡笠利村節田



戸數一三五戸、人口六三六人、米を主産として穀類年産額二十四萬斤、芋百萬石、砂糖千二百丁、純織物二百反、家畜養豚二千五百頭内外の年額を計ふる當節田部落の區長として區民の信望篤き加實良君は、明治十六年五月十六日現所に出生し嚴父早逝の故を以て専ら嚴祖父伯民氏の手によりて成人す、少時夙くも育英界に身を立てんとし明治三十年郷邑高等小學校卒業と同時に出席し本縣師範學校に入學し同三十九年、二十五歳の春、同校を卒業し直ちに本郡徳之島天城村小學校訓導となり在職二年、同四十一年母校たる當節田小學校に首席訓導として錦衣着任す。時に齡二十七、爾後約九年間専ら兒女の薫化に全力を注ぎ實績見可きものあり、大正七年大和村小學校に轉じ在任一ヶ年、同八年四月、當時郡内にて學童思想の悪化を以て聞え心ある心士をして憂慮せしめたる西仲勝小學校の校長に任命され、克く其の起る所を明察して一意懲弊一掃に努力し就任三年にして二百三十學童中缺席者其半ばに達したるを漸次根絶せしめ在職六年遂に郡内一の良校たらしめたり、後、屋仁校二年、宅宿校八年と歴任し、昭和十年四月、二十有八年の教育生活を辭し爾來、生地の區長として今日に至。家庭令閨竹子さん(五五)長男文夫君(二六)中卒長女浪子さん(三〇)鶴嶺高女卒業

村會議員 渡松次郎君

大島郡笠利村須野



青陽風に梳る柳色は緑、池塘芳業に鼓ひ咲く花客自ら紅、柳はみどり花はくれなゐ。これ本領發揮の大自然の法則であり、

人生も又己が天職を尊重し己が本分を忠實に果し以て旗幟を闡明し天地俯仰して愧ぢざる大道を邁進すべきである。資性醇厚至直にして爲人潑刺たる君は夙に鑄鉄界に己が進む可き意義を見出し大正七年郷關を出でて鹿兒島市武町に居を定め本場大島船の宣傳を傍らに各方面に優良品の販賣をなし大いに産を成したるも四年前に嚴父勝圓氏の急逝に逢ひ歸郷し、以來、生地たる現地の人となりて、内、家を齊へ、外、公共に努力し、産業組合理事に選任され、次で高點を以て村會議員に當選し、砂糖組合組長、農事小組幹事等をも兼ねて活躍中である。因みに君は明治二十五年十二月一日故勝圓氏長男に生る。先考は純織物並に砂糖製造等に盡力し、就中糖業發達の方面に於ては特筆的功績を有する人である。令閨の間五男四女を成し、長男純雄君(二五)は二中、七高を通じ最優等の成績を以て一貫したる昭和十二年度帝大卒業して昨年臺灣歩兵機關銃隊に屬して上海に出征し轉職中重傷を負ひて治療中、二男義純(一九)中學卒、目下佐世保海兵團に在り、長女さい子さん(二三)女子師範出身。

村會議員 吉 富隆君

大島郡笠利村笠利



善を見ては之に従ひ、義を聞いては則ち服す。温柔孝悌にして、驕つて力を持つこと勿れ。とは小學の示す金戒である。常に精

神の修養と品性の陶冶に心を傾け、佳語善言を自家に收獲して向上進歩の糧となし、特に郷土の開發を祈つて力を共存共榮の事業に注ぎ、自治政の確立に對して献身的に努力し村内の名望家として錚々たるの地位にあるは我が吉富隆君其人である。明治三十六年二月三日枝實氏次男に生る。幼少夙に才氣潑刺、小學校教育を了へて更に雲雪の功を積み成人するや、青年會長に擧げられて村内僚友の模範となり、君の感化に依り素行宜しきを得、後、村内の有用人物と仰がるるに至れる者枚舉に遑なしと謂はる。其後産業組合書記を奉職し村經濟改革に力を傾けたる事多年、其間、國勢調査員、農會議員等を被命、或ひは推舉されて現に後者の職を帯び、昭和十一年村會議員に推されて出馬し首尾克く鹿を獲て其要職を占め、一方農事並に純織機業を營み自宅前に大工場を建設し本場大島純織良品生産に努力中、年尚尙ほ三十六、村内最も將來を囑望される随一人者たり。家庭、令閨ヒデ子さん(三五)の間三男三女あり、長男源俊君(一四)次男俊蔵君(一三)三男巳俊君(三ツ)長女りわ子(七ツ)二女もつ江(五シ)三女ますよさん(三ツ)

方面委員 泉 八郎君

大島郡笠利村外金久

輕佻浮薄な者が萬一に成功するを僥倖と言ひ世の多數は我こそ僥倖者たらんとして輕佻浮薄に時日を空費して躑躅落魄の慘に遭ふ者の如何に多きかを見る。堅忍不拔の努力が如何に成功を確實付けるか、それは成功者個々に就て見れば直ちに首肯される所、更に深くは本村の成功者泉八郎君に見て明かであらう。君は明治七年六月六日故朝榮吉氏次男に生れ、郷邑小學校卒業後、農事の傍ら純織機業を營み多年九州、關西方面に出張し、紳の宣傳及販賣に盡力して今日に至り、其間、公職として明治三十五年村會議員に當選し同三十六年世話係、同三十九年砂糖検査員、同四十年村會議員、再選其年八月農事小組合長、同四十二年五厘貯金組合事務員、同四十四年農事小組合長再選、大正三年縣物産陳列所より純織物出品其他の功に依り受感狀、同四年青年會長、三度、小組合長及び納稅組合長同五年畜産聯合創立委員、同八年區長並に砂糖業組合検査員となり、後者至十五年、同九年同組合幹部、同十一年四度び小組合長、同十二年水稻立毛品評會審査員、昭和三年再任、同十二年方面委員被命、長男義治君(三一)中卒在自宅、次男保雄君(二九)中卒通信省勤務、三男實成君(二四)法政大學卒在教育界、他に四女を有す。

村會議員 淺野熊七君



大島郡笠利村簡田

淺野家は本村に於ける豪家で先代仲和志氏は部落の發展に盡瘁して多大の功績があつた。熊七氏は其の長男明治二十三年一月出生、父君に似て温厚篤實な紳士である。大島島の機業を起し、傍ら糖業に關係し、郡産業の開發進展に身を以て當り、部落は言ふに及ばず村内の信用頗る厚きものあり、昭和七年推されて村會議員に當選し、一期間村政の樞機に參畫して部落民の興望に應へ、全十一年期滿つるや再選重任して今日に至つてゐる。是より前、國勢調査に當り委員たる事前後二回、努力奔走して國策の遂行を助くる等、功績の擧ぐべきものが少くない。本笠利村が本郡内の有力村として、教育に將産業に他の追従を許さざるものある所以は、君等父子の如く、相繼ぎて公事に努め、所謂滅私奉公の實踐にいそむ結果に外ならず、我帝國の國威も亦斯くして發揚せらるゝ事を思へば、君に對して多大の尊敬を拂はざるを得ないと同時に、廣く世の青年子弟に對して君等父子の心を心として公事に努むべきを勸告したい。家庭は夫人との間に一男五女あり、令息和雄君は當年十二歳、目下高等小學校第一學年に通學中。

村會議員 玉利金説君



村會議員 玉利金説君

大島郡笠利村高屋

薛敬軒曰く、大事小事即ち平々之に達すれば便ち人の視聽を驚かすに至らずと、平々の二字最も妙、百貫を持上ぐるも平々たり、千貫を持上ぐるも平々たりと云ふ。蓋し之の公平無私、濟物兼愛の人、案外、著名人に見ずして草澤邊境の地に發見さる。我が地方自治體の美を濟せる、思ふに斯の如き人士あるに依ること喋々する迄もない、我が玉利金説君の如きも之に符恰する一人者と謂ふも溢美でない君は明治二年二月七日、故白畑金齋氏次男に生れ、後現姓に變る。先考は藩政の頃、多年、當郷庄屋の要職に在り郷民より慈父の如くに慕はれたる人、先年八十の高壽を全ふして永眠せり君は明治四十年四月村會議員に當選し、爾來累選五期、善く村政の向上に裨益して今日に至つた。其間、土地貸賃價格調査員其他の要職を歴任し、現在、糖業組合並に砂糖業組合創立以來の代理人として活躍中である、家業として農事並に糖業を營むも其既往は多く私事より公事に盡瘁して寧處の時なかりしと云ふ。令閨の間、男子無きを以て養子染熊君(四八)を嗣子となす。君は現職小學校長の要位にあり、長女數子さん(二三)奄美高女を経て鹿児島市鶴嶺高女を出でたる才媛、二女二枝さん(二〇)奄美高女卒、体育講習會出身の才媛にて、目下小學校訓導を奉職中と。

村會議員 前田金七君



村會議員 前田金七君

大島郡笠利村宇宿

論語に曰く「磨すれども礪せず、涅すれども縮せず」と。確固不拔の精神を有して己が信ずる方向に邁進する人にとつては周圍の汚濁誘惑はものゝ數ではないのである。そこに終始一貫の徳が成立する、實性醇厚至誠椰風沐雨幾十星霜を一日のやうに勤勉そのものゝ如きは、君の人格の秀れた證據である。先考は武二郎氏と呼び、君は其三男として明治十七年六月十九日生る。少壯時代、推されて青年會長となり在職多年、大正九年四月村會議員に擧げられ累選五期、茲に二十有餘ヶ年に達し現に糖總代議員の職をも兼ねて活躍中にて、其間、土地貸賃價格調査員、國勢調査員、村産業組合監事、砂糖同業組合監査役、土地調査員、糖織物工業組合總代議員、糖及砂糖代理人等の諸要職を歴任し、自治更張、殖産興進等の發達に貢献したる事故擧に邊なし、糖工場を自宅前に設置し盛業中也。家庭あり子さんの間長女さい子さん(三一)高女出身現在東京に在り、二女千鶴子さん(二二)在自宅の二女を成し、當部落中有數の人として其人格と手腕を顯はれつゝある。

糖業小組合長 里山重市君



大島郡笠利村用安

天然自然は常に生々育々の法則に依つて循環し物質不滅の法則に依り變化流動する。太古民は此大自然のみに憑藉して生活してゐたが、人智の進むと共に人工を自然に加へて生活をより便利にした。農業に於ても然り尊徳翁も「農業は半ば天理順應也。半ば天理逆應也」と言ふ。まことに眞の改革は自ら土に親んで自覺奮起する改革更生でなければならぬ。實性篤實温厚寛仁、幾十星霜一日の如く土を愛する里山重市君の如きは正しき意味の眞の農民である。されば斯人は斷じて世人の捨置く所ならず、戸數一一五戸、人口五七〇人、産物年産額一四〇〇反、砂糖五百四十樽、養豚一〇〇頭、米六萬斤、麥四〇石、其他、芋、蘇鐵等を有する常用安區長並に昭和十一年糖業小組合として認可されたる同組合小組合長を勤めて信望日に加りつつある。出生明治廿三年三月一日、嚴父は篤農家と謂はれたる仲石氏にて、君は其長子、郷村高等小學校卒業後、獨學を以て更に修養自得する所あり、農事に勤み、一方、青年會長に擧げられて長く模範青年の稱を博し、後國勢調査員及び其他各種團體に關與して其幹部たりし事あり。

村會議員 上村重太郎君



大島郡笠利村用安

丹の藏するところのものは赤く、漆の藏するところの者は黒し。人にも各々本分有りまた特長あり、之を自己一身一家の爲のみ役立てず利他共存の爲に役立つるによつて始めて社會有用の材となり得る。君實性醇厚實直、公共の觀念に富み社會共存の理想を有し郷土の美化に邁進したるの人。累世、當郷の有力家として連綿したる家に明治三十年三月十日吉次郎氏嫡男として呱呱の聲を揚げた。夙に敏才俊智、高等小學校を卒ゆるや、以來改、農事に精勵し、十八歳の交、己に農業指導家として近隣に重んぜられ、一方、青年會長に推されて後進青年の誘掖に勤めたる事あり、斯くて農事指導、風紀改善等に従ふ事實に十數年、後糖業組合を起し又糖業の發達に努力し自ら京阪神地方に出張しそれが宣傳販賣に従事し大いに其聲價を昂むるに至らしめたる等の特筆事蹟あり、名譽職として曾て農業調査員、國勢調査員等歴任、現在、糖業共同組合監督、三期目の村會議員等の職を帯び活躍中である。家庭、令閨かね子さん(四〇)の間に長男哲夫君(一八)大島中學五年生、長女繁子さん(二二)奄美高女卒業あり、母堂タミチヨ刀自(六五)を奉じ一家饒々たりと。

村會議員 里雅隆君



大島郡笠利村用安

長いやうで短いは人生の行路春夏秋冬の徂徠と共に旅人なるは我等人間である。易いやうで難かしいのは處世の要諦、如何に方向を辿る可きか、醉生夢死に終るも勿論良くはないが、さりとて徒らに誇大妄想の徒となつて一攫千金を夢みるのも感心せぬ、膽大にして細心なれ。要はこれだ。知足感謝の精神を把持して本分に忠實に終始一貫堅固な道を歩むこそ人の人たる道である。君は今より二十三年前、五十七歳を以て幽明界を異にしたる故佐美郁氏の次男として明治二十二年七月十五日に生る。爲人温厚にして而も朝氣あり、年少、夙くも青年會長に擧げられて多年其職に居り、其間、區長四ヶ年、國勢調査員二回等歴任、現在三期目の村會議員、前後二期目の農會議員並に本縣方面委員等の要職に在りて活躍中にて、一方、家業として糖織物業並に農業を營む。家庭又幸福にして令閨静子さんの間三男三女を成し長男幸男君(二三)次男龍男君(一九)三男眞君(一〇)長女いく子さん(二九)次女たつ子さん(二七)三女まさ子(三ツ)、他、傭人二名を有すと

元村長
元縣議員
元郵局長

永利禎祥君

大島郡笠利村外金久



古來濟生家にして兼て濟世家なる者少くないが、我が永利君の如きも正に其の尤なる者である。少しく政治を語る本縣人

であるならば、君が縣會議員として本縣々政に寄與せし事を知らない筈はない、其れのみならず村長として郷黨の爲めに劃策した事も亦決して見逃してはならぬ。而もこれ等が醫師といふ最も多忙な日常生活する傍ら行はれた事を知らるならば、何人も郷黨を愛する君の熱意と、勢力の偉大さに先づ驚かされるであらう。
君は元喜界島の産、先考嘉仙氏は舊藩政時代庄屋、横目の要職を勤役したといふから永利家が同島に於ける名門たるは言ふに及ばぬであらう。君は文久三年五月十九日を以て其の息に生れた。夙に醫業を學び明治三十三年笠利村外金久に移住して醫業を開き、三十七年の星霜を閲して今日に至つてゐる。出生地喜界村在住當時已に村會議員に選ばれて村自治の爲めに盡瘁する事多年、現地移住後の明治四十年島民の輿望を擔ふて縣會議員に當選し、島民の福利増進の爲めに縣政を講ずる事一期、全四十四年辭して濟生に没頭したが、昭和八年七月笠利村民の希望を容れて村長に就任、全十年一身上の理由から職を退き、再び家職に専心して現在に至つた。嗣直太郎君は熊本醫學校を出でて東京市深川に醫院を開き、次男は天折し、三男義信君は神戸市役所に奉職中。

武八郎君

大島郡笠利村

地方郵便局長が由來其地方に於ける素封家乃至有力者である事は全國其の軌を一にしてゐる此の點から見ても麓家が笠利村の名門であり有力者なる事を知るに足るであらう。先代英英氏も在世中多年局長として本村通信事業を通じて文化促進に貢献する所が少くなかつた。

君は其英英の二男、明治十四年十一月五日を以て麓家に生れた。名瀨尋常高等小學校を卒業した後進んで鹿兒島第一中學に入學し、優秀な成績を以て同校卒業後明治三十四年徴せられて東京中野電信隊に入隊、明治三十七年より日露戦役に従軍出征、多大の武功を顯し全三十九年凱旋した。明治四十三年笠利村役場書記を拜命し、村政の事務を執りて精勵する事二年、全四十五年四月辭して笠利村赤木名郵便局長を拜命、嚴父の後を繼ぐ事となつた。爾來勤続三十年、氣骨の折れる、他人から認められない努力を續けて倦まず、今日も尚ほ其職に盡瘁中である。正七位勳七等といふ君の肩書は、之れ等多年の功勞に報いられた報酬に外ならない。赤木名局の開設は明治九年と言ふから、恐らく本島内に於ける最古の郵便局の一つに屬するにちがいない。此の由緒古く而して通信上重要な地位に存する本局の局長に、君の如き適任者を得た事は本島通信事業發達の爲め祝福すべきではあるまいか。賢夫人已に逝き、五女子中四女又嫁し、家庭は九十歳の高齡に達せる母堂と四女菊枝さんの淋しい暮しである。

伊地知福熊君

大島郡笠利村外金久



眞に偉大なる功勞者の記念碑は石や金に刻まれずして輝く文化の上に立つ、大正六年には産業發達の功に依り理事長小野田

氏より、次で「絨織物、砂糖代理人として滿十ヶ年克く盡瘁せられ其功に依り表彰す」との本文により大島稅務署長伊藤末政氏より、更に昭和十一年十一月十日には、砂糖代理人及土地賃貸調査の功に依り伊藤稅務署長より表彰された伊地知福熊君がそれである。君は峯丸氏男として明治八年九月二十八日鹿兒島市清水町に生る。明治三十八年二月同業組合検査員補となり同四十二年十二月検査員に昇り至大正四年迄其間、同四十年砂糖販賣組合世話人、四十一年外金久區長となり、同四十三年七月迄、大正三年絨織物總代理となり爾後三度衆選同七年再び區長となり其後衆選二次、全四年砂糖織物代理人に任命され引續き今日に至る二十有餘年其職を奉じ、明治四十年來、五期を果ぬる村會議員の要職を兼ねて今日に至る。其間、大正九年全十四年、昭和五年、全十年の四回國勢調査員全四年農業調査員に任命され引續二回、同二年小作調停委員、大正十五年、昭和十二年の兩度土地賃賃價格調査員、其他、陪審院、赤木名被服組合副長、糖業組合副長等の多くの要職を帯びたり。資性温厚篤實の人

自給功勞者 第七等

永田善熊君

大島郡笠利村手花部



圓滿完壁の品性は、常に積極的で消極的ではなく、從つて自己が最良最善と信ずる處に就ては、滿腔の赤誠を披瀝して、憚

ることなく應ずる色なく、自己の所信を斷行するの勇氣がある。言語に又は行動に活氣活力があり、生命の泉漲り溢れ、所謂至誠神に通ずるの境地に達するのである。全心を盡して誠意正心をして信ずる處に邁進する君は明治十一年十一月現所に喜厚厚氏四男に生る。明治三十二年徴せられて鹿兒島歩兵第四十五聯隊に入隊し、翌三十三年十二月歩兵上等兵に進級し翌三十四年任歩兵伍長、同三十五年滿期除隊、同三十七八年戦役に出征し各地の戦闘に参加して武功を樹て戦地に於て軍曹に進み三十九年凱旋、論功に依り勳七等に叙せられ、其後、軍人分會に貢献すること多年、大正九年村會議員に推舉され爾來衆選四期、十六ヶ年間其要職にありたり。其間、那産業組合總代二回、絨工業組合總代三回、土地賃賃價格調査員二回、國勢調査員一回、農會長二回、産業組合聯合會大島郡代議員、在郷軍人分會副長、自昭和十年三月至同十一年六月迄笠利村長等を歴任す。家庭、令室千代子さん(五七)の間、三男三女あり、長男清道君(二四)中學卒業、次男茂三君(二〇)高小卒目下東都在り、三男道夫君(一四)高小在學中長女てる子さん(三二)次女ちる子さん(三〇)三女とそ子さん(一七)東都淺草女子商業二年在校中、才媛の譽れあり、小學當時より首席にて一貫す。

本田百七君

大島郡笠利村笠利



當本田家は今日迄已に父子三人を軍人に出した名譽の家であり、尙ほ今後ドシ／＼軍人を出す準備がある。

父浦則氏は知名な敬神愛國者で、八十三歳の今日も毎朝四時に起床して先づ神に詣り、帝國の武運長久から家内の安全、家業の繁榮を祈念し一日と雖も之を廢せぬ熱心家であり、明朝に於て將又健康に於て壯者を凌ぐものがある。百七君は其長男、明治十八年六月十九日生。父君同様朝は四時に起き、夜は十二時を過ぎて就寝するといふ活動ぶりで、農耕の傍ら村會議員、糖業代理人として自治と産業兩方面に努力を效しつゝある。曾て青年會副會長、國勢調査員等として夫々功績淺からず、明治三十八年歩兵第四十五聯隊入隊中、二ヶ年目に上等兵に進み、善行證書を附與せられ、歸村後青年會副會長として會員の指導に當つたと云ふ模範青年でもあつた。此所から考へて君の今日あるのは寧ろ當然であらう。六男三女の子福者で、長男茂治君は臺灣第二聯隊に入隊して歸り、昭和十三年五月五日應召出征し、三男榮夫君も亦農學校卒業後臺灣第二聯隊に服役し、日支事變勃發と共に原隊に召集せられ、高橋部隊に屬して出征した。次男哲夫君は家庭にありて家業を助け、他は何れも實業學校並に小學校に在學中。

肥後武一君

大島郡笠利村邊留



肥後家の祖先は舊薩藩士にして鹿兒島より當地に移住したものである。先代實信氏は農業を營みて精勵する

傍ら各種の公職に奉じて部落發達の爲めに盡瘁至らざるなかつたが、昭和五年六十四才を以て逝去した。武一君は其の長男、明治二十三年七月十五日出生。小學校卒業後明治四十三年徴兵に合格して歩兵第四十五聯隊に入隊、全四十五年退營歸休すると共に部落青年會長に推され、五ヶ年間之れが指導に努めて成績極めて優良なるものがあつた。後ち區長に擧げられて區務を執る事數年、農業調査員、國勢調査員等を歴任し、昭和二年以來村會議員に當選する事二期、全七年笠利産業組合の創立を見るや、推されて組合長に就任し、本村の發達と尤も關係深き組合繁榮の爲めに全精力を傾けて努力盡瘁中である。本組合は理事九名、監事三名、組合員三百二十六名を有し、販賣年額四萬五千圓に達し、頗る優良なる成績を擧げつゝある。これも畢竟君の功績に歸すべきものであらう。家庭は夫人との間に四男四女あり、長男秀秋君は近衛歩兵聯隊に入隊し上等兵に進みて本年歸休した。

方面委員 盛彌一郎君



人は燈火を取つて樹の下には置かない。必ず臺の上に置く。暗黒は忽ち照されて事物は歴然とその形象を現はす。資性大

度快活、恰かも清風明月のやうな君が、全くの至誠至情からの流露である行爲も、人々の敬愛の的となつて今日噴々の信望を集めてゐる。明治十五年十二月十二日福要吉氏四男に生る。先考は明治十九年五月山間三郵便局長を拜命したる人である。君は長じて教育界に終生努力せむの意を發し問學自修、明治三十七年八月尋常小學校教員免許狀を取、次で同四十二年三月尋常小學校本科正教員免許狀を取、翌年三月本縣師範學校臨時小學校教員講習受講大正二年四月大和村名音尋常小學校訓導校長に補せられ、同三年三月住用村市尋常小學校訓導兼校長となり、同九年九月本村山間校長に轉じ、昭和三年三月笠利村屋仁校長、同年九月屋仁實業補習學校長に補せられ同六年退職して閑地に就き、同十二年四月本縣方面委員を拜命し同二年縣神職講習受講、翌十三年高千穂神社神職となりて今日に至る。其間、大正十四年、昭和五年の兩度國勢調査員、大正四年縣保護協會郡支會委員、昭和三年十一月大禮記念章拜受、男四、女四あり、長男修君(明大)次男貴君(帝京商業)三男秀央君(大島中學)各在學中長女、他家に嫁し目下神戸に在り。

軍人分會長 石澤清光君



アジア十億民衆の生活を、精神的にも物質的にも、大盤石の如く堅くつてゐた大陸封建プロツクのイデオロギイが我日本人に依て初めて動かされた。其第一期工作に當る政治經濟獨立の殊勳者は信長であり秀吉であつた。而して其第二期工作たる教學的獨立の殊勳者は素行であり、徂徠である。明治の二大戦役は其理想の遂行で、滿洲事變こそは其根本的完成の端緒、今次の支那事變こそは其歸結である。君は昭和七年十二月應召出征し、北支、王田附近の會戰に武勳を樹て、同八年十月凱旋し功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり、爾來、郷軍及び青年指導に努力し寧處の暇なき世紀の英雄である。明治四十三年三月二十日故李左氏四男に生れ、山間高小校を卒へて、昭和五年一月十日徴せられて鹿兒島歩兵第四十五聯隊機關銃隊に入隊し、翌々七年十二月滿期除隊し歸休と同時に應召征途に就く、其間、千葉陸軍歩兵學校に分遣されて在校一年、現在、昭和九年九月來の青年學校指導員、同十年來の青年會長、國防婦人會副會長、同十一年來の在郷軍人分會長、消防組頭並に自力更生委員、同實行委員等の諸要職を兼ねて活躍中である。家業農、家庭、女兒二を學ぐ。

自治功勞者 憲眞熊君



肉を蔽へば美しきものが隠れる。隠さねば卑しくなる。今の世の裸體畫と云ふは唯隱さぬと云ふ卑しさに技巧を留めては居らぬ、衣を奪ひたる姿を其儘に寫す丈にては物足らぬと見えて飽達も裸體を衣冠の世に押出さうとする。服を着けたるが人間の常態なるを忘れて赤裸に凡ての權能を附與せんと試みる。十分で事足るべきを十二分にも五分にもどこ迄も進んで只管に裸體であると思ふ感じを強く描出し様とする。技巧が此極端に達した時、人は其觀者を強ふるを願とする。美しきものを彌が上にも美しくせんと焦る時、美しきものは却て其度を減するが例である。人事に就ても滿は損を招くとの諺は是が爲であるとは文豪夏目漱石の草枕にいみじくも説く所は專ら畫師の立前から云ふ所であるが世の中の事、皆比理に悖るもの一つとしてない。我が憲君が教者として功成り、自治の首魁として名を遂げたのも、無理をせず只管努力を以て一貫したと云ふに盡きる。明治六年九月九日累世の舊家、三十九歳にして戸長を勤めたる故政要氏の嫡男に生る。明治二十八年山間校訓導となり二十五校長に進み在職十四年に至り、次で安方村操節子、宇檢村田檢兩校を歴任し大正二年五月退職、同五年常設學務委員、同九年村制施行最初の助役となり同十一年二代村長に推選され同十三年八月に至り爾來農事に努め漁撈、柑橘栽培を興しむ、其間郡農會議員たりし事八年、事蹟村公有林整理、資本整理、道路開墾等、令聞の間男五女四、長男正隆君、東京市區役所に勤務すと。

縣會議員 宮六君



明治三十三年鹿屋農學校を卒業して初めて鹿屋實業補習學校訓導を拜命した君が、縣會議員町長として本郡瀬戸内地方の代表的人物となつた事は、君自身としても案外の感なきを得ないであらう。人間の立身出世は其の人の器材如何によると共に時の勢である事を思ふと、其二つを合せ有する君の幸運を祝願せずには居られない。徐川農學校教諭として西京の道に専念しつゝあつた君は、明治四十一年より農事試験場に茶業講習を受け、明治四十二年より大正十年六月迄専賣局書記兼技手拜命、更に鹿兒島專賣局那覇出張所物品會計官として其の敏腕を發揮し、大正十二年郷村、會議員に選ばれ、全十三年東方村長に推さるると共に全部に其の存在を認められ、遂に縣會議員に當選して名職參事會員の要職に座し、本郡諸問題解決の爲め多忙な生活を送る傍ら、瀬戸内國防協會々長、町農會長、町産業組合長其他多數公職を提げて縦横の活躍に任じ、昭和十一年四月一日町制を實施し、初代町長として今日に及んでゐる。

君資性温良重厚、人格又高潔、周密の思慮を有すると共に所信を斷行するの勇氣あり、日常寡黙にして多くを語らずと雖も一度が壇上に立ちて所信を披瀝するに當りては雄辯四聲を驚かし、相手をして推服せしめねば止まない闘士の佛がある。

古仁屋尋常高等小學校

- 明治十一年十一月 尋常小學校創立
- 廿三年三月 高等小學校創立
- 廿五年一月三十日 教育勸語贈本下賜
- (尋常小學校)
- 廿七年二月廿六日 明治天皇、照憲皇太后陛下御影拜戴(高等小學校)
- 三十二年五月廿二日 教育勸語贈本下賜
- (高等小學校)
- 四十年四月一日 尋常高等小學校開校
- 四十二年十二月一日 古仁屋尋常小學校、古仁屋高等小學校分立
- 大正四年七月一日 古仁屋尋常高等小學校併置
- 四年十月三十日 大正天皇、皇后陛下御影拜戴
- 昭和三年十月十八日 今上天皇、皇后陛下御影拜戴
- 四年三月廿九日 奉安殿落成
- 歷代校長(尋常小學校)
- 永井源一郎 登 三七 彌 虎次
- 森 貞哉 彌 篤義 喜久 宮秀
- 小原 哲光 木場 貞二 押井牛太郎
- (高等小學校)
- 馬場 正義 西塔八次郎 齋藤 治實
- 坂本 昇 鹽津 保庸 寺島 竹二
- 富永 巖 武藤 正 三島 榮助
- (尋常高等小學校)
- 武田 信順 永井 龍一 大久保幸造
- 押井牛太郎 泉 長文 橋口 盛隆
- 古村 安治 竹田 房徳 西川 忠雄
- 玉江 末駒(理)

高千穂神社 守屋佐太郎君



大正十五年三月二十四日高松宮宣仁親王殿下の御參拜を忝ふし更に長くも社城に槍の御手植を給はり、超えて昭和二年八月七日恐れ多くも、一天萬乘の君の行幸を拜し社城に設らへ奉りたる御野立所に玉歩を狂げさせらるるの光榮を猶ひ、陸海將星其他貴顯の參拜多數に及ぶ村社高千穂神社は御祭神天津彦火瓊杵尊、應神天皇二柱を尊び奉る。其沿革、明治二年嘉島神宮御分靈拜戴同三年舊五月社殿建立、東方村民の氏神として鎮座あらせ給ふ。後大正八年工費二千五百圓を計上し其九月起工し翌九年十二月三十一日竣工、爾來、祭典は神社法規に基き大、中、小祭の式典を執行し來り、又氏子崇敬者逐年増加し、昭和十二年四月現在にて千九百二十七戸に達するに至る。其例祭は毎年舊曆九月十九日、昭和十二年神饗幣帛供進の指定を蒙り現在氏子間に縣社昇格の運動ありと、聖上陛下御野立所の聖址存在したるも昭和十二年の暴風に倒れたるを以て目下(同十三年三月)昭和一新會事業として行幸記念碑建設中、現社守屋君は舊姓屋、大正十三年改姓、明治八年九月十六日現所屋森豊氏男に生る。同三十二年沖繩縣教員檢定に合格し爾來同縣各小學校教師を歴任して至大正二年、歸郷後、本町嘉嶽校教員たる事一年、大正七年本村書記を拜命し昭和五年に至る。其間、神職試験に合格し大正九年二月三日當社掌を拜命して奉齋多年一日の如し。

元村長 元井砂益君

大島郡古仁屋町一七三



道は天地自然の道にして人は之を行ふものなり、故に天を敬するを以て目的となす。天は人も我も同一に愛す、故に我を愛する心を以て人を愛すべしとは大西郷の敬天愛人の趣意である。君は此言を箴言として克く努め克く學び、其一生を悔なき活動の歴史に埋め今や悠々閑雲を侶として餘生を樂しむの人である。明治元年一月一日(實際は文久二年八月生本年七十七歳とも云ふ)故砂廣氏次男に生る。寺小屋式に依り漢學を修め検定試験を受けて母校の授業生たる事一ヶ年、次で中等科検定試験に合格し鎮西村小學校教員たる事三年、明治十八年東上し、明治法律學校に籍を置きたるも中途にして退き警視廳巡査となりて三ヶ月、次で長野縣商工課官吏、千葉縣廳官吏等を歴任したるも、二十四年辭して歸郷し、其後、砂磨製菓業を開始し、東京、大阪、名古屋方面商況視察をなす事三年間、大いに自得する所あり、爾來、専心其業に従ひて産を成し、其後、公共的人材を以て郷人に囑目され大正九年には、第一代村長に推薦され在職二ヶ年間、其間、畜産組合長等兼務の公職甚だ多く、其前後、聯合村會議員、村會議員の任に在る事多年、事蹟として三十年來繼續中の海岸埋立工事(長さ二百間面積四町)、學校建築等多し。趣味讀書、男二女二、長男顯善君、東京中學卒、精米業長女トシ子さん、盛岡家に嫁し、次女八重子さん、中山家に嫁し目下古仁屋家政女學校教諭奉職中と

西本願寺 三原秀城師

大島郡古仁屋町一〇〇



古仁屋説教所沿革 明治十五年の交、沖繩大島に創建され大河内師、初代の法燈を點じ、後、朝日旅館に隣接して建てられ、大正六年、桃園惠晃師時代、現所に移り、同十四年故門徒總代中田五作氏等の盡力に依り現在の建築成る。歴代布教使、竹内祐信、兼廣教信、吉田、日種賢信、藤等影、栗山宏圓、石田致昭、桃園惠晃、河上法信、山本式部、久堀徹秀、姉崎靜秀等相嗣ぎ現三原師に至る。師は山口縣豐浦郡那井村、報恩寺住職三原鐵城師長男として明治三十二年四月二十日に生る。福岡縣小倉中學に入り大正九年三月卒業、直ちに上洛して龍谷大學に入り同十四年教學の積奥を究めて卒業、爾來、専ら佛道研鑽にいそしみ、昭和三年八月現所に、西本願寺布教使として派遣され、布教に専念して今日に至る。其間、昭和四年四月古仁屋幼稚園を開設し現在保母二名、園児三十五名を擁し、次で佛教男女青年會、並に婦人會を組織し一方大島郡布教副支會長等に推舉さる。現在、門徒戸數千二百戸總代中田五作氏、郡内五ヶ村に一ヶ所の劃を以て分所の設けあり、其内譯「實久、鎮西、西方古仁屋」「名瀬、三方、住用、十島」「笠利、龍郷」「宇權、大和」等

助役 平瀬彦吉君

大島郡古仁屋町百番地



心の胸に手綱許すな、との古諺もある如く、戦つて敗れ、破れて亦戦ひ、戦ふて止まず、屈せず、挫けず、心の手綱を引きしめて如何なる苦境に陥りても前途に光明を認め、胸中に餘裕あれば、自ら分別もつくであらうし、大勇も生ずるであらうし、月桂冠は何時の間にやら來て其頭上に輝くのである。資性沈着剛毅、不撓不屈、萬難を排して勇躍突進すると云ふ人格を有してゐる君は、正しく心の胸の手綱をひき締めて、萬難萬丈の生存競争の眞只中に馳驅してやまぬ戦士と云ふてもよからう。明治十六年九月二十三日登桃儀志氏三男に生れ昭和五年現姓に改姓す。古仁屋高等小學校卒業後、鹿兒島市博約義塾に入り在塾三年、明治四十一年三月熊本縣立農學校を卒へ、古仁屋小學校一ヶ年、西方村藤川乙種農學校二ヶ年と教員生活を経験し、次で渡臺し臺灣嘉義廳農林技手に聘せられ在職八ヶ年、後、家事の都合上歸郷し東方村農業技手を拜命、鎌倉郡實業學校三ヶ年古仁屋電氣會社一ヶ年の奉職を経て、昭和四年本町助役となり、爾來、三期果選、専心、町治の完璧を期して今日に至る。其間、昭和十一年の町制實施、縣道を國道としたる事、高千穂神社改築等功績偉指に違あらず、航路改善其他抱負亦多大なるものを藏す。男二女三、長女、尋常三年生と。

町會議員 田畑與太郎君

大島郡古仁屋町七五五



出でよは征師に從ふこと兩度、野戰攻城砲彈雨の中を馳驅して良兵の實を擧げ、入りては家業に精勵ては公共に盡瘁して公人の範となる、我田畑與太郎君の如きは眞に忠良なる臣民と云ふ可きである。明治五年八月三日祖峯氏長男に生る。嘉鐵小學校を卒業し教育者たらん事を志して獨學倦まず遂に明治二十二年准教員檢定試験に及第し其免狀を取て直ちに母校嘉鐵校教師となり奉職中、同二十五年徵兵に合格し熊本歩兵第二十三聯隊に入隊同二十七年日清交を絶つや應召出陣し看護兵となりて活躍し、戦後、勳八等に叙し瑞寶章を賜はり、凱旋後、再び嘉鐵校に教鞭を執り、三十七年日露戰役勃發するや其十二月應召、三等看護長として各地に活躍し、一等看護長に昇り、戦後、論功されて勳七等に叙し青色桐葉章を賜はり、爾來、農耕、養鶏等に精勵し、現大正十二年五月村會議員に推舉され累選四次、現に其職にあり、其間、昭和八年より精米業を兼業す。令閨ヤエ子さんの間、男四女二、長男信君、大阪北中學教諭、劍道五段の陸軍准尉にて昭和十二年七月應召出征、次男實君、早大工科出の工學士、大倉組に奉職、三男巖君、早大工科等商船機關科出身、大阪名村造船所技師、四男村君、東京中學出身、哈爾濱管理局勤務、四女長女美恵子さん、鹿兒島女子興業校卒、次女員子さん、名瀬市美高女卒、何れも自宅に在りて因みに君の一家三人兵役服務者を出したるに於いて昭和七年一月四日當路より表彰の榮に浴したる名譽の家也。

方面委員 河野瀨五郎君

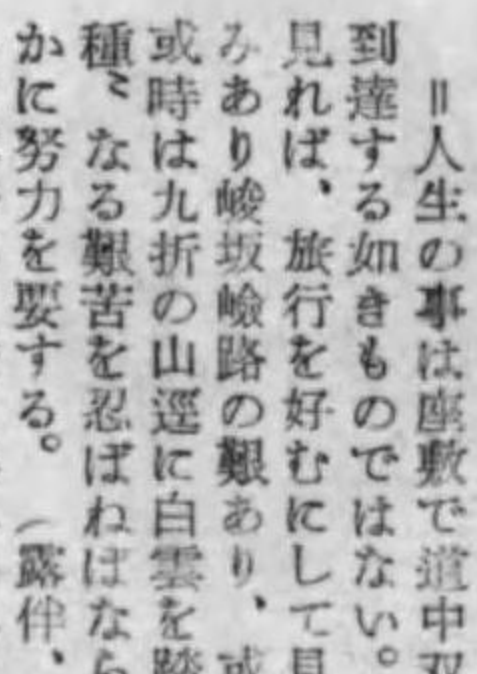
大島郡古仁屋町



右者元多年小學校長勤務致シ現在當村會議員及大島同業組合代議員並に本縣方面委員ノ要職ニ有之且又大正十一年以來茲ニ御紹介申上候也 二十有餘年間本場大島紬ノ製造ニ從事シ専ラ之ガ研究改善ニ努力致居ル者ニ有之從ツテ商賣ノ取引上ニ於テモ確實ナル事ヲ信認致候間 以上は昭和十年四月十五日日本村長茨木伊能良氏署名、本場大島紬製造元河野瀨五郎氏即ち君を天下に紹介したる一文である。其略歴、明治十二年十二月一日嘉明氏次男に生る。明治三十二年四月鎮西村押角小學校に奉職し次で同村秋徳和泊村沖永良部、同和泊、實久村西阿室、鎮西村池地、名瀬、古仁屋、阿鐵等各小學校訓導を歴任し大正十一年三月迄二十三年間繼續、其間同九年より三年間阿鐵小學校校長を勤務、同十一年春、大島島廳の命に依り福岡、廣島、大阪、京都、名古屋、東京に出張し學事並に織物業視察をなす。其四月より至八月、平和紀念東京博覽會本場出品事務員被命、専ら大島紬の宣傳に従事す。其間、東京市民自由大學に於て教育系教哲學衛生經濟理學等、其年九月歸郷し大島紬製造業を開業し現在多數の人員を役使し織機六十臺を有するに至り、其間、村會議員一期、大島同業組合現任議員等を歴任し目下家業の傍ら方面委員を現任す。令閨の間、二女、長男功君、大島中學、次男正君、大阪高等電氣學校に在學、長女菊枝さん、鹿兒島市實踐高女卒、二女ママ子さん、在小學校。

町會議員 朝原久君

大島郡古仁屋町七五五



人生の事は塵敷で道中双六をして花の都に到達する如きものではない。眞實の旅行にして見れば、旅行を好むには見ても尙且風雲の横みあり峻坂險路の艱あり、或時は磯路に阻まれ或時は九折の山逕に白雲を踏分け青苔に滑る等種々なる艱苦を忍ばねばならぬ、即ち其處に明かに努力を要する。(露伴、努力論より) 而して其努力に依り與へられた快樂こそ眞の快樂である。這は與へられた天賦に導進し全幅滿身の努力を傾注した者でなければ味得する事は出来ない。君こそ其努力即快樂の体験者である。明治十三年二月十四日生、明治三十六年補充兵に徴せられ鹿兒島歩兵第四十五聯隊に入隊し三ヶ月服務を以て除隊、翌年六月日露戰役に出陣し同三十九年五月凱旋、上等兵に進みて歸郷、功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はる其年臺灣總督府巡查となり渡臺し臺中州警察界の人となり格勤十數年、巡查部長に昇り大正七年歸郷、同九年古仁屋要塞司令部員となり至同十四年、同十二年五月村會議員に推舉され町制施行後と雖も引續き選を果して現在五期目、本町最古參議員として當局並に議員間に敬重され、一方、同十四年開業したる司法代書業に出精して今日に至る。事蹟中、財政調整、荷揚場、屠場、魚揚場建設等特筆に屬す。令閨の間男三女三あり、長男辰雄君、次男辰三君、何れも在神戶、三男武成君、京都立命館大學在學中、長女ヤツ子さん嫁して在神戶、二女タク子さん、神戶女子商業出身、嫁して東京に在り三女一枝さん、在自宅と。

軍事功勞者 第七等 眞田清一君



君は清良氏の嫡男、明治十三年十月十日を以て當町に生る、二十三年徴兵として歩兵第四十五聯隊に入隊、選拔せられて陸軍戸山學校に學ぶ事二ヶ年、全三十七年六月日露戰役に應召して留守隊付となり、九月五日に進み翌年一月軍曹に昇りて征旅に上り、凱旋後戦功により勲七等に叙せられ青色桐葉章を賜つた。後、臺灣總督府巡查を拜命して臺中州勤務を命ぜられ、四十三年官を辭して歸り、漁業に従事する傍ら郵便局員に奉職する事二ヶ年、役場書記三ヶ年、在郷軍人分會長五ヶ年に歴任し、現に大正十三年以來四期目の村會議員、昭和二年來の村會計検査員を兼ねて公事に精勵中である。先年町制施行に際し先考清良氏と共に自治功勞表彰を受けた。趣味は宗教、哲學、盆栽、長男榮君は島姓を同じ現に警視廳巡查を奉じ、次男國夫君は早稲田大學工科に在學中。

青年分會長 第八等 豊島惣榮志君



花は櫻木人は武士、古來我國社會の變遷に點綴して櫻花の聯想相離れず、神功皇后が皇城を若櫻宮と名付け給ひしを初め櫻

花に因めるもの幾何なるを知らず大宮人の好歌題たりしは勿論、田草とる男までが之を美化し、特に甲冑に甚だ相應しく、義家の吹く風と忠度のゆきくれてと詠せしより、下つては備後三郎の木を削りて詩句を題せるなど、皆戦亂に一種優雅なる趣味を添へたり。その櫻の對たる秋水三尺の皎たる日本刀は或武士道精神の象徴である。實性内柔淡刺出でては國家の干城として練武に明暮れ、入りては郷邑の中堅人物として常に其發展に献身し、一方軍人精神の涵養と努力してやまない君こそは眞に日本國民の典型と云ふも溢美でない。明治二十九年十一月十七日磯次郎氏長男として小名瀬に生る。郷邑小學校を卒業して家修養數年、大正五年十二月徴せられて臺灣歩兵第二聯隊に入營し、同七年十二月歩兵伍長に昇進、翌八年十二月更に軍曹に進み、十一年十二月任官、昭和二年七月勲八等に叙し、瑞寶章を賜はり、同三年四月七日豫備役に編入され除隊歸郷し、其年九月町立青年訓練所指導員を拜命し、同五年七月十四日日本町在郷軍人分會長に擧げられ、本町青年會副團長を兼ねて活躍中である。其間、昭和十年九月十五日帝國在郷軍人分會長より功勞章下賜、同十三年紀元節、大島支廳長より記念品並に表彰を賜はる令閨の間男一女四を擧ぐ。

消防組員 蘇我清吉君



道を行ふ者は固より困厄に逢ふものなれば如何なる艱難の地に立つとも事の成否身の死生などに少しも關係せぬものなり、

事に上手、下手あり物に出来る人出来ざる人あるより自然心を動かす人もあれど人は道を行ふもの故道を踏むに上手下手もなく、出来ざる人もなし、故に只管道を行ひ道を樂しみ、困苦艱難に逢ふて之を凌がんとならば彌々道を、困苦艱難に樂しむべし、予は壯より艱難といふ艱難に罹りし故、今はどんな事に出會ふとも動搖は致すまい、それだけは仕合せなりとは西郷先生の垂訓である。消防精神を以て一貫したる君の經歷の一斑恰かも此垂訓を遵守して不退轉たりしが如し。古仁屋消防組は創立大正元年、初代組頭川内助次郎氏、二代志穂良三、三代即ち君に継ぎ、現在組員總計六十名、第一部頭田中伊久友君(小頭二、消防手二六)、第二部頭藤島茂君(小頭二、消防手三四)一ヶ年經費一〇〇〇圓、ガソリン一、和洋ポンプ一、君は明治二十九年八月十六日嘉太郎氏次男に生れ、稍長じて川邊中學に入り三學年修業、鹿兒島市縣立二中に轉じて四年級半ばに病を以て退學、大正八年臺灣總督府調査課勤務となり至同十二年迄、其年歸郷し同十三年消防手、翌年消防組小頭となり昭和五年組頭を拜命し、同二年推擧され兩來選を兼ね來りたる村會議員を兼ねて活躍中である。其抱負納稅完納思想普及の事、家畜市場設置の事等、趣味園藝、令閨の間女二、小學校に通學中。

町會議員 森武英君



古仁屋小學校高等科を卒業した後、大島稅務署並に司法省職員に奉職して歸り、後半世を郷土の各種公職に捧げ、郷黨の爲めに其の晩節を竭しつつある君の姿こそ、眞に崇敬に値するものではあるまいか。

斯の人の心を心とし、其行ひを行とするならば自治の振興も乃至は非常時局の克服も、敵て難中の難事ではないであらう。君は先考貞次郎氏の長男、明治二十年十二月十日を以て當所に生れた。古仁屋小學校高等科を卒業したる後、明治三十九年八月鹿兒島稅務監督局大島稅務署職員拜命、同四十四年九月八日願に依りて職を退き、同年十一月司法省廳を奉職、大正二年七月十日官を辭して歸つた。同十年一月五日古仁屋水力電氣株式會社に入社して會計書記拜命、幾何もなくして支配人に登用せられ、拮据經營十六年の久しきに及び、昭和十二年一月三十一日職を辭した。これと同時に鹿兒島新聞社古仁屋支局主任を囑託せられ、更に推されて町會議員に當選し、翌十三年六月八日古仁屋町公益實屋主事に擧げられ、何れも現職にありて鋭意職務の遂行に努力中である。其の他二區戸主會副會長、鹽小賣人組合長を兼ね、富國徵兵保險相互會社代理店を經營中。高千穂神社増築に功績があつた。趣味は盆栽いちぢり、一女照子さんは鹿兒島實踐高女を卒業して歸り、古仁屋幼稚園保母に奉職してゐる。

産業組合長 元田二次郎君



輓近のラヂオの進歩に就て吾々は大いて教へられるものがある。それはどう云ふ事かと云へば吾々の周圍、屋外屋内の何處

をも問はず日本國中の放送局の音波が一杯満ちてゐるのだと云ふ事、もつと精密な機械を備ふれば世界中の迄聞き得る。そこで吾人の心にもどうかよい聴取器を備へたいと云ふ事である。心の中の聴取器を能く働かせよと云ふ事は農村窮境の打開には産業組合の組織こそ然る可しとなれば一致協力して之を大にする事が出来る。精神の安定、魂の満足、知識慾の充實、自由自在で、極端な突飛な學說やら輕佻詭激の思想に耽つたりする必要は少しもない、心のラヂオセツトを新しく新しく改善に餘念なく飽く迄も人生の眞の目的たる眞善美の探究に精進しつつある人に我元田君であるは吾人の欣快とする所である。米益氏次男、明治十八年十二月二十六日生。西方村藤川農學校を卒へ名瀬町水産組合講習所大正二年卒業検査員となりて今日に至り、次で産業水産組合検査員となりて今日に至り、次で産業組合主事となり昭和十一年三月十九日濱區購買組合成るや初代組合長兼常務理事となり令室、子息二人、傭人一名を便役して活躍中、現在組合員九十餘名、一株五圓、日用品全部配給、君は尚、名譽職として昭和十二年補欠當選の町會議員並に農林省囑託地方事情調査員、第四區副會長、衛生代議員、小學校後援會評議員たる他有隣生命代理店をもなす。

元助役 森勇吉君



「借金に個人にしては國家に於ても決して恥辱に非ず、金も亦た一種の物質のみ、吾人が金を需要するは、尙米を需要し、

薪を需要するが如し、吾人が金錢業者に向つて金を求むるは、八百屋に向つて青物を求め、肴屋に向つて肴を求むるが如し、アムストロング會社に車轡の注文は、國家の光榮として意氣揚々之を披露し、ロスチャイルド家に向つて借金をするは、國家の恥辱とし、慚愧として之を掩はんと思ふ、亦た思はざるのみ、若し必要なる物質の供給を仰ぐを恥辱とせば、兩者均しく恥辱也、恥辱ならずとせば兩者均しく恥辱ならざる也、吾人敢て借金黨の爲めに、氣を吐くにあらざれども平凡の眞理此の如きのみ、但た借金の恥辱たるは借りて返さぬにあり」とは往年、巖峯先生の時務一家言に於てなしたる論である。君は大正十年五月、百四十七銀行代理店を開設して(内昭和三年四月一時休業、同六年二月に及ぶ)今日に至り大いに地方金融の爲に盡し事業界に貢献したる人、明治九年七月十二日故實省氏(醫師、八十歳を以て他界)長男に生れ、明治三十七年本村書記を拜命し稅務、庶務歴任、次で東方村收入役を経て初代助役に就任し在任一期、大正十年四月退職、同十二年五月村會議員に推擧されて果選三期、其間海岸埋立等の事蹟あり、九大教授農學博士の令弟あり、令室善子さんの間、男一女四、男養臣君鹿兒島市荒田校訓導、長女タキ子さんが在神戶、令室ミ子さんが在臺灣、三女クミ子さんが在、令室の許にあり、四女スマ子さんが一高女家政科在學中。

郵便取扱所長 元井薩男君

大島郡古仁屋町河本名

庭園にも美しきは花ばかりに非ず、果物、野菜の如き、其葉の美観、決して花草にゆづらざるのみならず、果實の熟したるは、花とも異りて麗はしきものなりとは貝原益軒先生の有名な農事生活論である。農事的生活が士道の一の修養法とすべき故に、農民は一轉すれば武士たるを得べしとの近世の所謂農兵思想の根源は實に斯の如き趣味の生活から發した。尊農思想が如何なる時代にあつても庶政一新の原動力であつたと云ふ君の卓見は、其中に蒼生幸福を欲求する君の全貌が窺はれて悦ばしき限りである君は明治四十五年三月二十六日、元井元惣氏の長男として現所に生る。嚴父は農業にいそしみ精農を以て鳴る人、君は少時、上阪し日本大學大阪中に入りて昭和七年三月卒業、次で渡浦し關東廳逓信官署に奉職し同十一年七月に至り歸郷して其九月一日現所に郵便取扱所を開設し同時に初代所長を拜命し、恪勤精勵して今日に至る。嚴父の後援又熱烈を極め、將來、電話交換事務電信取扱開始の抱負を有すと。齡未だ二十七歳、其前途利目して見るに足る。趣味闊大。

元村長 加勇四郎君

大島郡古仁屋町嘉織



嘉織唯一の士族たる君は明治四年八月五日政謙氏長男として現所に生れ、少時寺小屋式教育に依り開學し後嘉織小學校に學び最も漢學を攻究せり。十五歳より十九歳迄農に從ひ、明治二十五年村役場用掛拜命、稅務、教育、衛生、勸業、庶務主任を歴任する事十六有六ヶ年、同四十四年四月一日村収入役に擧げられ在職八ヶ年、大正五年五月十九日に至り、其翌二十日日本郡鎮西村長に推選されて在職二ヶ年、次で東方村長に推選されて同二ヶ年、同九年七月改選再び擧げられて在職一ヶ年、大正十二年五月村會議員に推選され町制に改まるや町會議員に擧げられて今日に至る。其間、明治三十年古仁屋高等小學校に教育資金百圓寄附、同四十二年宅地價値調査員、大正三年古仁屋婦人會長、同五年郡畜牛馬養豚畜産組合東方支部長、同七年東方村青年會長並に教育會長、同十年より至昭和十一年迄有限責任大島信用販賣購買組合東方支部長、同十二年東方村農會職員、會計検査員嘉織生活改善會長、同十三年學務委員、昭和八年同産業婦人會聯合會長、昭和十一年古仁屋産業組合長兼理事となり在職一ヶ年等を歴任、天性温厚和易の人、四男二女あり、長男正君、神戸川崎造船所勤務、二男正道君、臺灣嘉義稅務署勤務、三男正文君、步兵軍曹として目下中支戦線に出征中、彼地より金十圓を兵器購入費に献ず、之れ本郡最初の美事也。四男正明君、朝鮮稅務監督局勤務、女二何れも嫁す因みに云ふ。子息等は明治四十年改姓して全部加藤姓を稱す。

小學校長 有川董晋君

大島郡古仁屋町嘉織



嘉織尋常高等小學校沿革大要 明治十六年より同二十年まで嘉織小學校と稱し同二十一年より同二十九年まで簡易小學校、同三十年より昭和二年まで嘉織尋常小學校と稱し昭和三年高等科を併置し以來、現稱の嘉織尋常高等小學校となり、同八年三月高等科一學級を増設し、同十一年八月御眞影奉安殿竣工す現勢(昭和二年に據る)児童數二八〇、學級數八、教員數九、歴代校長綠綱藏、宮下道雄、渡常熊、靜百太郎、吉田島則、寛岐助、中島爲英、靜百太郎(再)に次ぎ君、九代校長として昭和八年四月赴任して今日に至る。君は明治二十七年六月五日日本郡口永良部島知名村屋子母四九〇番地に生る。郷色小學校卒業後、育英界に志して本縣師範學校に入學し、大正三年三月三十一日同本科第一部を卒業し同時に小學校本科正教員免狀を下附され、直ちに生地たる本村知名尋常高等小學校訓導に任ぜられ在職約十年同十二年三月本村上城尋常高等小學校訓導兼校長に榮進し其歳十月、三轉し本村島尻尋常高等小學校校長に歴任、昭和四年神之嶺校長に轉じ同八年三月當校長となる。

町會議員 冲 豊英君

大島郡古仁屋町嘉織

「人が氣に喰はん、喧嘩をする。先方が閉口しない、法廷に訴へる、法廷で勝つ、夫で落着と思ふは間違ひだ。心の落着は死ぬ迄焦つても片付く事があるものか、寡人政治でいかんから代議政治にする、代議政治がいかんから又何かしたくなる。川が生意氣だつて橋を架ける。山が氣に喰はんと云つて隧道を掘る。交通が面倒だと云つて鐵道を布く。夫で永久満足が出来るものぢやないさればとて人間だもの、どこまで我意を通す事が出来るものか」とは漱石先生の猫が語る自我觀である。茲で人間反省の必要が起る。さりながら反省と云ふも其根底に樂觀の人生觀なき人は、佛教的に云へば人皆佛性の事實を否定する人、科學的に云へば宇宙の創造力を信ぜない人であるから斯る人に眞の生活は出来ぬ。眞の意味に於ける自己反省の人、斯くの如き人を求めて君がある。君は米濟氏三男、明治二十五年五月四日生、嘉織青年團長六ヶ年を経て大正四年區長に擧げられ同六年再選、同九年より昭和六年迄連任、同六年町會議員に推選され、翌七年衛生組合代議員、同九年衛生組合長、同十二年區長となりて現に其職を帯ぶる他職として大正九年以來の砂唐代理人、昭和八年來の袖代理人を兼ねて活躍中である。區長として部落事務に盡すを眞樂とするの一事に君の人物の全貌を窺ふに足る四男一女を成し、子息等沖島姓に改め長男順君、次男勝美君、共に大阪市土木課に勤務、三男三郎君、船員となり在關岡、四男信義君、鹿兒島中學校在學中、長女ミツ子さん古仁屋家政女學校卒業、在自宅

町會議員 清 坊君

大島郡古仁屋町清水

「昔は〜」と稱して昔を禮讚し、現代を罵り偶々自己が逆境に立つ事あれば愈々以て世は澆季末世に墮したりと浩嘆し、人情が浮薄になつたなどと云ふ人があるが、斯る人は時々新なる創造を爲しつゝある天地の働きを度外視し、自己の智慧の行詰りに氣付かず、突きとめた考へ方をする哀れな人である。太陽の運行と逆に人生を歩まうとする人々である。君の人生觀は人生樂觀には至極の根據あれど悲觀に根據なし如何に固定せしめんとしても固定しないのが天地人生の實際であるから悲觀は畢竟人生最大の誤謬であると、茲から樂觀論が出て凡ての個人を善人と見、人の爲に我を忘れ、そこに自己の喜びを感じる君の如き世にも尊き人となるのだ。君は明治十九年九月四日喜應積氏長男に生る。青年會長三ヶ年を経て明治四十二年より至大正二年村世話係、全四十五年郵船、漁業組合會計一ヶ年全十三年の交遊經簡製造業、昭和五年の交遊農事專業、昭和六年區長に擧げられ、其年五月村會議員に當選して爾來果選二次現在に至り、一方、其年砂唐、織物代理人となりて活躍中である。公的事蹟に河線工事、養蠶稚蠶飼育所設置に奔走したる事等最も著る。令閨の間四男一女を擧げ、長男克己君、神戸電氣局に勤務、次男正男君、三男信彦君、四男利徳君何れも現地に在り長女ツギ子さん、古仁屋町家政女學校に在校中である。

裁判所書記 谷 前忠君

大島郡古仁屋町古仁屋

君が主任として奉職する當大島區裁判所古仁屋出張所は明治二十九年十月一日開廳、大正七年六月二十二日古仁屋出張所を東方出張所と改稱、同年七月十五日より之を施行、昭和十一年三月二十七日再び舊稱、古仁屋出張所の名稱に復し其年四月一日より施行して現在に至る。歴代書記、都城植義、木原千代彦、濱島義徳、宮原清二、豊重太郎、沖元隆、大脇二太郎、永田百太郎、久保傳治、榮竹太郎、土持綱義、今井文賀、泉伸熊、宮山永弘、窪園和助諸氏相次ぎ十六代の君に至り、現在事務員二名勤務す。君は明治二十五年六月十三日日本郡龍鄉村龍郷三〇〇番地に生る。明治四十三年三月私立大島郡教育會開催の小學校教員養成講習會に於て所定の科目を受講、其年十二月尋常小學校准教員免許狀下附、同四十四年五月本郡小宿小學校代用教員拜命、其六月准訓導となり在職約二年、大正三年四月退職、同六年九月鹿兒島地方裁判所臨時雇となり大島區裁判所勤務を命ぜられ同七年同上主任、同九年十二月書記試験に合格して裁判所書記となり同裁判所字檢出張所勤務を被命、同十一年知名出張所勤務、昭和四年七月一日東方出張所勤務となり赴任し來り爾來、古仁屋出張所と改稱後も其任に在り、恪勤精勵一日の如く現在に至つた。

村會議員 鍋島眞俊君

大島郡大和村大和濱



宇宙は唯平均物は皆平均を求むるなり、而して其平均を求むるに各齋者の日済を督促する様に吾よりあせりて、今更せ明日返せとせがむが小人にて、所謂大人とは一切の勘定を天道様の銀行に任して吾は眞一文字に吾分を譲ぐ者ぞとは蘆花山人の有名な不歸の一言に云ふ所、一切の勘定を天道様の銀行に預ける、既往幾千歳大にしては國家の重器に任じて鴻業を遂げ、小にしては一郷一家を齊へ功成り名遂げたる人物は皆此心懸け果つて最後に榮光が輝いた。我鍋島君も其隨一人である。君は慶應元年十一月十二日生、眞善氏嫡男、明治十六年大柵尋常高小卒業となり在職四年、次で恩勝校二年、今里校八年等と歴任し同三十一年退職、翌三十二年村勸業委員となり至二十四年六月迄、三十四年秋大島刑務所書記となり至三十九年六月迄、自同四十年至大正五年大同生命社員同代理店長、同三十年本村稅務主任任命、至同十年五月迄、昭和二年六月村會議員に推學され引續き三期累選今日に至り、同五年米の大島信用販賣購買組合大和村總代議員、同六年米の農會議員、兵事會議員、同十二年米の郡畜産組合代議員、評議員及び銃後對策委員、恩勝尋常高等小學校、青年學校後援會顧問、出納検査委員等を兼ねて活躍中、三男一女を有し長男師範卒、三方村小學校訓導、次男、大阪に吳服商、三男、恩勝校訓導に奉職中。

小學校長 重久富吉君

大島郡大和村恩勝

富家良田を買ふを用ゐず、書中自ら千鐘の粟有り、安居高堂を架するを用ゐず書中自ら黄金あり、門を出するに人の隨ふなきを恨むこと莫れ、書中車馬多く羨がるが如し、妻を娶るに良媒なきを恨むこと勿れ、書中女あり顔玉の如し男兒平生志を遂げんと欲せば、六經勤めて窓前に向つて讀めと、這は眞宗皇帝の人に訓へたる所、教育の要諦も茲に存するが如し、斯の如き境地に悠々し不言實行主義を抱持して青少年子弟の教育に邁進しつゝある君は實に當代稀なる教育者と謂ふも溢美の言ではない。明治三十八年四月二十七日現所、清二氏長男に生れ、郷邑小學校卒業後、育英者を以て世に立たんとし本縣師範に入學し大正七年同校卒業、直ちに本郡龍郷村大勝小學校訓導を拜命し在職二ヶ年、次で小慈校長に榮進して在職四年、古仁屋小學校首席三年、油井校長五ヶ年等を歴任し昭和十一年三月三十一日付、當恩勝尋常高等小學校長に補せられ、更に大和村青年學校校長兼務被命、校區男女青年、婦人會長、國防婦人會長をも兼ねて今日に至る。當校沿革は明治八年創立當時、郷校所と稱し校長太真幹氏を係と稱せり同三十七年恩勝小學校となる迄簡易小學校と稱せられ本年迄に四十二回卒業生を送ると現在、兒童數二九三名、君は家族、令閨の間二男一女あり、長子、福山中學校に在學中と。

村會議員 奧民熊君

大島郡大和村大柵



「幽居夢覺讀 菜烟、雲境温泉 洗世緣、地古山高靜於秋、不聞人語只看天」 「提出都門稍散襟、綠葉蔭下碧溪灣、米炊丹洞胡麻飯、朝暮穿林手隱心」之れ皆、大西郷の大人格を寫したるもの、君は此風格を慕ひ、常に心身を愉快なる思想の棲居となし、光明ある行手を常に目指して迷はず恐れず、獨立自營の旗を双手に翻して進んで來た。人生は斯る時、初めて希望に輝く意義ある世界と化するのである。君は生來の眞摯な熱意と、不斷の修養に仍て尙一層の研精を信仰し、眞に改々として農業に従事し、上は神道を信仰し、下は人道を尊び、村居の星霜移り過ぎて自然形成されたる信望、名譽愈々昂まり、社會的進出尙今後にありと期待さるゝ稀なる人格の士である。明治十七年八月十三日喜代氏民氏次男に生る。明治三十七八年役に際し特務兵として従軍し、大連上陸、鐵嶺の東南八里の地點迄進出し殊勲を樹つ、大正八年大柵産業組合書記となり在職一年、昭和二年同検査役に選任され、同八年、農會議員に擧げられ爾來累選し、同十二年六月擧げられたる村會議員並に全十月の銃後對策委員、全しく大島振興委員、大柵校後援會顧問等の名譽職を帯び活躍中である。男二女三あり、長子、齡二十六、現大阪市湊區住友合資會社に勤務すと。

村會議員 里宮英君

大島郡大和村大柵

處世の要訣は終始一貫にある、これと思ふたならば萬難を排しても必ず成し遂げるといふ意志と努力とがなければならぬ。「世の中を何の糸瓜と思へどもぶらりとして暮らさるれもせず」と狂歌に詠じられた昔しから、生存競争の逐日に激迅となりゆく今の世に、社會の風波を乗切つて目的の彼岸に到着するには、どうしても此の確固不拔の意志が必要である。實性剛毅朴直、加之、意志の強固なること盤石も當ならずといふ君は、如何なる盤根錯節に遭遇しても毫も遷易することなく、一路直進已が正しき路を進み來つた人格者である。明治二十九年九月一日久三郎氏長男として現所に生る。大正四年の交、夙も現に家職とする大島紬の製造を開始し漸次大を加へて業者間に重んぜられ、昭和四年には大島紬總代議員に擧げられて字檢、大和兩村業者を代表し、同六年全大島新興産業助成計畫の一部として大柵共同染色工場創立成るや常任監事となりて嚴正其實に任じ、同十年大柵産組監事(十、十一年販賣部員)となり、一方、昭和十二年再選されたる村會議員の職を帯び活躍中である。其間、大正八年青年團長、同十年村會議員、昭和四年區長となり、同五年産業調査員、土地賃貸價格調査員等に擧げられ克く其職を盡して令聞を昂めた令室の間一子あり、現在、大島中學四年生と。

産業組合 常務理事 中田三吉君

大島郡大和村大柵

實踐躬行を以て終始一誠意、神と共に歩むの心を堅持して勤勞體驗の價値を實踐するは外ならぬ君の生活態度である。百聞は一見に如かず、實験は總てを超越すとは洵に千古不滅の金言、經驗の價値が理論に勝る事は信じなければならぬ絶對の眞理であり「行はざるは眞に知らざる也」て王陽明學派の哲學説は萬人の信奉すべき根本的原理であらう。君は實性温厚且温順、公明正直の人格を以て恐れず慮せず、信する所を行ふて人倫の大道、社會の頂角を歩み一歩踏しめて來た農漁村人の範である。前積氏長男として明治十九年一月十九日現所に生る。大正十三年本村書記を拜命し稅務係を奉じて在職一年、後、戶籍係となり勤続、昭和八年に至る。産業組合に關與したるは其、本村書記拜命と年を同じふして大島販賣大和村支部書記となり、夜間該事務を見たりと云ふ。昭和九年大柵産組が保證責任に變更さるるや常務理事となりて専ら之が發達を期し今日一段の進展を見るに至る。現在、大柵校後援會委員兼任、國勢調査員たりし事二回に及ぶと。因みに本産業組合は、大正三年六月有限責任を以て設立され君は永く其組合長たり、昭和九年改組と共に村長、其長となる現在組合員二九三名、一口二十圓、資産二千三百八十二圓、貸金七千三百七十七圓、貯金總額三萬二千四百五十三圓、君は令室の間四男二女、長男、農事に勤み、次男大阪住友伸銅所勤務、三男名瀬郵便局勤務、四男大島中學在学中。

産組理事 區會議員 長 中山甚榮君

大島郡大和村津名久

朝蒙朝恩夕焚坑、人生浮沈似晦明、縱不回光葵向日、若垂改運意雅誠、洛陽知己皆爲鬼、南嶼囚獨竊生、生死何疑天付與、願留魂魄護皇城、これ大西郷が沖の永良部島に窮命中の詠、よしや光をめぐらすとも、ヒマハリは自づと日に向はう、運を改むるなくとも意は誠を推さう。それが翁の志であつた。茲に於て生死何ぞ疑はん、天の付與といふ念が生ずる。明治四十年、歸郷十七歳を以て區長に擧げられ、兵役職務に依り其間、其職にあらざりしを除き、一貫今日迄其職を累ね、尙青年團長たる事、創立以來、現在に及ぶ我中山甚榮君の風格に接し、吾人、亦、光をめぐらすとも、ヒマハリは自づと日に向ふ、運は改むるなくとも、意は誠を推さうの志の澎湃たるを感ずる。君は明治二十三年四月十五日坊主氏嫡男に生る。明治四十二年徴せられて鹿兒島歩兵第四十五聯隊に入隊し、在營中、朝鮮羅南守備に派遣さる。除隊後、大正三年大島紬製造業を開き同八年迄従事、同十二年運送業を開始し大津丸を回漕し主として名瀬港に運航しつゝ今日に至る。其年六月二十六日村會議員に推學され爾來累選四期、大和橋架橋を就成し現に縣道促進委員並に昭和十一年來の村産業組合理事、同十二年來の銃後對策委員等を兼ね活躍中、其間、昭和五年家屋調査員同九年恩勝尋常高小校後援會委員等となる。令室の間子女二を擧ぐ。

村會議員
漁業組合代表者

蘇畑新熊君

大島郡大和村今里



人智を開発する
ことは愛國忠
孝の心を開く
なり、國に盡し
家に勤むる道明
らかならば、百
般の事業は従つ
て進歩すべし、

或ひは耳目を開発せんとて、電信を掛け、鐵道を敷き、蒸汽仕掛の器械を造立し、人の耳目を奮動すれども、何故電信鐵道の無くては叶はぬぞと云ふ處に目を注がず、獨りに外國の盛大な羨み、利害得失を論せず、家屋の構造より玩弄物に至る迄一々外國を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、國力疲弊し人心浮薄に流れ、結局は日本身代限りの外有る間敷也とは大西郷が人々に訓へたる所、西郷先生の政治思想といふも其思想は簡單である。其言葉は簡易である。然しながらその單純は實に大道の直接なる躍動である。凡ゆる思想學問を育くむ最も親愛なる母の相である。尊い親の懐りを去り世間に荒び果てたる政浪兒にも等しい當世流の思想言論界にこの單純簡易を味ふは實に不盡の理想があるではないか。我蘇畑新熊君の人物に吾人、この素朴な人間味を感ずる。蘇畑の姓、又清新なる霧圍氣の深も愉快である。宮孫氏二男を以て明治二十九年八月十日に生る。大正七年青年會副會長に擧げられ在職二年、現在漁業組合船大徳丸に乗じ、日、遼漁の男性的職業に従事し、一方同漁業組合代表者、昭和四年來の今里産業組合監事、全十二年來の村會議員並に統後對策委員等の公職を帯びて活躍中、因みに云ふ、漁業組合は昭和六年設立、資金一萬二千圓、組合員六十三名、漁撈年額二萬圓餘と、令聞の間二男、三女を擧ぐ。

建村仲鼎君

大島郡大和村今里



大島郡大和村今里尋常高等小學校沿革
明治十三年二月七日創立、當時簡易小學校と稱す。同十二年三月二十八日新

學令に依り今里小學校と改稱され、同三十二年御眞影奉戴、全三十五年三月十三日専任校長配置され柏權五郎氏初代校長として赴任、大正十四年校舍新築、全十五年高等科並に青年訓練所併置、昭和十三年御眞影奉安殿新築工事着手、工費千三百圓、校區民寄附並に労働奉仕(内、村補助三百圓)、現在、児童數三百名、青年校生徒百八十名、現校長たる君は明治二十五年七月一日日本郡伊仙村、仲善氏四男に生る。明治四十二年川邊中學卒業、全四十四年本縣師範第二部卒業、徳之島神ノ峯校訓導となり在職二年、次で早町校二年、伊仙校一年、大田布校二年、阿布木校二年、田檢校二年を経て笠利校長に累進し在職二年半、次で與論校長二年、山校二年、尾母校長三年、山間校長四年を経て昭和九年四月一日、當、今里校第十一代兼任待遇校長に榮進し、爾來、校區男女青年團長、國府、愛國兩婦人會長、農繁期託兒所監督を兼ねて今日に至る。其間、尾母校在校中、陛下行幸を記念し、殖産を奨励したる他、産業方面に貢献多く特に殖産事業は現在、大島振興計畫の一に數へらるるに至つた、令室の間二男あり長子、齡二五、大島中學を経て臺灣演習科を卒へ目下同島飛沙公學校勤務中、二男、東京農大在学中。

福田宮和志君

大島郡大和村今里

一事に徹底せず右顧左眈居士に冷汗一斗の感あらしめた話柄として、こんな事がある。夫れは故武藤信義元帥が關東軍司令官當時、中央で内外の注目を惹いた東方會議が開かれ、我大陸政策の根本方針三案が得られ、會議の幹事長森格之れを元帥に齎した。すると元帥、其三案孰れに對しても「誠に結構です」を繰返し鶴鳴の「つ覺えをやつてのけた。されば森、憤然として其無責任を詰ると元帥泰然曰く「案の善悪は問題ではない。どんな悪い案でも實行すればよくなる。要は徹底してやるにあると思ふ」と、實に痛快な話ではないか。個人の修養も之と同じ君は少壯の頃、學習と習字の爲めに日誌を記し初めたのが明治三十四年、以來四十年一日と雖も缺さず、其範圍、部落狀勢、氣温の事迄に亘ると、閻王に人生土産を問はれて昂然答への出来る人は稀だが君は其稀な中の一人である。其強志が君を今日あらしめた。明治二十年十二月二十一日、眞部氏二男に生る。自明治三十九年至四十二年迄漁業組合會計、其後、販賣員となり三期六ヶ年、其前後を通じ、帆船龍丸、龍丸、發動船飛龍丸都合三隻を購ふ、大正七年區長となり二年、全十五年土地賃賃價格調査員等となり、現在、昭和十二年來の今里産業組合第三代組合長、村會議員學務委員、統後對策委員並に之先、擧げられたる今里校後援會委員を兼ねて活躍す。因みに今里産組は其創立昭和四年四月十八日、保證責任組織にて組合員設立當時一八〇(口數一八九)現在二二〇(口數三二三)資本總額九千圓、貯金總額三千七百圓

稻泉實行君

大島郡大和村今里

近時の國民運動、國民精神總動員は、進行しつつある支那事變に對する意義を闡明すると共に國策の動向を明示するもの、日本の民族的使命の鮮明である。而してそれは我國內改革の指導運動でもある。されば斯る綜合的國民啓蒙運動たる事により國民は初めて小我を捨てて全体主義に合流し得るのであり舉國協力は現實に可能となるのである。啓蒙運動の重要な一部門青年學校の長として、當校區より出動せる廿九名の勇士(昭和十三年四月現在)の家庭萬端を應援し又義勇飛行機獻納に際して奮つて献金を奨勵したる等、活躍寧ろなき人に我稻泉君あるは吾人の意を強ふする。君は明治卅一年五月十五日本郡徳之島、行爲氏二男に生る。長崎縣海星中學卒、大正七年一年志願して熊本工兵隊に入隊し工兵少尉に任官後、小學校教員檢定試験に合格し全十年面繼校訓導となり在職二年、名瀨女子校二年、名瀨尋常高等小學校二年、名瀨尋常高等小學校に入所受講一年、再び面繼校に復し、次で龜津中等公民學校二年、池地校長二年等を歴任し昭和十二年當校長に榮進し、村青年學校長、男女青年團長、婦人會長を兼ね、家庭二男一女、因みに當名尋常高等小學校沿革創立明治二十八、九年の交とあるも、大正十五年本校炎上、書類焼失の爲、沿革詳かならず、現在児童數二百二十名、青年團員男一四二名、女一四九名。

榮富岡君

大島郡大和村今里

支那事變は、歐聯及び英國との問題である。之は日本民族の發展たると共に本能的な使命である。而も夫は現在の關係に於ては日本民族の興廢をかけた民族事業である。されば斯る民族的の大事業は我が綜合的國力、民族文化のより一段の向上と、教養、精神、理想の明確なる把握によつて極めて段階的に、計画的に建設して行かねばならぬ。勿論それは長期に亘る努力であり、國內的には國內改革の遂行と云ふ前提に立たねば斷じて實行し得ない。綜合國力の發展と文化の向上は、それを實施し得る國民經濟機構の樹立と不可分である。協同社會的計畫經濟はかくて不可避的となる。現戸月産業組合長たる榮富岡君は近村中、稀に見る壯年組合長にて、如上の建前を以て努力するが即ち統後國民最大の義務也とし奮闘しつつある人である。明治三十五年十二月三十日富安氏嫡子に生る。十八歳にして青年會長に擧げられ在職一年、二十歳の時、代用教員となり、本郡内三方村知名瀨校、小瀨校、西中校等を歴任し、昭和五年辭任し、歸郷して産業組合設立に奔走して現在の保證責任戸月産業組合を設立し翌六年組合長に選任され、爾來全十二年推舉されたる村會議員、學務委員、統後對策委員を兼ねて活躍中である。令室の間子女四、因みに本産組現勢、加入戸數一四四、一口廿圓、口數三百口、貯金高二五〇〇圓、貸付總額三五〇〇圓。

多見完君

大島郡宇檢村宇檢

保證責任大島郡宇檢産業組合沿革
昭和四年五月有限責任産組創立、當時組合員一六名、口數三四〇、一口五〇圓、昭和八年保證責任組合に改組し、多見完君、組合長に選任さる。現在總資産並に負債、貯金總額五千五百一圓八十二錢、借入金一千二百圓、聯合會未拂出資金四百六十圓四十錢、掛買購買代金八百四十圓四十三錢、計八千四百六十五錢、出資貯金計二萬八千四百六十五圓五十錢、尙組合の事業として製絲事業、大島紬機業の兩者あり、前者は本部落が養蠶が盛んなるに依りて目論まれたるものにて昭和十一年十月縣費補助七十五圓を得て座繰にて始められたるもの、現在年産額一百貫、殆んど組織用にて、又後者生産高年五百疋、將來自給自足を圖る必算を有すと、現組合長たる君は常領氏三男、明治十七年十月九日生、明治三十七年役に特務兵に召集されて大連に上陸し長驅鐵嶺に至り、殊功を顯はしたりと、戦後全三十九年宇檢漁業組合會計に推されて三期六ヶ年連続し、漁業界の爲め盡す所多く若年にして公的才幹の見る可きを郷黨に認識され、先之、二十歳より二十二歳の交まで青年團長を勤め、現在如上の職と共に昭和十年來の久志小學校後援會委員を兼ね活躍中である。一男一女あり、男齡二十七、現在大島支廳産業組合係を奉職す。

村會議員 碓元佐和安君

大島郡宇檢村宇檢

人格を磨くと云ふ事は、社會生活の方便のためではなく、その人間自身の眞價を高める上から見て大切の上もない事である「見る人の爲にはあらで奥山に、おのが誠を咲く櫻かな」との歌もあるが、實際さうでなければ嘘であると思ふ、人格の確立は社交の形式的修飾ではなく、人生の事業行動に自からなる影響を及ぼすものである。温厚にして親切、誠實であつて勤儉、郷黨より慈愛敬虔の念を持つて信用されてゐる君は、夙に秀れた人格の所有者として其徳を謳はれてゐる人である。明治二十二年四月十四日佐和幸氏四男に生る、幼時より才智非凡、土地の小學校を出でて家居農事、漁業に精勵し大正七年宇檢漁業組合會計となり同九年に至る間、克く其任を完ふして違背些かもなし、同八年大島水産組合代議員に選任され在職三年、期満ちて再び選任され二期完務、同十五年年節検査員となり在職一年、昭和五年年節検査員に推舉され同八年に至る三期累選、同十年農會議員に擧げられて至現在、翌十一年農事小組長となり至現在、其年村會議員に推舉され、同十二年統後對策委員、本村産業組合監事となり、十三年宇檢産業組合監事に推されて今日に至る先之部落衛生支部長、村及宇檢産組評定員等をも歴任す。

小學校長 西 清信君

大島郡宇檢村須戸



微妙神秘、これを測量することの出来ぬは人の心、利己我執の識妄妄動、時があるかと思へば、利他同情の法性眞如の月を仰ぐ時もある。左するも右するも自由意思の命令である。教育の要決は即ち此無明深重の雲を拂ふて無限無量の月を現はす力の賦與でありベスタロツチの所謂宗教的靈覺に到達しなればならぬ。君は形式に偏せず内容充實主義を奉じて至誠一貫その精力を教育界に傾注し來つた人、明治二十六年一月十三日里明氏三男に生れ、郷村小學校を卒業するや、教育者たらむと志し爾來、家居獨學し、大正九年教員檢定試験に合格して本郡鎮西村生駒小學校に職を奉じ在職五ヶ月、次で笠利村屋仁校に三ヶ年、東方村節子校に二ヶ年、笠利村赤木名校に四ヶ年等々と歴任し、十島村實村校長に拔擢され在職六年、更に中島校長に轉じて在職二年、昭和十二年四月十四日當、須戸尋常高等小學校長に榮進し、校區男女青年團長、同國防、愛國兩婦人會長を兼ねて今日に至る。家庭二男二女を有す。因みに當校沿革は明治二十九年四月須戸中央に設立され須戸、部連を區域とす。同三十八年五月部連に分教場設置、四十年四月獨立校となる。同四十三年兩校併合、仲瀨に校舎建築、大正十五年青年訓練所併置、現在児童數男九三女九八。

前村學校後援會長 喜島市太郎君

大島郡宇檢村湯澤

「日かげ隈無く照りわたる首山の北の丘の上」に第六師團司令部はきのふよりこそ置かれれば東をかざる山をあれど北西南三方の田園空にのらなりて高樂の雲果も無し、ゆん手をめぐる鐵道をつたふ視線は遼陽の郊外高く聳えたる塔の上になぞあつまれる。下略以上は一代の文豪島外森博士が、かの三十七八年役に際し奥第二軍軍醫部長として出征し我熊本師團の活躍を歌ひたる有名な戦争長歌の一句である、君は此戰役に應召し同じく奥第二軍戰團序列に入り瀧大塊灣に上陸、德利寺、大石橋、首山堡、遼陽、沙河、奉天等の戰陣に轉戦して殊功を樹て勳七等功七級に叙せられ名譽の金鷄勳章を賜りたる勇士である。明治十一年八月一日福常氏長男に生る同三十一年の四十五聯隊入隊兵にて後三十五年沖繩縣巡查奉命、三十七年五月應召、同四十二年大林區署主事奉命沖繩、鹿兒島、宮崎各縣下林區署を歴任し此間十三ヶ年、大正十一年砂防同業組合代議員、那畜産組合總代議員に當選し翌年村會議員に擧げられ、同十五年本村收入役昭和二年助役、同六年村長と進み各一期完務、同十一年田檢尋高、及青年校後援會長に擧げられ其間、納稅組合設立、古仁屋湯瀧線道路開鑿、同縣道編入、奉安殿建設等事蹟枚擧に遑なし、尙自昭和三年至十年公設消防組頭自同八年至十一年迄大島販賣組合宇檢支部長等歴任す。男二女三、長子齡三十歳、在東京、逕信省に奉職す。

元警部 正七位 郵便局長 四七等

籠

直君

大島郡宇檢村湯澤

樹木の亨々として大空に秀で、能く風に耐へ雪を忍ぶ所以のものは抑も又之に適當するの根あつて地中に蟠するが故也。社會に立ち堅實なる一歩々々を進めて目的の彼岸に邁進するには先づ豫め根本の實力を養成するを要す。君の郷黨の白眉として、衆に重んじられ事に當つて責任觀強く必ず成就せしむるに止まらずて信念は其過去の修養努力に待つや大也。明治五年六月三日甚蕪氏長男として本村宇檢に生る、全二十四年鹿兒島市に出で全地簿記學校に學び、後、官界に志し全二十七年の交、滋賀縣巡查を拜命し在職五年にして歸郷し同三十七年大島警察署勤務となり本署詰會計たりし事八ヶ年、累進して警部に任ぜらる、大正二年八月官を辭し第五代當郵便局長を拜命して格勳茲に二十有餘年一日の如く今日に至る。其間、大正十二年叙勳八等授瑞寶章、翌十三年叙從七位、昭和五年叙正七位、同六年勳七等に陞叙せらる。尙昭和三年田檢校後援會長に擧げられ、在職中積立金造成、校具完備、奉安殿建立等に努力し先般隱退に際し花瓶一對を副へ會より感謝狀を贈らる因に當局は明治十七年十一月一日三等局として開設、歴代局長、重枝豊彦、重佐榮志、碓佐和温、元尙雄諸氏、令閨の間男二、長子秋夫君、當局事務を擔當し、次男久男君、大島中學を経て東京商大専門部卒、目下全購聯本部に在動中。

村醫 正八位

中江豊治君

大島郡宇檢村湯澤

寒暑を厭ひ、病源に遠ざかる可く其日常に注意するのみが衛生ではない。身体内面の力を教養して環境と闘ひつゝ、體ては大自然に調和共働する所に積極的建設的衛生の意義がある。心身兩者の密接なる關係から之を云ふ時、肉體の健康が其精神に存する事眞に驚くべきものあるは古來のあらゆる教育の外近世の醫學が特に之を實證してゐる。この故に心を養ふは身体を培ふ所以であり、性情を和むは壽を長ふする道となる。されば、公共若くは私人の衛生が其時代の政治に、經濟に、教化に、人間のあらゆる文化と交渉ある時相を見逃してはならぬと新時代の國手に相應しき言をなす醫師に我が中江豊二君あるは吾人の欣快に堪へざる所である。君は佐次郎氏の長男、明治三十三年二月十三日を以て本郡龍郷村龍郷に生る。郷村小學校卒業後縣立第二中學に入り第十三回卒業生として校門を出で、笈を負ひ熊本醫學專門學校（現熊本醫科大學）に入り大正十二年同校卒、其年、渡臺して臺灣總督府病院に奉職し、後、北海道露都立病院副院長に聘せられ在職五ヶ年、昭和八年三月現所に開業し同時に村醫を囑託され、後、校醫をも兼ねて村内唯一の醫師として村民に敬慕さる。尙、君は曾て熊本十三聯隊に一年志願兵を以て入隊したる豫備役軍醫少尉たりと、令室の間、男一、當年七歳と。

方面議員 農會議員 長

吉久勝熊君

大島郡宇檢村名柄



自分の働きのよつて自分自身の力を得、自分の生活を確立すること、これ即ち自治の根本的原理であつて他人の力を借りない。自分の事は自分ですると言ふ事は非常に權威のあるやり方である。制度の改善、社會との需要供給の關係を安定せしめると言ふ事も、自治の基礎不動をならしむる上に於て必要であるは勿論であるが、然し自分を以て自覺的に開拓し、あらゆる困苦欠乏をも打破し、理想への建設に向つて邁進するだけの勇氣がなければ眞に確乎不拔の建設は出來るものではない。此處に於てか克己忍耐、不撓不屈、至誠一貫勤勉節約の徳を有する君の如きは、現代農村に於ての輝かしい存在であると言はなければならぬ。明治二十四年四月十四日中田良太郎氏次男に生れ、養父吉國氏の後を繼ぎ現姓を言す、郷邑小學校卒業後、家業に努むる事多年、昭和四年農業統計調査委員を囑託され、同八年本縣方面委員に任命され、同九年名柄尋常高等小學校後援會長に推舉され、同十一年農會議員、同十二年區長並に統後對策委員等々と幾多の要職に擧げられ、農會調査員を完務せる外は執れも現職に在りて活躍中である。其間、昭和五、十年國勢調査員を歴任す。令閨の間三男四女あり。長男二十九歳、現朝鮮咸鏡北道清津公學校訓導、次男二十一歳、神戸住友仲銅所に勤務す。

東 貞良君

大島郡宇檢村阿室



小學校長 東 貞良君
小學の序に曰く「古しへは幼稚に教ふるに能く言ひ能く食ふより即ち教あり、以て濼掃應對の類ひに至るまで、皆習ふ所あり、故に長大にして語り易し、今の小より只對へを教ふことを教へ、稍大なれば即ち虚誕の文を作るを教ゆ、皆其の性質を壞るなり」とある。東貞良君の兒女黨陶陶歴は、まことに此弊を初等教育界から一掃したる努力史の觀がある。君は大島郡和泊村東一徳氏三男に生る。明治四十四年縣立第二中學を卒へて本縣師範第二部に入り、大正二年同校卒、直ちに本郡知名小學校訓導となり、同六年郷里和泊小學校に轉じ在職中、同八年歩兵第四十五聯隊に入隊し、同十年國頭小學校訓導に補せられ、同十四年四月鹿兒島尋常高小に轉じ、昭和六年國頭小學校長に任ぜられ、此間、鹿兒島市立商工補習學校教諭を兼務し、大正十一年四月より昭和三年迄縣立第二中學囑託、同四年より六年迄、大島中學英語科教授囑託兼務、昭和十三年春、當、阿室尋常高等小學校第十代校長に任ぜられ、爾來、校區男女青年團長、國防、愛婦分會長を兼ね、因みに本校沿革に明治十三年簡易科小學校として設立、同二十九年十一月十六日尋常小學校と改稱同三十四年初代校長勝和有義氏赴任、大正十一年高等科併置、昭和十一年青年學校分教場併置生徒數、小學校男二二六、女一七九、青年校男四五、女八〇。

米山常英君

大島郡宇檢村阿室

志を堅實にして一步々を進み、次第に目的に近づくは最も勤勞主義の人である。一時に大飛躍せんとし、忽ち中途に挫折して再起不能の嘆に沈吟する者に比して、其賢明は勿論比較するまでもなく優つてゐる。汝々として勤勞し、榮枯盛衰毀譽褒貶に拘泥躊躇する事なく俯仰天地神明に愧ぢぬ精神を以て建設への路を精進して來た君は、現代農村に在つて白光を發する重き存在と言はねばならぬ。明治十八年八月十日浦源氏長男に生る。壯年時代、海上勤務の人たり、當地秋葉神社は實に君が二十四年前、三笠丸船長當時、此地に大火あり、仍て鹿兒島より秋葉大神分靈を奉受し來れるなり、昭和六年來其社守として齋つる一方、郷土開發の爲に常に意を一村更生に用ひ、衛生、教育、財政整理等君の手を煩はせるもの甚だ多く、現に昭和十年來の阿室主婦會會長、阿室校後援會副會長、同十一年來の方面委員、同十三年來の阿室産業組合長等を兼ね活躍中にて、抱負又多く、土地開墾(本年着手)養蠶獎勵昨年より積極獎勵の爲、水車を設置し部落有とし、或ひは河川工事等枚舉に遑なし。三男一女あり、長男二十六才、四國丸船に在り團扇製造研究中と、因みに主婦會沿革(創立昭和九年、基金四三五圓、麥、甘蔗大豆等共同耕作の基金也)産種沿革(大正八年任意制購買組合として創立、昭和十一年保證責任に改正、目下農事小組合認可申請中、加入者一三四名、一口十圓、口數一三四、年純益四百圓餘)

春島五熊君

大島郡宇檢村阿室



人の一生は旅行の如し、而して貯金は實に旅客の傘とも謂ふべし。晴天には傘は不用なれども、旅客が之を携ふる所以は不時の降雨を慮ればなり(蘇峯文集)旅客の傘の一語、言ひ得て妙である。人生不時の降雨に際し金を借りるほど苦しいものはない。借りに往つて別ねられる程恥辱はない。片腕落して嚙るとも負債と云ふものするでない。斯る感想は獨立自營を尊ぶ日本人に於て一層切實である。地平線に出づるものは概ね貧くて智慧が出る連中には限る。金がなく、其儘ウダツの上らぬ様なのは意氣地なき限り、貧すれば鈍すると云ふが貧して、鈍のするは人間の屑であるなど、氣概の士を氣取つて云ふ者があるが、然し十人中九人は貧して鈍する組なのである。されば人間、貯金の絶対必須なる云ふまでもない。我春島君は貯蓄思想の普及者として夙に郷黨に畏敬され來つた人である。現所、宮田宮富氏五男に生れ、仲實氏養子となり現姓を貫す。天資篤實温厚、多年、小組合長の職を帯び功績ありたるも昨十二年辭し、現在は大正九年五月拜命の本村阿室郵便局長、昭和十一年來の阿室尋常高等小學校後援會長の職に在り、部落一戸十錢以上の貯金、寄附金、還暦祝寄附金等を基金とし、いま總額二百圓を突破するは之れ全く君の努力の効に成るところにて、昭和十三年五月には多年通信事務に貢献したるの功を以て勳八等に叙せられたり。

宮原五郎八君

大島郡宇檢村平田

青樓薄倖の人は意氣なることを得べけれど、意氣ある宰相は風流才子に同じ厄介者なるべし藝者は意氣なるが善かるべけれど、奥様の意氣なるは有難からず、野暮を以て狭い主義ぢやと仰在れど、意氣で天下は治まらず、意氣で室家は齊はず、意氣は變、野暮は常、意氣は奇、野暮は正なり、大凡人の境遇には奇に宜く變に宜きあり、又正に宜く常に宜しきありとは文豪森鷗外先生、月くさの中に云はるる所、意氣は奇野暮は正也の語、正に聞く可きである。君は其正の人、曾て大正十一年の交、禁酒會長に推され三年在職、大いに實績を挙げたる如きは其人物の一斑を窺ふに足る事柄である。明治二十八年九月二十日宮原宮儀志氏三男に生れ、後、養父竹太郎氏の家を繼ぐ、大正四年徴せられて歩兵第四十五聯隊に入隊し滿期後、評議員、班長たりし事前後八ヶ年、後、昭和七年村會議員に推舉され現在其二期目の職を帯び、學務委員、銃後對策委員、全八年來の小組合長、全十三年二月十六日來の平田産業組合第二代の組合長等を兼ねて活躍中である。其間全七年より十二年迄、方面委員、全十年國勢調査員囑託等を完務す。因みに當平田産組は昭和九年六月八日保證責任を以て設立、平田、屋鈍二部落より成り屋鈍に配給所を置く、現在加入者二二七名、口數二三五〇、一口十圓、尙君の家庭、子女七人、四男三女にて長男八、目下滿洲國電鐵新京詰となりて活躍すと。

吉熊君

大島郡宇檢村平田



人生は洋々たる春海のやうなる順境ばかりではなく、逆巻く怒濤の境もあることを知らねばならず、順境二境にあつて毫も動亂することなく、常に心の平靜を持つて富に處するも貧に處するも坦然として動かないこと山の如くに境界を訓練して行く必要がある。機に臨んで進退の要宜しきを得る君は、この泰然とした心機を積んでゐるに他にならぬ。明治十五年七月十三日里碩氏長男に生る。明治三十二年四月東上し翌年三月迄約一ヶ年に亘り東京牛込區辨天町鳳林寺に修業し、後、歸郷し三十七年一月現地に於て代書業を開業中、其六月一日召集令に接し歩兵第四十五聯隊に入隊、翌年二月末日解除、其年上京して警視廳巡查を拜命、全四十二年十二月關東都府府巡查となる。先之、四十二年三月外務省巡查を拜命し在職日本領事館警察勤務を命ぜられて大正三年に至る。其間、明治四十一年より翌年二月迄、東京神田小川町立生塾に漢學を修業したる事あり、外務省巡查退職以來全く郷土の人となり、大正五年四月より本村平田地内に銅鑛區を所有し、爾來全九年五月に至る迄盛んに掘鑿し現に尙鑛山業に従ふと、其間村會議員たりし事二期、現在昭和十一年六月以來の村會議員、全十二年來の銃後對策委員、全十三年來の學務委員等の職を帯び活躍中。

中島爲英君

大島郡實久村藤川

君の家は村内屈指の舊家、嚴祖父儀世恵氏は與人、嚴父儀志演氏は戸長(明治十年官選)を勤役したる人、君は其嫡男、明治十一年一月三日生る。全三十一年本縣師範大島分教場卒業、其年古仁屋校訓導となり全三十四年退職、三十五年二月沖繩縣國頭郡久邊校代用教員となり全三十七年全校長に進み三十九年退職歸郷、其年實久村西阿室校訓導に補せられ次で全校長に任ぜられ、四十一年任木慈小學校訓導、四十二年藤川小學校訓導に轉じ、暫時にして校長に進み在職十數年を経て大正十四年古仁屋町加鐵小學校長に榮轉し全併邊の實業補習學校助教諭並に校長を兼ねて在職四年、昭和三年三月功成り名遂げて退職し、翌々五年七月二十三日實久村長に推薦されて全九年全月全日に至る一期間を完務す。其間、乾餾倉庫設置、國道開設、陸川濶埋立工事、納稅獎勵等に功績を擧げて更生指定村たらしめたる等の功あり。其他明治二十三年藤川校敷地買収費に十圓寄附、全四十四年木慈校新築費に百圓寄附等々の美舉、枚舉に遑あらず。趣味釣魚、造林、家庭嫡男文夫君早世に依り長孫虎之介君(十二歳)を嗣となす、他に女三あり、長女員子さん當地中島家に、二女敏子さんが在神戸中島家に、三女ノリ子さんが在順女師、高女教諭橋口家に何れも嫁す。

村會議員

内田源藏君

大島郡實久村西阿室



都會議員、都農會の思想は今日の農村を風靡してゐるかに思はれ、従つて農業に對して精根を打ち込むの真の精農の士は

極めて少ない、青年男女の多くは相率ゐて村を去つてゆく、けれども斯る農村に於ても之を思想的に見る時は、常に不動の堅實性を維持してゐる點は眞に頼母しい事である。此事は近代の戦争が一面交戦國民の精神的、思想的戦争の形をとり至れる今日、最も重大な事である。我國の之れあつてこそ、不動金鐵の國是を以て學國一團の姿勢となる事が出来るのである。君は出で

岡本英彦君

長大島郡實久村西阿室



明治三十八年八月一日付、熊本歩兵第三聯隊長より、三十八年六月十一日南炭坑附近ノ激戦ニ於テ獨立家屋ヲ占領シ猛烈

ナル敵火ノ下ニ屋上ニ佇立シ敵ヲ監視シ適切ノ報告ヲナシ沈着剛毅克ク部下ヲ指揮シ中隊ヲ有利ナラシメタル功ニ依リ、云々の主文を以て賞詞を受けたる日露戦役の勇士、岡本英彦君は故了蔵氏の男、明治十二年四月七日現所に生る。窪川尋常高等小學校卒業後、十九歳にして陸軍に志願し千葉教導團に入團す。之れ明治三十年十月一日の事に於て、全三十二年十二月大阪歩兵第八聯隊に伍長(二等軍曹)として入隊、次で台中守備隊、再び第八聯隊北海道旭川歩兵第二十七聯隊附として歴任、其間、三十二年十一月軍曹(二等軍曹)に進み、三十六年十一月滿期退役三十七年豫備役として其五月二十七日熊本聯隊に召集されて出征、翌三十八年三月四日奉天北部炭坑の戦場に於て左上部貫通銃創を負ふも尙戦線に立ちて武勳を立て翌年四月一日叙勳七等功七級、金鶏勳章並に青色桐葉章を賜はる。其後、青年會長、大島信用販賣組合西村書記(自大正六年三月至全八年三月)次で現在組合に改組成るや同書記(自大正八年四月至全十三年)方面委員、國勢調査員、土地貸賃價格調査員等を歴任し、現在、十年來の窪川校後援會長の職を帯ぶ。趣味釣魚、家庭男三女一、長男猛君在自宅、次男勉君在大阪、三男太君、長女ヒデ子さん何れも自宅に在り。

安田能一君

大島郡實久村西阿室



尹文字は「天地を網羅し、一切の現象を籠絡してゐる様な問題でも、之が政治上や人間の實際生活上に直接關係がなければ聖

人は指いて之れを論じないものだ」と云ふて居るが茲に東洋の常識的傾向を能く説き明して居る。政治問題は實際問題であり且日常生活問題である。カント學派の考へるやうな或る特定の判断が純粹自我の働きであると云ふ風に解したなら何でも政治上の問題の解決は理論的、論理的に行かなければならない譯であるが、身を修め家を齊へ進んで國を治める道を講ずるには、人生の秘奥を闡明する様な哲學的原理を必要としないのである。實行に適切な政治原理並に生活原理を掴みさへすれば夫で宜敷いのである。安田能一君の露れたる風格、聲に接して吾人、實に此感を深ふ。明治九年一月八日故能長喜氏次男に生る。少壯より教育界の人となり須子茂校教員たる事十月、明治三十一年鹿師大島分校所卒、西屋室校訓導となり在職四年、後、校長に進み、次で大阪市東成區中央尋常高等小學校訓導となり在職三年半、歸郷し窪川西校長(六ヶ月)實久村木慈校長(五ヶ月)同須子茂校長(十二ヶ月)等を経て昭和二年、三十一一年間の教育生活を経て翌三年村會議員に推挙され爾來累選生活、會計検査員、土木委員を兼ねて現在に至る。家業砂糖製造、一女壽美子さん大阪梅林女子專門學校英文科卒、奈良縣人森農夫君(日本防空社機關誌編輯長)を養子に迎へ目下大阪市に在り。

林有澤君

大島郡實久村西阿室

實久村西阿室尋常高等小學校沿革Ⅱ創立明治十三年七月、同二十九年依尋常小學校西阿室分校となり同三十年校舍新築、全三十四年西阿室尋常小學校と改稱、同四十一年廢校となり瀨相小學校假教場となる。四十五年伊子茂校分校と指定、大正三年再び西阿室尋常小學校と改稱成り單獨校となり、全十二年第一種實業補習學校併置、全十五年補習科廢止、高等科併置、兒童數昭和十年現在一八〇職員、校長林有澤、宮上重喜、前田忠彦、武田米友、福山功、伊東嘉惠子諸氏、創立記念日九月一日、校地面積五八七坪、實習地面積四畝歩、擔當高等科男女三十九名一人當三坪(甘蔗畑六分、蔬菜園四分)割當、君は故前任氏長男、明治二十七年二月五日日本郡鎮西村諸鈍五二番戸に生る、郷邑小學校卒業後、鹿兒島縣立第二中學に入學し大正二年三月卒業、東上して東京農業大學に入り同六年三月同高等科卒業、同八年鎮西村諸鈍尋常高等小學校訓導に補せられ在職實に二十年に垂んとし、昭和十二年三月本郡古仁屋町阿木名尋常高等小學校に轉じて今年九月に至り、其處十月一日本校長に榮進して今日に至る。男二女六あり、長男辰也君、大島中學在校長女ミチ子さん、鹿高女を卒業して目下臺灣に在り、二女キエ子さん、鶴嶺高女を卒へて自宅に在り、三女ミナ子さん、鶴嶺高女校に在學中。

毛利義則君

大島郡實久村須子茂



實久村須子茂尋常高等小學校沿革Ⅱ其校區須子茂、嘉入、阿多地の三ヶ字區創立明治十三年須子茂小學校と稱し後、同簡易科小學校と改稱、全二十八年新學令實施と共に廢校となりたるも、全三十三年瀨武尋常小學校須子茂分校として復活、大正三年九月一日須子茂尋常高等小學校と稱し獨立校となりて今日に至る。現在學級數五、男一一一名、女九四名職員男五名、女一名、歴代校長安田能一氏、市來惟文氏、秋月秋豐氏と相次ぎ四代の君に至る君は本郡住山村山間、毛利太郎氏長男として

明治二十四年二月二日生る。郷邑小學校卒業後育英界裡の人となりて次代國民養成を以て終生せむと志し研學數ヶ年、大正初年本縣師範學校講習科に受講したる事一ヶ年、全十一年十二月十五日檢定に合格し師範専攻科に入學し昭和二年三月卒業、笠利村笠利尋常高等小學校首席訓導となりて在職一ヶ年昭和三年三月卅一日付、古仁屋町節子尋常高等小學校訓導兼校長に榮進し在任五年、克く兒女黨の實を盡して校内外に令聞を博し、次で鎮西村押角尋常高等小學校長に歴選し在任二年更に笠利村節田尋常高等小學校長となり三年、昭和十三年四月當校長に赴任して現在に至る。令聞の間男一、女三、長男龍一君、大島中學生長女サチエさん、嫁して沖繩縣に在り、二女トシ子さんが在宅、三女ヨシ子さん、小學生。

室田義隆君

大島郡實久村須子茂



朝から晩まで寝ても醒めても常に正義と共に居る人、斯ふ云ふ人には悪事をすることは不可能である「感謝して楽しく暮せ一日を不平云ふても同じ一日」斯う観じれば吾々は現在に向つて感謝し現在を樂しみ、そして充實した生活を送らねばならぬ。唯昔は經濟状態が幼稚であつたから其時は天國であつたが今は社會上に缺陷多く従つて不平が起るのは當然であるとの説があるかも知れぬが是れ思はざるも甚だして今日我等が日夜文明の惠澤に浴し常に知識慾を十分に満足せしめ、幾らでも品性を陶冶し人格向上を圖るのに機會均等を得て居る今日の時世は實に感謝で無くてはならぬ。神代とは遠き、昔の事ならず今を神代と知る人ぞ知る「此歌を了譯して良兵良民の實を盡し來つた人に室田義隆君がある。君は故直良君長男、明治十九年十月二十九日生、古仁尋常高等小學校を経て現窪川農學校の前身校に在學二ヶ年、明治三十九年熊本工兵大隊に入隊し、後第十四師團管下水戸工兵大隊に編入され四十一年任工兵伍長、翌年任官軍曹、大正四年病の故を以て退役歸郷し、爾來農事と公共に努力し、青年會長を経て區長二年、漁業組合會計事務、全十年帝美大島築城支部職員二年等を経て、昭和十一年五月村會議員に推挙され、全十年來の幹事小組合長、奉公農事小組合長、軍友會部部長等を兼ね、就中、幹事事務に最も多忙を極め活躍中である實子なきを以て令甥保一君を嗣となす。

村會議員 第八等

田原吉信君

大島郡實久村芝

「どうだ、この工事のさまは、まるでなつちよらんではないか」といはれた、所がこの勝隊長は...

郵便局長 第八等

瀬戸口長男君

大島郡實久村瀬武

實久郵便局沿革 明治七年郵便事務取扱所開始、同二十四年三等局開設、初代局長竹島甫氏...

村會議員

早米儀美君

大島郡實久村三浦



心が細か、畑が心か、兎角草が生え易い。油断をすれば畑は草だらけである...



村會議員 第八等

常熊君

大島郡實久村木越

怨を絶ち嘆を棄て人の違ふことを怒らず、人皆心あり、心各執あり、彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非し...

教育功勞者

平山甚四郎君

大島郡西村諸村

能く人の忍ぶ能はざる所を忍び、人の爲す能はざる所を爲す凡そ人爲の才を具ふる者は、必ず大受の量あり、子房腹を納るゝを耻とせず...

青年學校校長

小西清良君

大島郡西村押角

押角尋常高等小學校沿革 明治十一年郷校廢止と共に創立、神田橋彦吉氏之を主宰す、同十一年初等中等高等三部制併置、同二十年高等尋常簡易三科となる...

村會議員 瀬戸山福伴君

大島郡西村押角



正を踏みて怖るる勿れと云ふ先哲の語がある正義の前には敵なしと云ふ語と同一である。心だにまことの道にかなひなば祈らずとも神や守らむ。この古歌も同じ意味を詠じたのに他ならぬ。至誠至情公明公正、日常謹直の生活を以て終始し、家庭は四時春風裡にある如く和悦に溢れ、郷黨と交りては信義寛容を以て稱され、霜晨にも月夕にも勤勞そのものの典型的行爲を徹底的に續け來つた君こそは、正しく一般大衆の範とするに辱しからぬ奮闘主義の体現者でなければならぬ。君は明治二十六年十一月四日故稱福氏四子に生る、其家、世々鶴姓を稱し來りしが昭和八年の交、現姓に改めたりと云ふ。君は生而薄資、六歳にして嚴父に死別し、實産は見る／＼人の手に渡りて赤貧洗ふが如く其年少時は全く暗澹たる生活史の連続たりしが、苦心奮闘、三十一歳の頃には傳來の資産を殆んど買戻して尙剩すものには至れり。四十四年度の鹿兒島第四十五聯隊志願入隊兵にて大正三年四月満期除隊、其間、朝鮮守備に派遣されたりと。後、青年團長八ヶ年完務消防組班長たる事多年、其選を果ねて今日に至り、昭和十一年六月村會議員に推舉され、全年八月學務委員に選任され、防護團班長をも兼ねて今日に至る。六男二女、長男山登君、大阪鐵工所勤務、長女トミ子さん、大阪製麻會社勤務他は尙幼少なりと。

産業組合 小松宮壽美君

大島郡西村押角



完全なる相互扶助が行はれる社會はこれを理想郷と言ふ事が出来るが故に社會は完全なる個人と個人との分業的の遂行に俟つて完全なる生活を営み得るのである。君は己が天職と信する道に向つて克く本分を盡し、自助自立の体現者として俯仰天地に愧ぢざるの人である。以て完全なる社會人であり、公民の師表とする可であらう。明治十七年三月十日森宮豊次男を以て生れ、昭和五年現姓に改む、押角小學校卒業後、古仁屋小學校高等科卒業、明治三十七年十二月徴せられて熊本騎兵第六聯隊に入隊し、満期、上等兵となり全四十年七月再役して憲兵隊に轉科し鹿兒島憲兵分隊に勤務し次で關東州憲兵隊遼陽分隊附となりて朝北の警備に服し、山口、吳、朝鮮、甲州等各部隊詰となり大正二年十一月退隊、其後歸郷して本村役場及農會の畜産係たる事一年、其後製織業を開業し、全七年大島産組西支所に入りて其發達に盡力し昭和十一年八月専務理事となりて今日に至る。本組合は明治四十年の設立、組合員三四六、出資五八五〇、一株五圓、昭和十一年八月を以て郡内各村支所分立す。男二女五、長男敏美君自宅農業、次男伸三君市來農藝學校在學長女田原家へ、次女大村家に嫁し、三女カヨ子さん古仁屋高女家政科卒、四女ヨツ子さん、五女リエ子さん、何れも自宅、現在小學校に通學す。

海軍協會村副長 寛 叡助君

大島郡西村押角



高山雲峯に登り俯瞰すれば氣魄自から遠大となり、滔々流れて臨めば心意自から深奥となり霜の夜、雨の日に讀書思索するならば情操自から靜謐となる。之れ自然に對する修養であるが、平常この心懸は床しいものである。公明正大にして清廉潔白な美しい性格を有する君は、この大自然そのもののやうな崇高さがある故に郷黨の尊信を得て大過なく紛議なく諸般の公務を處断して行く所以である。明治十四年九月二十九日現所職米佐登氏次男に生れ全三十七年十月寛福波美氏の養子となり現姓を肩す。其年十二月鹿兒島縣師範學校簡易科卒業後、直ちに本郡名瀬小學校訓導に補せられ全三十九年全町知名瀬校長に榮進、次で西村秋徳押角各校、住用村山間校、宇檢村校長、古仁屋町阿鐵、全伊子茂校、再び名瀬押角校、嘉鐵、池知兩校、實久村儀校等の各校長を歴任し兒女黨陶の實を盡したる事十七ヶ年に及び昭和六年三月三十一日功成り名遂げて退職、其後方面委員、少年救護委員となり、全十一年十月本村第四代助役に推選され、爾來自治輔翼の任に就き村衛生組合長、海軍協會鹿兒島支所西村副分會長等を兼ね次々盡瘁して今日に至る。家庭男二女三、長男幸夫君福山中學生、次男貴久君小學生、長女靜枝さん、西方村川畑家に嫁し、次女幸枝さん、鶴嶺高女卒自宅にあり、三女三枝さん小學生。

方面委員 三島喜助君

大島郡西村押角



生來不得手であるとか、世間一般がさうさせぬからと稱して躊躇してゐるのが、善事の行はれぬ最も大きな原因である。勇斷して獨行せよ、自分の生得とか世間とかを爲すのは畢竟善事をなす本氣がないからである。本氣を以て事を處して成らざるは、眞剣なる態度は又儒夫をも立たしめるものである。君は眞誠を以て農村問題に處し、徒らに政府の政策のみを依頼せず自力更生を以て奮闘、良き指導者たるの趣きがある。明治元年二月五日故郷氏男に生れ、兵船氏の家を繼ぐ。諸鈍小學校易科卒業後、家業を輔け、長じて公共と齊家の道を盡し、中年以後は日々其理想たる仁者無敵の境界に向つて修養之れ努めた。今日、人の君に接する恰かも春風裡に坐するの感あらしむるもの實に其敬天愛人の心、油然而して周囲を薫するが爲である。世話人、區長農事獎勵員、砂糖検査員等を経て漸次、村内有力者たるの實目を持ちするに至り昭和五年田畑地整理組合長となり同年八月起工して遂に其功を全くす。同六年元旦方面委員被命、同八年産業組合長に擧げられ、居常克く村内を巡りて施肥等の指導をなす。男四、女三を有し、長男茂義君、日本醫專出身、古仁屋にて開業、次男隆吾君、台灣醫專卒、大阪にて開業、三男齊君、鹿兒島中卒、自宅、四男、省吾君、東京藥學校卒三女執も嫁す。

産業組合 林 榮君

大島郡西村押角

都會が頭なら田舎は臟腑ではあるまいか、頭が臟腑を食つたなら、終に一身の最後となる。田舎は素より都會の恩を被る、然し都會を養ひ、都會の凡ゆる不淨を運び來り、新しい生命と元氣を都會に注ぐ大自然其儘の役目を勤むる田舎は都會に貢献する所がないであらうか都會が田舎の意思と感情を無視して我儘を通すなら夫こそ本當の無理である。無理は分離である。分離は死である。都會と田舎は一体である。農が盡に都を離るゝ日は農の死である。都が田舎を潰すのは都自身が潰れるのである。以上は文豪徳富蘆花が思出の記に説くところ。國家の實力は他方に存すと彼が標識を見体的に言つたものである。之を實現する物が産業組合、之を大ならしむは地方有志の責任である。諸鈍産組専務理事たる林榮君の努力たるや吾等の敬仰に値するものがある。本組合は昭和八年四月十二日創立、當時の組合員一五七名、現在三三九名、一口十圓、貸付一萬八千圓、預金三千五百圓、昭和十二年三月諸鈍、古仁屋間定期船運轉をもなす。其月二十六日、教育勸語、成申紹介書、産業組合ニ賜フ勸語御下賜、現在組合長三島喜助、創立努力者福島操(當時校長)、理事山下武七、中林武七郎、磨名語重、渡邊寛、山下元熊、榮佐太郎、眞清甚、監事脇田福永、山下福勇、積義隆、坂井前長、福山有義の諸氏、君は明治三十三年三月二十五日郷次郎氏長男に生れ昭和九年七月初代専務吉岡信勝氏の後任として専務理事の席に就きたる少壯氣鋭の奮闘家村内最も將來を至囑する隨一人たり、趣味家畜、男一、女二を成す。

郵便局長 福 正義君

大島郡西村押角

伏姫の持てる八つの珠數玉から八大士が生れたと同様に、かの大羅馬の子は一、ガリシヤ(佛)ゲルマニヤ(獨)三、ブリタニヤ(英)四、エスパニヤ(西)五、イタリヤ(伊)の五人の子で其第一は政治的に文化の革新を成就し、第二は宗教改革を遂げ、第三は産業革命を成し、第四は東西の航路發見に依て世界の文化に貢献し、第五は文藝復興に依て近世文化の先驅となつた。彼程優良な子供を生落した其羅馬の産みの親は何であつたか、それは道路、郵便、新聞の三位一体が夫れである。郵政の發達と道路の發達とが互ひに提携して密接離れず國運一般の進展を促進したるは獨り羅馬帝國のみに非ず世界何れの國の文明發達の経路も同じで、此例、ダビテソロモンの治下に於ても、ペルシヤ・キルス王以下、アツシリヤ、セミラミス治下悉く夫れで、羅馬以來は之れに新聞の發達が併行し、アルプスの障壁も此文進歩の前には抗すべくも非ず遂に全歐文明亂の豪華時代を出現した。郵政事業の人類文化に寄與したる事斯の如し、通信事務に身を投じ來れる事茲に二十餘年に及ぶ我福正義君の今日までの努力たるや吾人、滿腹の敬意を拂はずにはあられない所のものである。明治廿九年十二月十三日日本郡古仁屋町古仁屋、故常次郎氏嫡男に生る。大正七年十一月古仁屋町郵便局通信事務員となりて昭和十年八月に至り其年九月諸鈍郵便取扱所長を拜命、同十二年十二月三等郵便局に昇格と共に其局長となり今日に至る。令室との間、二男三女。

糖業組合長 三島廣助君

大島郡西村諸鈍

心が細か、細が心か、兎角草が生え易い、油断をすれば畑は草だらけである。吾等は世界の草の種を除き盡すことは出来ない。除き盡すことはまた我等人間の幸福でないかも知れぬ。然しうつちやつて置けば我等は草の中に埋没されて了ふ。我等人の爲に草を除かず、己の爲に草を除くのだ。草の爲に草を除かず、生命の爲に草を除くのだ。敵國外患なければ國常に亡ぶで草がなければ農家は墮落して了ふ。わが内外の草を除らなければ我等は終に平和の内に腐つて了ふ。以上は文豪徳富蘆花の名作みみずのたわごとの一節、之れ我三島廣助君の居常、實踐修養の象徴の如し。君は故権吉氏長男、明治三十八年二月五日生、本年三十四歳の小肚公共人材である。諸鈍尋常高等小學校を卒業して青年團員となり、役員に擧げられて自他の修養を遂げ、昭和六年五月風くも糖業組合長に擧げられ、翌七年諸鈍報効農事小組合長、翌八年十一月區長と年を遂ふて諸要職を占め、全十一年村經濟更生委員、同十二年後對策委員を屬託されて改々活躍中である。其間、昭和十年國勢調査員の任を帯びたる事あり、先之、同六年五月田畑耕地整理を開始し全十年完成、現に昭和十一年開始の四十二町歩の縣行造林人夫長として努力中にて一方、家職として養蠶、養豚、紬等にも染手す、令閨の間男四女一、長男尋常六年、次男全四年、長女全年生と。

大屯神社司 鹿島坊太郎君

大島郡西村諸鈍



國民精神總動員の實を擧ぐる所以のものは國體の精華を究め祖國の實相を体得して以て強健なる精神及び肉體を涵養するにある。即ち觀光は其國の歴史を物語る史蹟を訪れ、或ひば忠臣偉人の遺蹟を尋ね、淳風美俗に觸れ、雄大な自然に接し山野を跋躡し、或ひは躍進途上にある産業を視察するなど、何れも皆、國民精神總動員の線に沿ふものである。觀光事業關係者中、觀光が、斯の如く國家的重大意義を有するものなるに思ひを致すもの甚だ妙いのであるが、今、茲に如上の立場から旅館事業の意義を知り、高尚且つ健全なる方策に依り旅客誘致と待遇に留意し、觀光報國の成果を収めつゝある鹿島坊太郎君を知るは意を強ふするに足る。君は故其真氏嫡男として明治十五年六月三日、現所に生れ、諸鈍小學校簡易科を卒業し、其後、農業に従事し、後、上京して大工職に従事する事二ヶ年間、後、歸郷し昭和七年旅館業を開業し、普く設備を整へ待遇懇切を信条として今日に至り、一方同十年十月より當地鎮座、無格社大屯神社の任を拜して朝夕奉齋を怠らずと。場所、海岸に面して風光極めて絶佳の個所、令室の間男一、和三君と呼び尙幼少六歳なりと云ふ。

村會議員 榮 虎吉君

大島郡西村諸鈍



白鷗水にあり悠然として浮び清閑自得し而して其の足蹠、少しも息ふことを得ず、是を以て其性を失はず人の世に處するも又斯の如きのみとは古人の格言である。高遠の境を志し乍らも、眼前足下の本分を充分に盡して一步々を堅實に進み行くならば幾千里も踏破して必ずや理想の樂園に入る事が出来るに違ひないのである。斯様な處世道の實踐を以て完人の境域に至つた人に榮君がある君は慶應三年三月一日舊藩時代の所謂外城三役の一たる横目を勤役したる榮佐榮徳氏長男に生る少時、寺小屋式に依る教師を招きて受講する方法を以て勉勵し然して後、諸鈍簡易科を卒業長じて農業の農に精勵し傍ら公共に身を奉じ、戸長たる事六ヶ年、砂磔同業組合検査員六ヶ年、農會議員二期八ヶ年完務等の事歴あり。其間、大島砂磔物産代理人聯合會長大島稅務署長より砂磔代理人トシテ滿十ヶ年以上克ク稅務ニ精勵格勳シ其ノ任務ヲ遂行セラルノ主文ニ依リ昭和十一年十一月十日受表彰、又、土地賃賃價格改訂調査ニ當リ多大ノ援助ヲ與ヘタルヲ推賞ニ値ストの主文に依り同日前日稅務署長より受表彰の事あり、昭和十二年六月二十五日村會議員に推舉され七十三歳の老齡を以て郷村の爲に勤みつゝある會で學校敷地(時價百圓)、古仁屋等數地寄附等の善行あり、男四女二、長男命彦君滿洲國ホテル事務員、次男茂照君千葉縣にて寫眞館經營中、三男幸榮君、林姓を肩し、在大阪四男虎男君、同、女二、孰れも嫁す。

村長 龜澤道喜君

大島郡西村諸鈍

本村の所在せる徳之島は昔琉球國に隸屬し、琉球三十六島中の一にして大親なる島頭赴任して統治せしが、慶長十四年島津氏琉球征伐の結果大島郡五ヶ島島津氏の所領に歸したり。此に於て慶長十八年島津氏は始めて代官を龜津に置きて島政を司らしめ島内四十五ヶ村を三間切六噺に區劃し、一噺に與人以下噺役拾數名を配置して政務を執行し來れり。明治四年廢藩置縣となり、慶長十八年島津氏の支應を龜津に置きし以來、慶々島内行政區劃の改正あり、戸長制度の下に正副戸長を置き、民選、官選の變遷を経終に明治二十年一月島内一般又、行政區域の改正ありて今日の觀を呈するに至り。此の時秋徳、和瀬、久志の三村は郡内に同村名あるを以て龜澤、徳和瀬、下久志村と改稱せり。而して役場所在地は與人時代より明治十年に至る迄は平野篤法氏の宅にあり、後其隣なる舊役場敷地に移りしが、昭和三年五月下久志なる古川鑛山事務所の寄贈を受けるに及び今年五月二十八日移轉工事を開始し七月二十一日竣工せしを以て役場を此所に移せり。

現村長龜澤君は先考萬信氏の息、明治十六年五月四日を以て龜津に生る。東京中學を卒業後更に日本大學に學びしが中途退學して歸り、袖燒附の製造販賣を業とし傍ら村會議員として村政に參與する事二期、昭和五年村民の輿望を擔ふて村長に就任し、具さに村政を執掌して今日に至つた。此の間敬老會を組織して克己復禮を奨勵し、縣道開鑿港灣修築に功績少からず、園藝を趣味とす。長男博君は昨十二月七日支事變に出社し、二男正君は岩手醫專に、三男美久君は伊佐農林學校に在學中。他に一男五女あり。

村會議員 福岡富隆君

大島郡西村諸鈍



駿馬をして全力を出さざる事仕方がないといふものゝ、馱馬なら馱馬丈けの全力を出さざる事が出来る。いくら馬が良くても乗手が下手なら仕方がない。一村の長となるべきものは即ち此乗手の心持がなければならぬ。君は克く是を心得たる人、常に手綱捌きも鮮やかに、村民をして全力を出さしめた様に見える自治政の練達者であり、現に村會議員として圓熟せる手腕を以て村治當局の顧問格となり長老の實目を持してゐる。明治四年六月十八日福千代氏長男に生る。龜津小學校高等科卒業後、同校教授生となりて五ヶ年間勤続、尋常小學校教員免狀を取得し次で正教員となり西方村藤川小學校長たる事三ヶ年間、其後、育英界を辭し、明治四十一年、口永良部島知名村長に推選され在職五ヶ年、克く村治を總括して遺憾あらしめず、次で住用村長となり在職五ヶ年、自治向上に治績を止め、昭和元年龜津村長に推選されて一期完務、其間、小學校建築、高千穂神社建築等の事蹟あり、同十一年六月村會議員に推選され産業組合監事を兼ねて今日に至る。趣味讀書、令室の間男四、女二あり、長男文武君、台灣新竹洲新南小學校長として奉任の待遇を受け、次男文秀君兵庫縣警察界に奉職し目下神戸署勤務、三男知名君、台灣新竹洲小學校訓導、四男他君、朝鮮金州稅務署勤務、長女千代子さん、他一家に嫁し在大阪、二女久子さんも又嫁し現在朝鮮に在り。

軍人會長 寺田佐市君

大島郡西村諸鈍

流轉してやまざる方有生滅輪廻の色空の諸相人生茫漠として際涯のない暗黒の曠野である。この中に迷へる無類の旅人こそ我々人類の姿であらう。然らば何をか目標とすべき、何をか求む可き。光りの方へ、生命をよりよく充實する爲に光りへの進軍、光りとは信念であり意志の力に他ならぬ。信と其實行のあるところ、百の難關を突破し千の險峯を突破する。君は若くして意志堅固、自己の良しと思ふことに向へば必ず之を成し遂げると云ふ氣質、勇氣と努力は求めずして生じ、衆望と地位は自然に聚まる。君は明治二十四年九月九日佐太郎氏長男として現所に生る。龜津尋常小學校卒業後、家業の砂磔紬製造販賣業を手傳ひ。明治四十四年徵兵に合格し鹿兒島歩兵第四十五聯隊に入隊し大正三年滿期、上等兵に昇り下士適任證を附與されて退營、同六年本村軍人分會會長となり爾來、引續き選を累ね現在人員百五十五名を統率して今日に至る。其歳、本村消防組小頭となり、昭和二年村公設消防組頭を拜命し、同七年六月村會議員に當選し現在二期目の任に在り、本村煙草小組合長、砂磔検査標準査定員等を兼ねて活躍中である。其間、昭和三年一月消防功勞に依り受表彰、同十年九月消防功勞受表彰、同七年キング表彰を贈らる。尙、先之、同三年消防功勞に依り縣警察部長より感謝状を受く、令室の間二男六女を擧げ、長男佐太郎君、鹿兒島二中を卒へて目下上京勉學中、長女他家に嫁す。

自治功勞者 永吉安章君



大島郡龜津村龜津

「琴絃は其張らるるに於て唯音を發するの如く、弛べば則ち音低く、愈弛べば則ち音なきに至るのである。弓弦は其張らるるに於て唯音を發するの如く、弛べば則ち音低く、愈弛べば則ち音なきに至るのである。...

産組支所長 實吉角敬君



大島郡龜津村龜津

「オマハ一日にして成らずとの諺の如く、凡て小事でも忽せにしないで着実に一歩々々進めて行つた結果は最後の勝利となりて現れる。...

郵便局長 盛島角一君



大島郡龜津村龜津

人生は洋々たる春海の様な順境のみでなく、逆捲く怒濤の逆境もある事を知らねばならぬが、順逆二境に在つて毫も動亂する事なく常に心の平静を持つて富に處するも貧に處するも坦然として動かさざる事、山の如く境界を訓練してゆくに必要がある。...

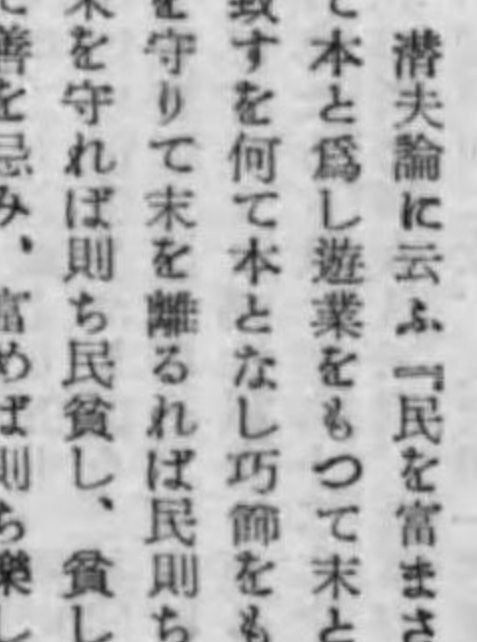
村會議員 里村德壽美君



大島郡龜津村龜津

地方一局部的なるを見ても、其活躍努力したる單位の大小は必ずしも直ちに其人物の大小如何を決するものでもなければ、その事蹟の尊卑を決する標準でもあり得ない。...

方面委員 前田前富君



大島郡龜津村龜津

「潜夫論に云ふ『民を富まさんには農桑をもつて本と爲し遊業をもつて末となす、百工は用を致すを何て本となし巧師をもつて末となす、本を守りて末を離るれば民則ち富み、本を離れて末を守れば則ち民貧し、貧しければ則ち陋くして善を忌み、富めば則ち樂しみて教ふべし』と...

小學校校長 新納盛定君



大島郡龜津村龜津

小學校の序に「古人は幼穉に教ふるに能く言ひ能く食ふより即ち教有り、以て濼掃應對の類に至るまで、皆習ふ所あり、故に長大にして語り易し、今の小より只對へを教ふ事を教へ、稍大なれば即ち虚誕の文を作るを教ゆ、皆其の性質を壊るなり」と喝破したるは理りある哉、實に人生の最も重要な時期は其兒童時代にある。...

青年學校 正八位 指導員 碓山國勇君 大島郡龜津村龜津

日本の相撲の餘韻、禪と俳句と詩の餘韻、旅順攻略の眞最中に詩を賦したる乃木將軍の風韻、戦ひの艦上に尺八を吹奏した八代將軍の雅懷、此風韻あつて日本は政治と戦ひから惨忍性が退けられる。支那やロシアの兵隊が戦の跡に凄惨なる虐殺強奪の醜事を殘すに對して、日本軍隊の戦ひの跡には數編の詩が殘る。息詰る氣持、壓迫感で改革を遂げむとするのが赤色共産主義とファツシヨの共通點である。日本の改革はかかる息苦しいものであつてはならぬ。春風駘蕩國民と共に和協して、戦争でも大改革でもやつてのけるところに日本國民の偉大性があり、我開國以來の國風である。君には此風韻の萌しがある。數年前まで我國を風靡した理論家型青年の陰翳が棄にたくもない。明朗新鮮、現代日本の代表型である。大正四年五月八日本郡龍郷村赤尾木、吉次郎氏四男に生る。昭和八年三月大島中學卒業、全十一年一月一年志願を以て臺灣歩兵第一聯隊に入隊し其九月任伍長、十一月任軍曹、十二月七月任曹長、全日附見習士官となり八月三十日解隊、先之、全十年龜津高等小學校代用教員を拜命し、全八年八月二十日訓導に補せられ、全九月龜津青年學校指導員となり兼職中の處、全十二年四月一日附指導員專任となり後進指導に邁進中である。趣味釣魚、令閨キサ子さんの間男一發一郎君と呼ぶ。

農業功勞者 東喜祐則君 大島郡龜津村龜津



人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如しとは東照神君の名言である。何事でも急速に目的を達しやうとしても容易に達するものではない。深謀遠慮を以て歩、一歩、その一日一瞬間を忠實に進み行くなれば必ず何時かは理想の殿堂に達するに違ひない。人、遠き慮り無ければ必ず近き憂ひ有り」とは千古不磨の鐵則である。中途挫折、辟易退行を欲しないならば決して飛躍を望んではならない。斯くの如き信念を實際に行ふて幾十星霜を一日の如く、終始一貫不變不撓、以て人生の大道を堅實に歩き、温厚篤實、勤儉力行の人格者として郷村一圓の人々より尊敬と愛慕を向けられてゐるのは東喜祐則君である。先考喜祐慶氏長男として明治十六年六月十四日現所徳和瀬一九六番地に生る。神之嶺小學校を卒業し爾來農事に精勵し、大正十年より現業の大島紬業を開業して益々家運を隆盛ならしめ、昭和十一年五月郷黨の信望を擔ひて龜津村會議員に當選し次から次へ村治改善の爲めに盡瘁しつ今日に及ぶ、天性温厚、宛ら佛陀の大慈心を彷彿せしむ。令室との間に男一、女四あり、長男第一君伊佐農林卒、長女嫁し、二女在自宅、三女在神戸、四女在小學校と。

教育功勞者 産業組合理事 深川傳生君 大島郡龜津村龜津



品性の高下純不純は人の値打を計る物差である。教師の教ふるところ、生徒の學ぶところ其他家に社會に人間の教養はつまるころ、品性の建造如何によりて其効果を判ぜらるる、或ひは富國強兵と言ひ、或ひは産業本位と言ふ様に一國の政治が能率發揮に因はれ巧利主義の風に漂蕩せらるる状いつの間には在上の君子をして其風格を下劣ならしめ多數民人をして利己打算の生活に離脱せしむるに至る。君は己が天職と信する教育道に向つて克く自分を盡し風教指導の体現者として俯仰天地に愧ぢざるの人、以て完全なる社會人、公民の師表とするも可であらう。明治八年三月八日富高氏次男に生る、明治三十三年七月本縣師範大島分校所卒業、其年、本村龜津尋小學校訓導を拜命し、次で全三十五年六月神之嶺校に轉じ、三十九年三月三轉龜津尋小學校に轉じ、大正四年實久村依校、全八年九月龜津村神之嶺校に轉じ全十四年二十五歳より五十一歳に亘りたる二十有六年間の教壇生活を退く。其間、教育功勞者として受表彰三回、爾來、農業に専らなる傍ら大島支部時代より現在組合に至る迄一貫、産業組合理事たると共に昭和十二年來の學務委員を兼ね其間國勢調査員三回、農業調査員等歷任、令室の間三男二女、長男清一君警視廳巡査、次男清二君臺灣高雄驛勤務、三男清三君設計圖案家目下在自宅、長女は嫁し、次女在自宅と。

八幡神社神職 方頭委員 松本直君 大島郡龜津村井之川

昭和九年五月十日以來、井之川錦之峯八幡神社(祭神應神天皇、由緒島内毒蛇被害消滅祈願所として明治八年鹿兒島荒田八幡神社の神靈を勧請し其年社殿を新築して今日に至る)神職として日夜奉齋に餘念なき松本直君は、育英養粹二十有餘年に亘り、明治四十一年三月三十一日附、時の鹿兒島縣知事坂本鈇之助氏より特殊功績を認められて誦表されたる教育功勞者である。出生明治八年八月八日、先考池高氏は村會議員三十有餘年の長記録を累ね、其間、自治、敬神思想上に多くの功績を致したる人、君の教育上の事歴明治三十一年本縣師範講習科修了、次で尋小准教員免狀取得、翌三十二年本郡天城村花徳校准訓導、全三十三尋小本村正教員免狀取得、龜津村神之嶺校訓導に轉じ在職七年、同三十九年龜津校訓導に轉じて至大正七年、同年大和村大柵校長に榮進し翌八年十一月に至り退職、全九年秋、本縣産業主事補に任ぜられ島内組織物出張所勤務、會計係被命、在職二年の後實業界に轉じ島津土地建物會社に入り在職二ヶ年、更に電氣會社(鹿兒島)に入り在職四年、後、照國神社講習會に受講して神職となり次で井之川區長に擧げられ、衛生部長を兼ね、翌昭和十年一月縣方面委員を命ぜられ、教育後援會長等をも兼ね活躍中である。一男勇君、中央氣象臺書記兼技手なるも現在歸省中、令孫男二人を擧ぐと。

村會議員 大澤實榮君 大島郡龜津村井之川

設苑に曰く「樹高き者は鳥之に宿し、徳厚き者は士之に趨く」と、史記に曰く「桃李言はざれども下自ら蹊を成す」と、要は何づれも徳の孤ならずして必ず隣あるを言つたのに外ならぬ。孔夫子が説いた仁の道も畢竟するに、これ社會共存の原則を道德的本源より述べたものであつて、人格の發露としての行為の方向を指標したのである。資性快活にして圓満胸中一點の私心なく、公明正大、人の爲に盡して自ら愉快とする君は、實に稀らしい高士的人格の所有者と謂ふも溢美でない。實廣氏長男として明治三十一年三月二十日に生る。神之嶺尋常高等小學校を卒業し、大正七年神戸川崎造船所材分荷場に入りて昭和元和に至り、其歳母君危篤の爲歸郷し、爾來農業に力を注ぎ、一方公人として推され、昭和二年青年處女會會長となり、貯金獎勵を進めて實績を擧げ、在職全四年迄、現在昭和三年來の井之川私設消防組の小頭、全六年來の大島稅務署管内大島代理人、全七年來の村會議員(二期目)等の公職を兼ね、通學道路開設、交通整理等の事蹟を擧げてゐる。家職農及び昭和十一年來の富國徵兵參事、趣味漁撈、家庭令室アチヤさんとの間女四、長女ケイ子さん目下小學二年生と。

軍事功勞者 頂萬上君 大島郡龜津村井之川

我大日本帝國が、今日世界の列強間に第一等國を標榜し、又認識され堂々と遜色のない勢力を蓄積する迄には多くの犠牲と痛苦とをその代償として支拂ふたのである。日清戦争はその第一であり日露戦争はその第二である。喧屍山河、阿鼻叫喚の修羅の舞ひ、雨飛する銃火砲彈の中、君國に献げた赤心燃ゆる一身を賭して突撃より突撃へ!日露戦役勃發するや、三十七年五月應召して熊本野砲兵第六聯隊に編入されて與第二軍に屬し勇躍戦地に進み、初め特務兵として、後一等兵となりて昌圖會戰迄從軍し全四十年二月凱旋した、君は功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。故清氏嫡男として明治十四年七月十五日生る。明治三十六年鹿屋農學校農科を卒へ其年徴せられて上記聯隊に入營し、後、教育界の人となり龜津尋常小學校訓導たる事六ヶ年、伊仙村役場農業技手となりて在職三ヶ年、次で龜津村神之嶺尋常高等小學校訓導を奉職し十九ヶ年間、次々兒女薫陶の聖業に邁進し、昭和十二年三月三十一日退職し、今や功成り名遂げて悠々自適の傍ら後半生に對處の策を練る。趣味園藝、家庭、三男二女、長男軍時君農事に従ひ、次男繁滿君、師範卒、喜界村小學校訓導、三男定二君、市來農藝學校卒業現在自宅、長女ヨシミさん、在警視廳泉無喜生君に嫁し、二女タツ子さん、在神戸、三井技術員頂彦君に嫁すと。

方面委員 北郷 徳健君



大島郡天城村兼久

れて、弟子の曾哲はかく答へた。徒らに權榮富貴を欲せず優裕として塵垢の外に、仁に親しむことの美しさはこの句の通りであらう。道は終日草鞋で索し求め得られるものでなく、却つて枝頭に充分蕪するのではあるまいか然り、君が壯年より營々辛苦して、内、齊家の道を全ふし、現在範を一村に示して郷黨に仰がれ、部落の大立物となりて、郷土發達、隣保協助に碎身の勞を捧げてゐるのこそ、己れの大職に忠なる人、自己を知つた反省深慮の士と言ふべきである。故徳芳氏男として明治二十九年六月一日大島郡天城村兼久一三〇六番地に生れ、兼久尋常高等小學校を卒へて名瀨町に出て、商估の人たらんとし雜貨商店に入り、獻身其職に勤むこと八ヶ年、次で平土野に七ヶ年を關し、大正十二年十二月歸郷して現所に雜貨商を經營し傍ら農事を兼ねて克く産を成し、昭和十一年八月九日區長に擧げられ同時に本縣方面委員に任命されて活躍中である。救助者四名、男二女二、一戸當一日六錢支給、目下、青年團員と協力して萬全を期しつゝあり、家庭、女三、長女セイ子さん、在青年學校、二女タカ子さん、高小一年生三女千鶴子さん、尋六生。

村會議員 秋田 爲廣君



大島郡天城村平土野

自ら節儉を守る此二者實に人をして自己の非水を飲み自己の麵包を喫せしめ、人をして職業を學習し其當に爲すべき善事を行はしむるなりとは西哲の曰へる所、君は當に此言に適ふ人と謂ふも溢美の言に非ず。精勤不退、遂に家産を成すや其生地兼久部落並に青年團、兼久校御眞影奉安殿建立費、時鐘(時價六十圓)製糖所資金寄附、阿布木小學校校門(建設費百五十圓)單獨寄附の廉を以て大正十四年本縣知事より表彰されたる等の美譽は何れも君の有徳の士たるを立證する活資材たらざるはない。明治二十年七月二十日日本村兼久、故爲善氏男に生る。明治三十九年實業方面に立志して花徳の雜貨商店に入店し商會得に懸命となり精勤格勤十ヶ年、大正四年に至り生地にて商業を創め苦心數年、同六年十二月現地に移りて商店を開き兩來、砂糖並に煙草小賣商を營み漸次信用を昂めて今日に至る。其間、大正八年の交、糖業にて五萬圓の巨利を博したる事あり、公職(前)小組合副會長、昭和四年家屋調査員、經濟史生委員、選舉權正委員(現)昭和七年來の村會議員、學務委員並納稅獎勵委員、土地貸賃價格調査員等。男二女六を有し長男利夫君、鹿兒島高商卒、現滿洲工業會社員、柔道三段、次男爲憲君、同上卒業、四女聯隊在隊中、劍道三段、長女ツル子さん、次女キヨ子さん、鹿高女在學中、三女ミネ子さん、鹿高女在學中。

小學校長 武宮 清盛君

大島郡天城村阿布木名

田舎者の精神に文明の教を施すと立派な人物が出来ると、文豪漱石、名作二百十日の中に、いみじくも喝破す。我阿武木名校下の兒女、武宮校長の薫陶に依り優秀なる次代國民の魂を鍛ふと云ふも過譽の言に非ざる可し。天城村阿布木名小學校沿革、いま詳かにせず。茲に歴代校長の芳名のみを掲ぐ。前田幸太郎、山上正一郎、川平植吉、東才二、川崎茂助、園師正徳、吉岡元祐喜、小倉彦五郎、時直壯喜、(土岐)、土岐直藏喜、碓山國榮、文田三部郎、中島吉應、諸氏相次ぎ十三代の君に至る。君は明治二十七年十月三十日和泊村和泊武宮前森氏男に生る。郷邑小學校を経て大正三年鹿兒島縣立第二中學校卒業、次で本縣師範本科第二部に入り全五年卒業、直ちに面繩小學校に奉職し全六年東天城村山校、全八年知名村下平川校、全九年和泊村和泊校、全十年同村内城校、全十二年三月再び和泊校、昭和二年同村立青年校指導員、全三年再び内城校並に全青訓所主事、其六月全校長に榮進し全四年八月喜界村坂嶺校長、全六年再び内城校長に復歸し青訓所主事兼務、全十二年本校長に榮轉して今日に至る。其間、大正五年三月本科正教員免狀下付、其年八月歩四五聯隊に於て國民軍幹部適任證附與、昭和十一年講道館柔道二段に列せらる。家庭男三女三、長男淑郎君、大島中學生、次男清泰君、三男理裕君、小學生、長女輝子さん、鹿兒島女子興業卒、在自宅、二女恭子さん、女子師範二年、三女繪、幼少と。

村會議員 宮村 永峰君

大島郡天城村淺間



衆の私生活に於ける損害豫防の爲め、諸事の指定をなす事もあらう。或ひは國家の獨占權、收益權維持の爲にする事もあるし、銃砲火藥類の取締の如き危險の豫防と共に一般の公共保安乃至國防上の關係から來てゐるものもあると云ふ風に、されば警察界出身の人、其諸般に通じ民政の機微を知るが故に、其職を退きて一度び政界或ひは自治政に染手せむか意表の衆望を得て當社會に大なる貢獻をなす者少からず、近年都市に於ける議員選舉に際し、屢々、警察出身候補者が最高の得票を以て當選する如きは此意味に於て示唆深き事實と謂はねばならぬ。君も亦警察界出身にて自治体の立物たる人傑である。明治廿三年五月十八日、政幾氏男に生る。岡前校を経て阿布木名校高等科卒業後、農事に従ひ、大正十一年一月東上し警視廳巡查を拜命し兩來、繁榮下の市民保安に盡したる事多年、昭和八年退職歸郷し全十一年村會議員に推舉されて今日に至る。家業農業、二男二女、有り長男永二君、日本大學高等師範部地理歴史科卒、目下、阿布木名校訓導奉職、長女章子さん、小學校二年次男善藏君、二女幸江さん何れも尙幼少なりと。

郵便局長 稻村 武明君

大島郡天城村松原

己れを制する人は最も強し。理想のなき者には煩悶もなく、希望のなき者には苦痛もない。自から自己の短所を知らざる者に發展の機ある者でない。自覚なき者に向上なく克己のない者に進歩はない。盤根清節に際し、自己を笑ひ自己を其渦中に葬らしめず、超然として之を客觀視しつゝ、人知らずして愼みず、また君子ならずやの偉大なる信念に立脚して靜かに善處する事に修養は存するのである。自己を制し能はぬ者は、世の葛藤場裡に没頭し出離の道なき者である。這般の理を信條として至誠至情、改々として其職に従ひ、一方、個人としては親族知己の子弟教育を引受けて其才幹伸長に努力する君は確かに敬服すべき人格者である。故武信氏長男として明治二十二年八月十日に生る。明治四十年大阪英進商業學校を卒業し、其後、歸郷して農事の人となり、大正十二年二月十日現所、大島松原郵便局長を拜命して今日に至る。家庭二男四女、長男武國君、尋常六年、長女博譽さん、尙美高女三年生、二女、小學三年生、因みに曰ふ。君の薫陶を受けたる子弟中、現在薩南州知事川村直岡君、警視廳警部岡明良君其他出色の人材甚だ多し尙、當大島松原郵便局沿革、大正十一年七月申請、全十三年二月十日認可と同時に開局、昭和十一年十月十五日電話事務取扱開始、現在、事務員、男二名、配達員一名也。

村會議員 中島 一臣君

大島郡天城村松原

易经に曰く「君子は徳に進み業を修む。忠信は徳に進む所以なり、辭を修めて其の誠を立つるは、業に居る所以なり」と、忠良なる臣民と云ふも、これを外國流に善良なる市民と謂ふも要は道德を遵奉して法律に従順なる職業を有する國民の謂ひであるが、然しそれだけでは君子と云ふ事は出来ぬ。己れ一身を完成し過ちなきを期するは素より言ふ迄もないけれども、仁は側隱であり同情である以上、利他共存の觀念を以て社會の爲に盡すのでなければ眞の人格者ではない。立志傳中の人と仰がれる我が中島一臣君が壯年より營々辛苦して産を成し、後、公共の人となるや、其行ふ所悉く世の規矩に入り、一身の得失に關せず、力を郷邑に献げつゝあるのは流石である。明治二十九年九月一日故徳起氏二男に生る。阿布木名小學校高等科を卒へ、商業を志して平土野、飯田喜八郎氏經營の雜貨店に奉公し在店五ヶ年、自奮勉勵、克く商機の在る所を察し大いに自得する所あり、大正三年六月現所に獨立營業し専ら顧客本位を店則として名を馳せ、全七年更に精米業を兼ねるに至つて家産益々大をなし、昭和十一年六月村會議員に推舉されて今日に至る。家庭、二男四女、長男鐵二君、目下大阪關西鍼灸學院三年生、二男幼少、長女ミカ子さん岡前青年學校に在り以下小學生或ひは幼少と。

教育功勞者 宮山永峰君

大島郡天城村岡前

白銀も黄金も玉も美人も、名山水も之を書中に求めて盡くる所がないと云ふ、樂みを解し得るとき吾人の胸中は無形に有形に無限の富を積んだと同様である。西誌にも金錢を積したる財寶を有せんよりは寧ろ書籍を積したる書齋を有せよとあり、漢書にも、子に黄金滿室を遺すは一經に如かずと。讀書家たる宮山永峰君の既往に、吾人は此古語宛らの事實を見て敬慕の念を禁じ得ない。君は故永生氏男、明治五年七月十日生、寺小屋式教育に依りて初等科中等科の課程を了し、明治二十七年鹿児島市博約義塾に入り在塾一年、後、本縣師範大島分校場に入りて在塾二年、全三十年卒業し、三十一年天城村兼久尋小校訓導となり在職四年、次で阿布木名校訓導兼校長事務取扱を命ぜられて五ヶ年間に在職、後、生地たる岡前尋小校長に補せられ十八ヶ年間兒女黨陶の實を盡し大正十四年四月、前後十七年間の教者生活を退き爾來、公共界の人と爲りて昭和七年七月職業小組合長となり次で全九年七月松原産業組合初代組合長となり、一方、婦人會、青年會顧問となりて今日に至る。因みに松原産業組は昭和九年六月創立、現在組合員三百餘名、理事八名、監事三名、事務一名、使役者二名、君は創立功勞者にて、其他、砂糖樽製造所を設置し年四千樽の能力を發揮しつゝあり、各方面より表彰状、感謝状を受けたる事甚だ多し、一男四女、有り男君清、大島中、臺灣師範卒、現在、名瀨校訓導、二、三女嫁し四女スミ子さん、在自宅、五女美和子さん、大島高女在學中。

方面委員 崎山信光君

大島郡天城村瀬尾

「雲に聳ゆる高山も、登らばなごか越さらぬ。空を浸せる海原も、渡らば終に渡るべし、我崎嶇洲は西さす東の海の離れし、例へば海の只中に浮べる船にさも似たり。二萬方里の船の四千萬の乗組あり、船の主の指揮を受け文明海に進みゆく、水主楫取多かるに我等も楫取の一人たり、船のゆく手は和田の原、八重の沙路の遠ければ、颯さかまく折もあり、高浪荒るゝ時もあり、船手の業に習はずば追手高浪浪き得て思ふ。港にいかで着くべき」薩摩琵琶歌の木崎原、赤星を誦すると、単人健兒等が、かの維新革命に際し赤脚、六十餘洲を蹂躪せるの偶然ならざるを見る。一方、以上「國船」を聴くもの絃外餘響あり、當國在郷士中、無名の英雄の多き當然なるを知る。我淺山信光君の其一人、農村の自力更生は行政的施設の改善に先立ち大きな精神力を必要とする。夫れは先づ君の如き至誠努力の人々の力に依らねばならぬ。君は故幸光氏の三男、明治十六年三月十日生、阿布木名尋高小卒業後、鹿児島市博約義塾に入りて攻學す。時、日露戦役公共に専らとなり、大正一年より至全十五年農事小組合長、全十五年より至昭和五年、昭和七年より至十一年迄區長職を完務し、現在、昭和七年來の本縣方面委員、産組世話係の職を帯ぶ。家業、農業、砂糖。男二女三、長男信一君、台北郵便局勤務、次男信亮君、大島中學校在籍、長女信子さん嫁し次女メサ子さんが在自宅、三女秋子さん、鶴嶺高女卒、在自宅

方面委員 麓元厚君

大島郡天城村松原



而して佛教の名を藉れる所少からず、藥師瑠璃光如來は東方淨瑠璃國の教主にして日光菩薩、月光菩薩を脇士とし之を藥師三尊と云ひ、藥師藥王の名擴まる。妙法蓮華經藥草喻品に、佛陀藥法を人天に喻へられ、一切衆生（三草二木）我法を聞く者力の受くる所に隨ひて諸の地に住す或ひは人天（小草）轉輪聖王釋梵諸王に處する是れ小の藥草也云々と宣ひ、更に中の藥草上の藥草を示し給ふ。醫藥を衆生濟度不可缺一法をされたる事、この喻品の中に歴々見る如し、方面委員たる我麓元厚君が藥業の人たること、まことに相應しき感がある。君は故仲元氏男、明治十八年八月十日生、岡前尋小學校を経て阿布木名高小校卒、爾來農及大工職を業とし、一方公共の人となり報効小組合長十二ヶ年、農會議員四年等を歴任し、昭和七年松原區長となり、又、全年方面委員に任命され、農事獎勵委員、道路委員、松原産組監事、青年學校指導員等を兼ね、全十三年元旦より大日本化學製藥研究所賣藥配給主所主任となり活躍寧慮の時なしと云ふ。事蹟中、皇太子殿下御誕記念碑（工費三四〇圓）は君の建議に成れるものにて、其他納稅完納思想の普及、弊業方面の施設完備、道路開設等の功績多く、又方面委員として軍事救助者六名、貧困者一を斡旋す。女アツ子さんに養子新田武義を迎へ嗣となす。

教育功勞者 北郷秀俊君

大島郡天城村瀬尾



教育の根本原理は人格對人格の觸發にある。三尺下つて師の影を踏まずとまで故人は謂つた其處まで行かなければ眞正教育實現されるものではない。今や集團教育の學校制度に依て普通妥當の教育に勉めてゐるが古き眞理また新しく要は人格に存する。君資性寛仁至誠、地方教育界の重鎮にして育英に馳驅する事實に幾十星霜に亘つた。君の眞情披露に至らざるなき薫陶を受けた多數の子弟中偉材傑物を多く輩出したるも宜なる哉、明治十六年九月十五日故實岡氏（育英並自治功勞者、大正十五年二月七十一歳を以て他界）の二男に生る。明治四十二年三月私立東京中學校卒業、歸郷して本縣師範本科二部に入り全四十四年卒業し同時に小學校本科正教員免狀を取得し、木慈尋常小學校訓導となる、四十五年三月全校須子茂分教場勤務、其七月名瀨第一校に轉じて大正三三年三月に至り、次で兼久尋小校訓導、全四年十二月田檢尋高小校、全八年九月龜津尋高小校、其年十一月兼久尋小校、全十二年一月西仲間尋高小校と歴任し全四年六月西仲間小學校長に榮進し、次で全十四年神之嶺尋高小校長、全十五年全青年學校主事、昭和三年大田布尋高小校長並伊仙中等公民學校助教諭兼任、全五年兼久、全八年阿傳各校長を歴任し、全十年西阿木名校長に任ぜられ、全十一年高等官八等に叙せられ全十二年三月功成つて退職し、現地に悠々自適す。

前村會議員 中野喜美豐君

大島郡天城村瀬尾

アメリカの自動車王フォードは「茲に一つの河があつて是を利用すれば水力電氣を起し得るに拘らず其水力電氣を起さざる場合は之れ一の浪費である」と云つたが此論法よりすれば世人が靈妙不可思議なる百福の元素、朝々の日の出を見ない位の大なる浪費はなからう。日の出を見る者は各其分相應に成功し世の勝者となる。されば斯る人の多き國は榮え、少なき國は衰ふ。「お早う」の挨拶の聲からして朝寝坊と早起して日の出を見た者とは丸で違ふ。前者には疲勞と衰微と懶惰と頹廢があるが、後者には元氣、意氣、勤勉、榮光がある。之が一年二年と累積の齎す差異を蓋し想像に難からずである。一國の規模に見ても、上位の者が朝寝をする時代は國は衰へる。ローマの廢墟が示す教訓は即ち夫れ、之を個人的に云つても宴會中毒、夜更しを得意に思ふ様な者は、如何に顯榮な者も最早や其人の運命は下り坂である。青年時代から早起きを實行して現に繼續する中野君の生活が則かであるのは當然である。雨の日も風の日も必ず日出前に起き晴天の時と同様に東天を拜せざれば一日氣色が悪いと云ふ君の如くならねば朝起も本當でない。故仲元氏二男、明治二十二年五月六日生、自大正十三年至昭和十一年迄農事小組合長、昭和七年村會議員に推舉され一期完務全十二年區長となりて今日に至る。其間縣道、林道工事監督、農事改良視察、牛馬視察、納稅完納思想普及の爲優勝旗作成、揭示板寄附等美蹟多く、又十五年間雜貨商を營めりと、女夏子さんに在りと云ふ。

小學校長 大重榮寛君

大島郡天城村花徳

從來識者間に於て我民族の思索生活の貧しさの謂はれたのは一再でないが是れ皮相の見にて靜かに我國史を審いても見よ我民族はいかなる深遠な哲學でも教理でも一樣に常識に還元して來た。一例せば一體世界の何處に佛教は私的の生活の規範、儒は政治的生活の準繩と云ふ風に政治と宗教の間にケジメを付け美事に取捌いた民族があつたか。善く物事と物事との關係を知り更に進んで物事の柄を知り、直接生活に關はらぬ事は敢て追及せぬ所謂東洋人の不可知論はカント、ヘーゲルより優る數事等なのである。斯様な偉大なる哲學的素質を持つた民族が世界の何處にあらうか。國史研究の要は我民族の眞の姿を知るにある。將來の國民が之を把握するか否かは我國運發展の死命を制すと謂ふも誇大の言でない。國史教育の力説さる、又所以ある哉我大重君、宿志を茲に置いて研鑽多年に及べりと聞くと愉快に堪えない所である。明治三十年一月十四日早村花良治、安愛君嫡男に生る。大正七年本縣師範卒業、名瀨校訓導を拜命し在職四年、次で喜界島早町校に三年、全十四年、全阿傳校長に進みて二年、再び名瀨校に復し一年、赤木名校に二年、喜界島坂峯校長となり三年一ヶ月、古仁屋校二年一ヶ月等と歴任し昭和十二年當花徳小學校長に補せられ學務委員を兼ねて今日に至る。家庭六男一女、長子信影君鹿二中に在學中、因みに云ふ。當校は其創立明治二十年一月一日なりと。

青年學校長 篠原徳良君

大島郡東天城村花徳

東天城村立青年學校沿革 大正十五年七月一日東天城村立青年訓練所設置、昭和八年九月二十一日青年訓練所を公民學校と改稱し青年訓練を充當せしむ、全十年四月一日公立青年學校と看做さる、其九月四日東天城村立青年學校と校名變更、現在児童數男二〇八、女一三六、職員男二名、女一名、指導員一名、昭和十年九月三十日附、當校長を拜命して現在に至りたる君は明治三十年十月十八日藤原氏長男として本村母間に生る。大正七年三年本縣師範學校一部卒業直ちに眞西村諸師範高等小學校訓練に補せられて在職二ケ年、次で母校たる母間小學校訓練に任ぜられて在任五ケ年、三轉し本村平々小學校長に榮進し在職二年、再び母間校に復歸し訓導として一ケ年勤務、次で本縣青年學校教員養成所に入り昭和四年卒業し、西方村篠川尋常高等小學校長に榮轉し在任二ケ年、東天城村山尋常高等小學校長となりて四ケ年半を關し、昭和十年本校初代校長に任ぜらる。以上、君の經歷の梗概也。天性俊良にして眞摯、君の教育上の抱負を聞く機會無きも其印象に依りて吾人本報の一節「弟子を教ふるには閨女を養ふが如し、出入を厳にし、交遊を謹むことを要す、若し一夜匪人に接近せばこれ清淨田中の一の不淨種子を下す也。終身嘉禾を植難し」を標識さるゝ如きを見る。令聞の間、二男三女を成し長男邦彦君、鹿兒島中學に在り、長女を恭子さんと呼ぶ。

産業組合長 城嶺時君

大島郡東天城村山



四國八十八ヶ所を廻る順禮は其納札に必ず同行二人と書く、之は自分一人が靈場廻りするに非ず、開祖大師と共なる事を現はすものであるが、今此大天地間にありと凡ゆる森羅万象一殊に人間は何れも天地創造の神と共に人生を歩みつゝあるものと信するならば、人間は何れも四國順禮の納札ではないか、常に天地創造の神と同行二人なのであるから如何なる場合にも人間は孤獨でなく樂觀の元素と共にある事が知られる。九條武子さんも歌つた「大いなるものゝ力に引かれゆくわが足もとのおぼつかなしや」と。然し實際は引かれゆくのではない、共に行くのである。此理を信する人は何人も足もとが覺束なかつたりせぬ。物の行詰りを信ぜぬ我城嶺時君の生活の如き誠に我等後進の手本である。明治十九年四月十七日故米信氏二男に生る。先考は六十四歳にして他界すると君は初め本村役場に出仕し税務係たりし事二年大正七年、大島支廳にて燃絲講習受講し、其年獨力にて燃絲業を開業し努力奮勵、遂に家産を成して現在一ケ年、百二、三十斤、使用人員男三、女四を有し徳之島々内唯一の燃絲場として知らるゝに至る。又、本郡内に於て初めての燃料を製作せる人と謂はれ、先年聖上陛下行幸の御り、献上の神原料は實に君が精撰製に依るものとさる。現職、山産業組合長に選任されたのは昭和六年にして、其創立に奔走したるは先其熱誠は夙に村民の知る所にして功勞甚大なるものあり令聞との間、子女なきを以て養女チエ子さんに入れて寵愛すと。

小學校長 永喜仲清君

大島郡東天城村山



幼童の師は其の運命を左右すとはアラビヤンナイトの昔から云ふところ、雀海に入りて蛤となり、雁淮に入りて鴈となり、鰻魚、鰻も能く化せざることを無し、唯人のみ能くせず、哀しい哉とは國語に嘆嘆せり。共に眞正の人間教育の容易の業にあらざる事を謂ひたるもの、まこと、才智を教ゆるのみを謂ひ上、帯にて掃き箆にてすくふ程のあり、然るに眞正の教者求めて多からず此稀なる中に吾人、我永喜仲清君を得たるは欣びに堪へない君が現に校長たる當東天城村山尋常高等小學校は其沿革 明治三十年一月山簡易科小學校として設置され全二月一日山尋常小學校と改稱、全三十三年八月平々に分校設置、全三十九年五月實業補習學校併設、大正八年三月高等科併置、初代校長清水喜美淳氏、現在児童數三三九名、學級數尋常科六、高等科二、職員男八名、女二名、君は明治二十九年三月三十日故次良氏長男として龜津村諸田に生る。大正七年本縣師範一部卒、本村花徳尋常小學校を拜命し次で山、龜津各校を歴任し大正十四年西方村管轄校長に進み、次で花徳校訓練、笠利村手花部校長、伊仙村鹿浦校長等を経て昭和十三年三月當、山校長に補せられ村學務委員を兼ねて今日に至る。其間、昭和二年實業補習學校教員養成所卒業、令聞との間一男二女あり、長女光子さん、鹿兒島中學、長男精一君、二女員子さん、小學生

村會議員 直島直治君

大島郡東天城村花徳

あらゆるものは勤勞によりて生み出され吾人の生れ乍らに有する天分は、勤勞によりて世に顯はるゝ、勤勞を賤しむは人間生活の眞諦を解せざるもの、そして自ら自己を輕蔑する次第となる。昭和十年、聖上陛下長くも本縣に行幸の初り、大島郡内より只一人の指定を拜受して天覽品に供ふる供養飼育方を命ぜられ光榮の出品を奉仕したる我直島直治君は明治二十五年一月十六日生、郷養卒業後、神戸市に出でて勉學多年明治四十三年より大正十年に至る十二ケ年間林爲良代議士の貸金其他の事務を執掌し完了と共に歸農し爾來、農業、製絨、砂糖販賣等を家職とし、一方、公共に携り大正十三年村會議員に推舉され爾來果選四度びを累ねて今日に至り、現に兼職中の名譽職のみにも村農會副會長(昭和五年來)、養蠶實行組合理事、郡養蠶會總代議員、郡農會準備議員、蠶業組合監事、花徳教育後援會副會長、花徳學校後援會會長、同衛生組合長等の多きに亘る。其間、養蠶試驗場設置に關し地元より寄附金三千圓納付の件、郵便局、築港問題等に盡力したる等は君の才幹の尋常ならざるの一證左たり。趣味園芸、令室の間一男、五女を挙げ、一男孝綱君、伊佐農林學校を経て、現在、東京日本大學經濟科に在學中長女サト子さん、谷山町西家に嫁し、次女ハツエさん、古仁屋町中村家に嫁し、三女セイ子さん、自宅に在り、四女チカ子さん、五女イソ子さん、何れも小學校に在校す。

元井友一君

大島郡東天城村山



「樹の實でも花でも、十二分に實らせ、十二分に花咲かす時は、收穫多く美觀でもあるに相違ない。併しそれは福を惜まぬので、二十輪の花の蕾を、七八輪も十餘輪も摘み去つて終ひ、百顆の果實を、未だ實らざるに先だつて數十顆も摘み去るが如きは惜福である。花實は十二分ならしむれば樹は疲れて終ふ。七八分ならしむれば花も大に實か豊かに出来る、そして樹も疲れぬ故、來年も花が咲き實が成るのである」、這是幸田露伴の努力論の一節、花卉栽培の理に託して人間處世の機微の在る所を言つたものである。無理を排して自然に従ふ。根本の人生觀に此の理の會得があれば人と共に生を樂觀し、生の觀喜を味はふ事が出来る。此共存共榮の道に生きる人こそ眞の人生を送る人であると思ふべきである。君は夙に此理を了畢し實生活上に實現したる眞人である。明治三十年五月五日故江田文太郎氏の四男、後、母方の姓を冠す。先考は明治七八年の交、廣島附近の物資を携へて徳之島に至り砂糖取引を開き而して居を此地にトシ家産をなして大正十二年、七十四歳にて他界す。長兄愛助氏は小學校奉安殿建設費其他社會的方面に幾多の寄附をなし又時の宣傳者として聞えたる人、君は大正九年三月鹿兒島實業學校商業科卒業、全十年徴せられて熊本野砲兵第六聯隊に入隊し、全十二年上等兵に進みて歸郷、鹿兒島小川町にて砂糖依託商を開きて四年前まで在りたるも、後、現地に歸り農、精米業を家職として勉勵す。趣味園藝男三女二を有す。

徳之島蠶業試驗場分場主任 後藤武夫君

大島郡東天城村花徳



鹿兒島縣蠶業試驗場大島支場徳之島分場沿革 昭和四年十二月十日縣告示第四六六號を以て蠶業試驗場徳之島分場を東天城村花徳に設置し大正十四年四月一日同所に設置せられたる縣蠶業模範場は、昭和四年十二月限り之を廢止し、同所敷地、建物及桑園等は徳之島分場設置と共に之を其のまま繼承せり。現主任後藤武夫君は明治三十七年八月二十九日宮崎縣宮崎市宮田町に故作平氏四男として生る。大正十二年三月宮崎中學校を卒業し、次で鹿兒島高等農林學校に入り研鑽數年、昭和三年三月同校卒業、同四年十月本郡名瀬町本縣蠶業試驗場大島支場に技手を奉職し、同五年十月蠶業取締所沖永良部出張所主任に進み、同七年八月當、徳之島分場主任となり、爾來、専心蠶業興進に盡して今日に至る。令室の間、男二を有す。

村會議員 蔀 富 豐 君

大島郡東天城村花梅

かの枝葉繁茂して亭々天をも摩せんとする蔚然たる巨木の人類に寄與する恩澤、即ち夏日行人を樹蔭に憩はしめて其の疲勞を醫せしめ、冬は風雪を遮りて其の隣人を守り、春は花咲き鳥うたひて衆を娛ましめ、秋は紅葉の錦を織りなして天地の美を添へる。以上の恩澤を以て當花徳の富貴として數百年來住み古し代々全地方に盡し、郷黨の間に施し來つた事家の功德恩恵に比するならば恐らく當らずと雖も遠からざるものではあるまいか。多額納税議員候補に擧げらるる當、事家の現主富豐君が努力自成人にて加ふるに寛仁大度の人たるは此意味に於て郷村の爲に慶祝されねばならぬ。故中村富盛氏次男として明治十一年三月二日現所に生れ、同二十六年先代富壽氏養子となりて現姓を冒す。花徳校を卒へ後、商業界の人となり雜貨商を開き四年間程にて辭め大正十年砂町商に轉じ、一方、農事をも兼ね、昭和二年村會議員に推擧されて爾來、果選三期今日に至る。事蹟、學校建築、道路開設等、四男二女あり、長男資次君沖繩縣那覇市にて雜貨商開業、二男、農業、三男秀雄君、在臺灣、四男、平土野にて商業を営み、長女、二女何れも他家に嫁すと。

郵便局長 泰山 榮 君

大島郡東天城村母間



近日あるの之を遠くに求むる者の愚なるを道破したのが戴益の有名な此詩である。ともすれば人は自己を過重するの餘り徒らに大なる野望を抱いて眼前に爲さねばならぬ責務が横はつてゐるのを顧慮しない様な事にもなり勝である。然し君が歩いた道は全く堅實な努力の集積であり、之で眞の正義人道である。明治十三年一月二十三日美代善氏三男に生る。全三十四年本縣師範大島分校所卒、直ちに東天城村母間尋常小學校訓導となり、次で龍郷村大勝、東天城村山、同花徳、山、母間の各校訓導を歴任して大正七年三月退職し、翌八年三月本村庶務主任拜命、同十三年十月郵便局長を拜命して今日に至る。其間、昭和七年村會議員に當選して一期完務、尙、農會議員をも歴任す。社會事業に熱誠し昭和十一年來の母間懇談會(會員二十四名、勸勉勵行、時間勵行を主とす)、全十二年來の水タンク(水道組合を組織し水利の便を圖る)約七ヶ年繼續中の母間保護會(還曆祝賀費用を節して奨學資金として積立するもの、多數人物を輩出せしむ)等は皆君の發起或ひは奔走に成るものと云ふ。趣味園藝、嗜好焼酒五勺乃至一合、令閨ツル子さんの間子女なきを以て元村長鶴田義嶺氏次男元生君を養嗣子に迎へ令孫六人を有すと。

元村會議員 村山 元 賢 君

大島郡東天城村母間

人を評してあの人は社交的であると云ふのは往々にして其人の輕薄才子であり、内容充實でない事を示す言葉になる。けれども斯の如きは此言葉が現はす意味のよくない一面のみを現はす場合である。人間は元來社交的動物であると昔から言ひ來つてゐる西洋の言葉は間違つて居らぬ。隣人に親しむ心を推して四海兄弟のうらはしい情懷をも養ひ得る所をこに人間性の尊くも美はしい發現がある。自治とは此社交性をどこ迄も率直に寛容に親愛の胸を打ち開いたものでなくてはならぬ。此典型的具現者を求めて村山君がある。君は明治二年五月十五日爲議美氏小學校に修業し三重縣人石井先生の薫陶を受け長じて育英家を志して母間校に勤むる事二年、次で明治二十二年本村役場教育主任となり勤続十ヶ年、全三十三年退職して村會議員に推擧され四期選を累ね、其間、學校、郵便局設置問題並に役場移轉問題等に際り幹旋奔走の功大なるものあり、大正十三年の交、池端運送店母間出張所主任となりて現在に至る。家庭又幸福にして令閨タニ子さん、豊饒たり、其間男三を成して長男宗義君、部落母間内にて煙草商を經營し、次男元茂君、父業の運送店を輔け、三下男元宏君、鹿兒島農林學校を卒業し目下大阪營業局に奉職中である。令孫四人、君の眞樂事殆んど之れが愛撫のみと云ふ。

教育功勞者 伊集院 富 芳 君

大島郡伊仙村



本郡教育界の長老であり、伊仙村の先輩として後進崇拝の的となつてゐる君は、明治十四年一月十日先考富老氏の長男に面繩に生る。英明の資を以て獨學の功を積み、小學校准教員の資格を獲得して教育界に投じ、全三十四年四月更に進んで本縣師範學校に入學、卒業期を眼前に控へた三十八年二月、突如軀重輸卒に召集せられて日露戰役に従軍、戰功に依りて勳八等に叙せられた。凱旋後の明治四十四年六月無試験檢定を以て小學校本科正教員の資格を獲得、伊仙校訓導拜命、在職一ヶ年の後、神之嶺小學校長に拔擢せられ、次で、大田布校長八ヶ年、諸鈍校長三ヶ年、面繩校長四ヶ年、早町校長二ヶ年等を歴任、昭和五年三月伊仙校長に榮轉、全七年四月高等官を以て待遇せられ、全八年二月從七位に陞叙せられた。君人と爲り天真爛漫、一點不純の性情をも交へざる童心の持ち主で、教育者として詠らへ向きの人格者で、一度び接すれば十年舊知の感あり、隨所に名校長を謳はれて功績見るべきもの少くなかつたが、昭和十一年五月惜しまれて教育界を引退すると共に面繩産業組合長に推され、爾來教鞭に代ふるに算盤を以てし、郷土發展の爲めに拮据經營を續けて今日に至つてゐる。家庭は令室との間に一男四女あり、長男正治君は鹿兒島縣立第二中學五學生在學中。

小學校長 福 島 操 君

大島郡伊仙村伊仙



伊仙尋常高等小學校沿革ニ廢藩置縣後、郷校なる變則學校の名の下に經營し來りしが明治九年組織を革め、全十五年更に小學校と改稱、全二十年二月簡易科小學校と改稱し、全三十年六月十六日小學校として開校をなす。全三十一年二月九日、天皇皇后兩陛下御眞影御下賜、全年三月、第一回卒業生二十六名、内女生一名を出す。全年四月高等小學校課程の補習科設置、全三十四年五月高等科併置、全三十四年四月伊仙尋常高等小學校と改稱成りて今日に至る。其間、校長更迭十一回、初代關直氏、明治三十二年四月赴任し來り、次で惠宇太郎、森川五郎、阿部岩男、長澤直吉、朝角哉、東仲一、壽江島清山、伊集院富芳、朝野寶嘉諸氏等歴任し、昭和十一年三月三十一日附現校長福島操君現職に補せらる。現在兒童數男三四七、女二九三、計六四〇名、職員十八名、男十四、女四、學級數尋常科十二、高等科三、君は故稻世通氏次男として明治二十七年二月十日鎮西村與路に生る。大正三年三月本縣師範一部卒業、直ちに出水郡中出水尋常小學校に補せられ在職二年、次で本郡古仁屋校に轉じ在職六年、全十四年阿木名校長に榮進し五年、名瀬尋常高訓導四年昭和六年鎮西村諸鈍校長となり三年、江良部下平川校長二年等を歴任、其間、全十年十月委任待遊となる。趣味盆栽、讀書、一男三女、長女一枝さん、布美高女卒。

村會議員 山元 美代 時 君

大島郡東天城村母間

千の言葉も一の行爲と同じ深さの感銘を残し得るものではない。須らく人間は實行すべきで實行力の旺盛なる者は必ず勝者の喜悅を味ふ事が出来る。君は少壯より勤勉奮闘、實行第一主義を以て家業に精勵よく守成の功を擧げ今や餘力を公共に盡し信望厚きを擔ふに至つた。明治十五年十月十一日故紀美代元氏三男に生れ、母間尋常小學校を卒業し、後、自身の舟を持つて大島各島を周漕し荷物運送業を開業し三十年間其業を営み、其間、大正十三年、東京に出で内務省の舟を以て石炭其他の雜品を輸送に従事する事六年に及び、歸郷後、農事に従ひ一方、公共人材として推され、區長二期間、國勢調査員等を歴任し、現在、昭和七年六月以來の村會議員並に六ヶ年來の産業組合監事を兼職し、道路、納税方面に盡し、農業倉庫設置運動にも成功し目下工事中であると。大正五、六年の交と全八、九年の交の二回、人命救助(遭難者)の廉に依り知事より表彰の事二回あり、家庭、男三女三、長男文郎君、大阪寶運汽船會社船員、次男武夫君、自宅にて精米業、三男英三君、大德電氣會社機械係勤務、長女ツル子さん、鹿兒島市青年教員養成所入所中、二女ヨシ子さん、旅館經營中、三女イナエさん、東京ミシン學校を卒業すと。

青年學校長 朝野實嘉君

大島郡伊仙村伊仙

伊仙村立青年學校沿革 大正七年四月二十五日伊仙實業補習學校設立、昭和三年五月二十六日伊仙中等公民學校と改稱し面繩、大田布に分教場設置、全十年四月一日青年學校令公布により公民學校と稱する青年學校となる。全十年度伊仙小學校長伊集院富芳氏兼任、全十一年四月一日面繩、大田布分教場廢止、校長伊仙小學校長福島操氏兼任、全十二年四月一日專任教長を配置し現校長朝野實嘉君初代校長となる。現在児童數男二五一、女八九名、計三四〇名、職員男六女一專任、兼任職員指導員二名、助教諭四名、君は現所日高實輝氏長男として明治二十二年十二月二十五日生、全二十五年朝野實美豐氏の嗣となる。伊仙小學校を卒業し、大正元年十二月六日尋常小學校本科正教員免狀取得、全十二年伊仙小學校訓導を拜命して全七年に至り、全八年一月二十九日小學校本科正教員免狀取得、全七年より九年に至る間大田布小學校に奉職、全十二年三月古仁屋小學校訓導に轉じて全十四年に至り、其年大和村里尋常今高等小學校長に榮進し、昭和五年三月大田布小學校長に轉任、全七年三月阿木名小學校長、全八年三月面繩小學校長を歴任して全十二年三月に至り昭和十二年伊仙村立青年學校初代校長となりて今日に至る令聞の間男一女一を有す。

小學校長 正八位 鹽原利寬君

大島郡伊仙村面繩



面繩尋常高等小學校沿革 明治二十九年九月一日創立、全三十四年四月一日嘉念分教場開校、大正五年十月村立伊仙實業補習學校分教場を當校に設置、全十一年五月高等科併置、昭和三年四月村立中等公民學校面繩分教場設置、歴代校長氏名、藤岡彦五郎、關直、惠宇太郎、旭福慶、森山五郎、堀孟子、朝角成、山本喜多郎、東仲一、伊集院富芳、永愛亮、中島吉應、朝野實嘉諸氏相次ぎ現鹽原利寬君、昭和十二年三月第十四代當校長に補せられて現在に至る。現在児童數男四九九、女四四八、計九四七名、職員男一六名、女六名、嘉念分教場男六二、女五七計一一九名、職員男二名女一名、君は利禎氏男、明治十九年九月七日名瀨町金久生明治四十二年熊本市師範一部卒、熊本市坪井校訓導となり、其間全師範二部に學び大正二年卒業更に坪井校に勤続し、全年坪井商業補習學校訓導を兼ね、全五年全市山崎校に轉じ、其九月本郡西中勝尋常小學校長に進み、全七年名瀨校訓導、全八年秋名校長、全九年六月秋名實業補習學校長、全十二年熊本市坪井商業補習校助教諭心得、全十四年名瀨校訓導、全十五年全町立青年指導員、昭和三年田檢尋常校長兼全青訓所主事、全六年全青訓指導員、其年九月全實補校助教諭、全七年全青訓指導員、全九年十月浦上尋常校長、全十年八月全青年學校長等歴任、次で全十三年三月叙高等官八等、其八月叙正八位、全十三年三月昇叙高等官七等、二男二女、男龍雄君、久典君女和子さん奄美高女卒在自宅、二女ミネ子さん全校二年在學中。

村會議員 正八位 德正智君

大島郡伊仙村嘉念

予が感謝せざるべからざる一の趣味あり此趣味は各異の境遇の下に常に予に利益を興へ予が畢生の間予の幸福快樂の源となり而して予が失敗を累ね凌辱を蒙むる時と雖も猶不幸を防ぐの楯甲と爲るべし是れ果して如何なる趣味か讀書の趣味はれなり人苟くも此趣味を有し之を満足する方法を知りたむには幸福を受くる事を誤らざるべき也とは西哲の至言、居常最も讀書を好みて裨益する所多きを有する典型的人物に我德正智君がある。正しき知識、正智とは、いみじくも命名したるもの哉、明治十一年八月十五日現所、篤庸氏嫡男に生る。嘉念簡易科小學校を卒へ面繩私塾を経て益進塾に入り漢、數、地理、歴史等を學びて十八歳の交に至り、次で鹿兒島市博約義塾に入り在塾半歲、後龍院良望先生に師事して學大いに進む。明治三十一年徴せられて鹿兒島聯隊に入隊し三十三年除隊、三十七年五月日露戰役に召集され聯隊長從卒となりて昌圖まで從ひ三十九年三月三十一日凱旋、功に依り叙勳八等授白色桐葉章、全年四月本村書記となり爾來庶務、學務、戶籍、兵事各課を歴任し大正十一年四月退職、翌五月嘉念區長、全十二年子弟教育の爲出鹿、全十四年大阪市役所に奉職し在阪二年、昭和三年歸郷、全五年家屋調査員、全八年區長再選、全十一年村會議員全十二年方面委員等々となりて今日に至る。其間防風林造成、貯水シク設置、米作、砂糖作改良、等の事蹟枚舉に遑なし。

鹿兒島市

元代漢士 武滿義雄君

鹿兒島市上瀬尾町九六

君は文久三年二月六日を以て故本原助左衛門氏の二男として川内町隈之域に生れ、長じて武滿眞氏の後を繼げり。全家は即ち彼の弘安役に大功を擲て隈之域、宮里、高城、宮内を領有して威を近隣に振ひし豪族なり。君天資俊敏、機略縱横、五尺の短身雖も是れ膽風に出でて隈城下なる今藤、田島、東條等の諸先生に從ひて漢籍を學修し、後ち東遊して當時學名天下に振ひし岡千仞の門に學び、傍ら新興英學の學習に志せり。轉じて中央大學の前身たる法學院に學び、花井卓三博士等と机を並べ法律の研鑽に没頭して歸り、隈之域四小學校初代校長を拜命して育英に努むる中、明治二十二年二十五才にして初めて縣會議員に推さる。之れ君が政界に入るの初めにして爾今五十餘年の生涯を擧げて政治に終始するの端緒なりき。縣會議員當選三期中、中學校建設、國縣道開通、港灣修築、河川改修等功績少からず、就中當時民主に黨を樹て、争闘止まず本縣最も甚しき愛ひ身を挺して兩黨の合同を破し奔走是れ力め、明治三十年調停遂に成り、是より舉縣一黨の海を濟して今日に至れるもの、蓋し功績中の白眉と謂ふ可し。全三十五年四十歳の時衆議院議員に舉げられ、爾來膺選九回、十六年間國政の樞機に參し、其間本縣西海岸線鐵道敷設の必要を力説し建設委員に推されて之が實現に努めし外、縣下の爲に寄與せし事蹟は枚舉の遺なしと言ふて止まん。日露戰役後勳四等に叙せられ旭日重光章を賜ひ、更に日獨戰爭後勳四等に叙せられて瑞寶章を賜へり。次で大正五年感ずる所ありて政界の第一線より引退し、是より政友會支部幹事長兼鹿兒島新聞相談役として只管黨員の團結指導に任ぜしが昭和十一年辭して悠々の生活に入れり。時經に所謂經國の士空しく草野の間に老ふる者か。配山崎氏は鹿兒島市平之町山崎五十層氏の姉なり。五男二女を生まて先に逝く。長男道雄君は今北米合衆國に住し自勤布販賣業を營めり。

縣會議長 坂口壯介君

鹿兒島市



君は隅州小根占村の産、明治三年九月五日を以て先考七郎氏の二男に生る。夙に東都に遊學して慶應義塾に學び、明治廿五年同大學を卒業し、直に富士製糸株式會社社員に採用せられ、新智識を以て同社の事務を執る事多年に及べり。後年職を辭して故山に入るや大正九年郷黨の推挽によりて縣會議員に當選し以來選を重なる事五期の今日に及び、此の間昭和六年六月奥關一の後を承けて副議長に選任せられ、議長若切太郎吉氏を扶けて縣會統率の重責に任じ、翌七年九月岩切議長急逝するに及び直に議長に擧げられ、同十年十月再選重任して今日に至れり。獨り此に止まらず小根占村長として鄉村自治の進展を策し、産業組合長に就任して村經濟の更新向上を圖り、現在尙ほ其地位に在りて努力せる他、鹿兒島縣町村長會々長兼農行銀行取締役等を歴任して自治並に財界に寄與せし所尠からず、昭和十二年更に鹿兒島縣畜産組合聯合會々長の要職に推され、爾來職として斯業の發達に貢獻し居れり。君賦性温厚にして周密、頗る數理に精しく多年縣下政治家中の財政通を以て令名あり、近時人格益々圓熟し縣民上下の信望厚し。帝國現下の時局に於て君の如き練達堪能の人物本縣々會議長の要職に座するもの洵に適材を適所に得たるの感なくんばならず。君の夫人は熊本縣醫師野村元俊氏の女、一男二女を生む。嗣子不二男君は東大法科出身の秀才、長女幸子氏は女子高等師範學校を卒業して滿鐵社員宇佐美完爾氏に嫁し、二女福子氏は醫學士飯田清二氏に嫁せり。

造士正四位 陸軍中將 久木村十郎次君

鹿兒島市武町一七九〇



以て嘯喙郡恒吉に生る。鹿兒島一中を経て陸軍士官學校に學び、第一期生として同校卒業、明治三十三年初めて歩兵少尉に任官せし以來定期進級を續けて昭和五年早くも官中將に進み、位正四位に陞り勳二等に叙せられ、同年豫備役に編入せられて歸る。此の間經る所東京衛戍總督參謀、陸軍省軍務局課員、十七師團參謀、第四師團參謀、陸軍兵器本廠付、シベリヤ出兵政史編纂委員、第十五師團參謀長、第九旅團長、第五師團教練、查閱官等々なりき。明治三十七年四月日露戰役に從軍し金州南山の役より奉天の大會戰に至る迄勇躍常に前線にあり、皇軍の士氣爲めに振ふるの概ありき。功四級金瑞勳章を賞賜せらる。歸來鹿兒島市に住し昭和十一年推されて會士會長に就任せし外愛國婦人會顧問、國防協會顧問として尙公事に盡瘁を絶たず。將軍は智勇兼備り多分に古武士の風格を存する半面書畫並び能くし漢詩に長じ都山流尺山を吹奏し所謂一介の域に至れる等又能く風流韻事を解し、所謂一介の武將たるを示せり。君の夫人は元保十四年生。青年の頃養父故治休翁は元保十四年十月生。青年の頃藩主久光公に寫從し江戸を發して京師に上る途すがら生妻に英人を斬りて薩英戰爭の端を發せり。爾來成辰の役、會津戰爭、日清、日露の兩役等皇軍の擲身の所翁の從はざるなく、腰間常に谷山住波の平安國の長刀を帯び、一閃必ず敵を斃せり。官を辭して以來単人町眞幸の閑居に悠々の餘生を養ひしが昭和十二年九十六歳の天壽を終れり。

鹿兒島電氣株式會社

鹿兒島市六日町三二

今でこそ如何なる山間地と雖も電燈を見ないのが不思議であるのが當然となつてゐるが、日清戦争直後の明治二十九年、早くも立つて電燈會社を設立し、ランプの世界を電燈の世界に移した福答院氏の學は、正に時勢の尖端を行き、時世を劃した壯舉と斷じて不可はあらざる。左に鹿兒島電氣株式會社の創立により現在に及ぶ経緯の概要を述べよう。

明治廿九年一月福答院重義其他數氏發起人となりて資本金拾萬圓の電氣會社を創立し、全年六月其筋より設立の認可あり、福答院氏を社長に、岩元信兵衛氏を取締役に河野庄太郎氏を監査役として陣容を張り、全年九月事業の一着手として諏訪の瀧水力發電所を起工し、卅一年二月工事落成して八月より點燈を開始した。當時配電を壓三千五百ヴォルトを採用した事は特に一大英斷と稱すべく、營業開始後間もなく需要續出して同年末には早くも供給不足を告ぐるに至つた。依つて卅二年一月五萬圓の増資を行つて瀧の神、小頭、小山田、妙見、鹽浸、小鹿野等々の各發電所相次で建設せられ、増資又數回に亘りて行はれ、水力の外原良に火力發電所を設立し、遂に資本金壹千萬圓を擁する大會社となるに至つた。昭和二年熊本電氣會社の劃込を見、其の傍系會社となるに及び、熊電より糸山常務取締役の入社を見、糸山氏引退後、昭和十年七月一日の臨時總會に於て古澤氏其の後任取締役に選ばれ、堅實なる歩調を續けて今日に至つてゐる。

鹿兒島銀行頭取 御牧秀一君

鹿兒島市下荒田町



株式會社南薩銀行を併合、資本金五百六十二萬五千圓、内拂込資本金貳百六拾二萬五千圓、預金總額五百四拾壹萬六千餘圓、貸出金總額六百七十七萬餘圓を算し、地方金融界に貢献する所多大なるものありき。昭和八年上期に入るや農村多年の疲弊漸く恢復し一般經濟界も亦更生の域に達し漸次遊資過剩の傾向あり、茲に於て經營の合理化を圖る爲め同年五月資本金四百五拾萬圓に拂込金を貳百貳拾五萬圓に夫々減少し、全十一年五月同前の理由に基き資本金參百萬圓拂込金百五拾萬圓に減じ以て過剩資本の整理を斷行し、基礎を鞏固にせり。其間昭和十一年七月鏡原頭取辭して前田兼實氏に代り、鏡原君の善善と行是の確立に努めつゝありしが昭和十二年五月不幸病みて薨れ、専務取締役に御牧秀一氏の頭取資格を見て今日に至れり。

株式 十五銀行鹿兒島支店

支店長 猪鹿倉文夫君

鹿兒島市金生町一五



明治維新の道を開けり。次で日清戦争後國力順に増進し國內の産業勃興するの氣運に遭ひ、金融事業も亦是れ等新機運と平行連繫すべき必然性に驅られ、明治三十一年第五銀行連繫するに際し、銀行と合併し、浪速銀行なる名の下に新陣容を盛るに至り、關西財界の巨頭外山修造頭取に就任す。舊第五銀行より野元龍入りて取締役に列す。技に於て第五銀行浪速銀行鹿兒島支店と改まり、支店長を置き、行務を執り、大正九年沖繩三縣金邊界に賣せし業續に至りては天下周知の事實に屬し、此所に再説するの要なきからん。猪鹿倉君は明治二十四年を以て川邊郡加世田に生る。川邊中學、第五高等學校を経て東京帝國大學政治科に學び、卒業と同時に大阪なる浪速銀行支店長に擢んで神戶、昭和十一年四月當支店長に榮轉して今日に至れり。君賦生篤實周到而も時勢を透見するの明敏を兼ね有す。本年度より煙草肥料資金壹百萬圓の放資を開始せしが如き洵に時宜に叶へる英斷と言はん。一時本行の經營に重壓たりし別口預金數千萬圓の拂戻しも本年六月を以て完了し、文字通り捲土重來の繁榮振りを示し居れり。

株式 鹿兒島貯蓄銀行

常務 山本平吉君

鹿兒島市六日町

明治三十年岩元信兵衛、島津忠欽、緒方壯吉有馬純俊、海江田金次郎、酒井清四郎等を取締役に慶田政太郎、河野廣太郎兩氏を監査役として設立せられし鹿兒島貯蓄銀行は、大正十年十月營業目的を普通銀行業務に變更して鹿兒島商弘銀行と改稱し、全年十一月更に鹿兒島貯蓄銀行を新設するに至つた。これ即ち本行沿革の大意にして、資本金五拾萬圓、海江田金次郎氏を頭取に、常務取締役に山本平吉、藤武喜助、原田耕夫、寺前景介、監査役に山下喜兵衛、島津忠夫の諸氏を揃へ、創立當初より頗る順調の歩みを續け、基礎の堅實と内容の充實を以て廣く世の信用を博し、預金日に増加して今日の繁榮振を誇示するに至つた。

筆頭常務として親しく行務の遂行に當りつつある山本君は鹿城銀行界に於て定評ある人格者で、世の所謂實業家とは凡そ縁遠い存在であり貯蓄銀行を背負つて立つ人として恐らく無二の適任者であらう。君の人格の高潔と至れり盡せりの親切ぶりは、獨り業界に於てのみならず君の住む高麗町々民崇敬の標的となり、汎ねく尊信を集めてゐる事實を見て、今更ら乍ら「人格」の偉大なる働に驚かされる。次男祐二君は海軍少佐に進み現に追風艦長の榮職に在る。

一六五〇

株式 第四十七銀行頭取 湯地定敏君

鹿兒島市金生町五十四番

縣下最古の歴史を有する本行は明治十二年八月三十日國立銀行條令に基き第四十七銀行として市内六日町に營業を開始したるに始まる。初代頭取に福山健偉氏就任して専ら經營の獨に當り、後ち大阪、宮崎、沖繩の各支店を開設して今日あるの礎石を置いた。當時國內は明治維新の大業略其緒に就き民業漸く勃興の機運に向ひ、金融界も亦活潑なるうごきを示し特に日清日露兩戰役後に於ける我國産業界の進展は眞に目覺しきものあり、従つて本行の業績も之れに伴れて發展の一途を辿り、明治三十三年資本金を百萬圓に、四十年には倍額の二百萬圓に、大正六年、五百萬圓に更に、九年一千五百萬圓に増加して縣下の需要に備へた。是より先、明治三十六年營業所を現在の地に移し、逐次各地に支店出張所を増設し、斯くして縣内は勿論、宮崎、沖繩三縣財界に寄與せし本行の功績は誠に偉なるものがある。

昭和三年以降財界の恐慌期に入るや、第一着に鹿兒島商業銀行と合併し、全五年薩摩銀行、全七年海江田銀行を買収し、尙全年西摩薩摩銀行の解散を援けて全地に支店を設置し全十一年鹿兒島商弘銀行を買収する等縣下財界の整理を行ひて危弱性の除去に努め、水も洩さぬ營業陣を布くと共に、昨十二年日本銀行鹿兒島派出所の廢止後國庫事務の一切を繼承し南九州金融界の王座に昇つた。創立以來年を関する事六十年、此間、初代頭取福山氏より上村行徳、樂川清、島津忠欽、有馬純俊、飛岡一郎氏等六代を経て現頭取湯地定敏氏に至つた。君は明治三十五年三月本行入社以來生え抜きの銀行家で大正八年一月支店長に擢せられ全九年五月一躍取締役に推され、全十五年六月飛岡氏に代つて頭取に就任し爾來精勵奮闘營業界稀に見る人格と周到健實なる手腕を以て經營に遠算なからしめて今日の繁榮を招來した外、大正六年以來三期に亘り市會議員に當選し市政の爲に盡瘁する所があり、現在尙は幾多の公職を帯びて公共に盡しつゝ、ある事は著く人の知る所である。

日本勸業銀行鹿兒島支店

鹿兒島市東千石町八十四

本行の前身たる鹿兒島農工銀行の創立は明治三十一年一月廿日あり、是より先三十年八月本縣知事加納子爵は縣下各郡市に亘り十六名備後し、之に縣官一名を加へて縣農工銀行設立委員を任定し、事務所を縣廳構内に置き、同年十月一日定款の認可を得、全七日株式の募集を公表し、三十一年一月二十六日創業總會を開設し取締役五名、監査役三名を選任し、取締役は更に折田兼至を頭取に、平田二郎を常務取締役に互選して陣容を整へ、同年三月三十一日設立免許を大藏大臣に稟請し同年三月七日之を交付せられぬ。依て取締役は同年五月營業所を市内山下町百十七番戸に卜して縣廳構内假事務所より移轉し同月二十日營業を開始せしが營業所は執務上不便なりしを以て興業館内縣有地使用の許可を得て營業家を新築し、明治三十九年六月二十四日同所に移り、爾來十有五年同所に於て營業せしが業務の發展と周囲の事情は營業所新築移轉の止むなきに至り、地を東千石町八十四番地の一に相し大正八年七月工を起し、全九年十月落成移轉せり。現在の本行即ち之なり。次で大正十年三月加治木、鹿屋の兩出張所を、全十一年二月川内出張所を設置し、後者は大正十二年、前二者は全十五年孰れも支店に昇格せり。此の間頭取として營業を總攬せし者は、初代折田兼至、二代本李之介、三代阿蘇谷侃、四代大津大助の四氏にして、創立以來頗る順調の發展を遂げ克く其の使命を達成しつゝありしが、昭和十二年二月政府の方針に順應する爲め日本勸業銀行と合併し、同行鹿兒島支店と改稱し初代支店長田邊虎三氏の來任を見て今日に及べり。合併當時の農工銀行頭取は大津大助氏にして其の内容は資本金四百五十萬圓、(拂込済)預金總額一千百萬圓、貸付金額二千四百萬圓を算し、各種積立金の如き殆んど資本金額に達するの好成績なりしを見て、創立以來三十九年間農工銀行が本縣金融界に寄與せし程度を推すに足らん、

一六五一

株式 安田銀行鹿兒島支店

支店長 清瀧政人君

鹿兒島市金生町一〇二番地

本行の前身は肥後銀行鹿兒島支店にして大正六年十一月一日の開業にかゝり、當時營業所を市内金生町百番地に設置して一般銀行業務に従事せしは今尙市民の記憶に新なる所である。次で大正十二年十一月一日前記肥後銀行が安田銀行と合併するに及び、今日從來の名稱を廢して安田銀行鹿兒島支店と改稱するに至つた。而して當時に於ける安田銀行頭取は安田善三郎氏であつた。全十四年十月十六日業續の進運に隨伴する爲め營業所を現地に新築移轉して今日に至つてゐる。同行現頭取は安田一氏である。本支店が開設以來現在に至る迄、獨り鹿兒島市と云はず廣く本縣下の金融界に貢献せし功績に至りては已に天下周知の事に屬するを以て茲に再説するの煩を避けるであらう。本支店開設以來の支店長と及び其の就任年月日を擧げんに、初代田代郡太(大正六年十一月一日)二代山田秀(全十二年三月一日)、三代村上作良(全十三年四月一日)四代中原哲夫(全十四年十一月二日)、五代有田昌(昭和五年三月十八日)、六代三原庸一(全十一年一月廿一日)、七代清瀧政人(全十三年六月一日)の七氏にして現清瀧支店長は熊本縣玉名郡山北村の産、同行山口縣柳井支店長より本支店長に榮轉して今日に至つてゐる。

鹿兒島商工會議所

鹿兒島市築町五番戶

原ねるに鹿兒島商工會議所の起源は、彼の明治十五年三月山田海三氏外十五名の發起によりて創立を見たる鹿兒島商法會議所あり、次で全廿二年十二月其組織を變更して鹿兒島商工會議所と改稱し、全廿六年五月議に發布せられたる商業會議所條令に則りて鹿兒島商業會議所を設置し、更に昭和四年會議所法の改正に依り鹿兒島商工會議所と改稱し、内容を改めて今日に至れり。此の間、初代頭取宮里正勝氏より、柴川權輔有馬純後、飛岡一郎、沖雄熊の五會頭を経て現會頭久米田新太郎氏に及び、池田徳藏、山口吉左衛門の兩氏副會頭として會頭を補佐し、堀勇吉氏理事の任に在りて内外の事務を所理し居れり。創立以來今日に至る迄本會議所が本市の商工業界に寄與せし功績に至りては善く人の知る所なり。理事堀君は日置郡伊作の産、明治十三年九月十八日先考岩次郎氏の長男に生る。鹿兒島一中を経て早稻田大學法政經濟科に學び、廿九年同校卒業後新智識を以て鹿兒島新聞記者に奉職、政治經濟を擔當し着眼の犀利と行文の明快を以て紙面に光彩を添ふるの感ありしが、大正七年辭して米國に遊學し、會々華府に開かれたる第一回労働會議に出席して歸郷、全九年鹿兒島商業會議所書記長に就任し、飛岡、久米田兩會頭に歴仕して今日に及び。此の間昭和六年鹿兒島市に於て經費二十萬圓を投じ會議所主催の國產振興博覽會を開催し自ら事務總長となりて萬機を所理し、克く當所の目的を達成せしのみならず、此種博覽會の先例を破り、經濟的にも大成功を収めて閉會するを得たり。會議所構内なる記念館は同博覽會開催記念として建設せしものなりと云ふ。家に二男あり長男勇雄君は東大文科を出でて滿洲國協和會に奉職し、次男正雄君は鹿兒島高農を卒業して現に南洋興發會社に勤務せり。

實業家 山野田一成君

鹿兒島市平之町



現に經營しつつある搾乳製菓業を見て、直に君を實業家と斷ず可くは當らず、と云つては然らざる政治家で、元よりなし、然も兩者の何れを以て呼ぶも敢て可笑しくない存在である。是れ蓋し君の過去の經歷と而して其の交友の聯想から青年の踏脚ではあるまいか。明治十八年二十歳の青年の身で本縣津任を拜命し、居る事二年にして收税局に轉じたが、會々廿五年の衆議員補選に際し、君は官吏の身を以て却て民黨の爲に奔走に任じ、爲めに虚言専心となつた如き君の面目如たるものがある。爾來専心力を民黨に注ぎ常に知友同志の帷幄に參じて謀たりしも、然も自ら船鳴して願はず、此の間、明治二十年頃同志を糾合して鹿兒島縣青年會なる政治結社を組織して民黨に氣勢を添へ、日清戰爭當時義勇團を組織し、正に清國に渡り國民軍として軍部を扶け以て積年鬱鬱の氣を吐かんとしたが、折から停戦となり遂に案事を果さずして解散した。後ち鹿兒島新聞記者として操縦の事に従ふ事數年日露開戦前、單身滿洲各地を放浪し、歸途朝鮮南浦及遼洲に日露學校を創設、明治四十年歸郷して再び新聞社に復し、政友會支部理事に推され次で鹿兒島新聞社監査役に擧げられ、市會議員として市政を講ずる事に及んだ。是より先鹿兒島電氣軌道會社を創立し二期に及んだ。是より先新聞記者當時早く第一信用組合の前身なる鹿兒島購買利用組合を組織し、次で本縣物産たる大島油業の救済を目的とする信用組合(昭和三十二年)を組織して自ら役員となる等、本縣信用組合事業の陳奥となつた。現に平之町安全組合長、衛生組合長、鹿兒島牛乳組合理事に任じ、公職を帯び、七十三才の老翁を擡げて努力盡瘁に任じて居る。昭和十二年君の率ゆる牛乳組合は市内高麗橋々畔にミルクファントを創設し、其の十月より事業を開始する等、全國的模範組合の盛名を馳するに至りしものなり。君の指導の功に歸すべきであらう。刀劍書畫を友とし讀書に閑を消しつつある。彼の南洋幕下の後豪一甫氏が君の傍父なる事はあまりにも有名な事實で茲に再説するまでもあるまい。

鹿兒島無盡株式會社

鹿兒島市六日町



由來銀行は資本ある人々にとつての存在であり、無資本者とは風馬牛相聞せざる存在でしかない。此所に無盡株式會社の餘地が生れる事になる。今を去る約三十年前に此の道理を看取し、世相の趨ふべき道程を透見し敢然立ちて斯業を創設した高木君の明と、斷には、何人も先づ頭を下げなければならぬ。即ち大正二年九月君の郷里西國分村に同仁貯金會社を創立したのが抑も當社の發祥で、大正四年九月開州産業無盡合資會社と改め、營業所を現在の隼人町本店所在地に移し、同八年八月大藏大臣の營業免許を受け、こゝに鹿兒島無盡合資會社と改稱した。創業當時よりこゝに至る迄は苦心慘愴、しみる、所謂創業者の苦楚を嘗めたが、無盡の効果漸次世に知られ、會社の信用確實なるを加ふると共に、業績日に擧り月に加はり、恰も流に掉して下るの勢を示し、大正十五年六月鹿兒島支店を、昭和六年十一月川内支店を、翌七年十月鹿屋支店を、更に同八年六月加世田支店を設置するの氣運に立至り、三十有餘の出張所及會場を持つ事となつた。昭和十一年七月合資會社を改めて資本金五十萬圓の株式會社に變更し、高木君は其社長に就任して依然經營の衝に當つてゐる。昭和十三年六月末契約高六千餘萬圓、加入人員六萬五千五百十五名を算し、内容の堅實なる全國第一の稱がある。本年度よりは庶民無盡、甲種國債無盡を創設し以て國民の要望に應じ、國策に順應する事となつた。(寫眞高木社長)

第一産業無盡株式會社

鹿兒島市武町

地方産業の振興に就ては、學者、政治家は言ふに及ばず、中央地方に於て所謂經世家を以て自任せる人々により、あらゆる機會にあらゆる方策が叫ばれ、論議され盡した。然し乍ら其の論議の如く産業の勃興せざる原因が、其の第一線に立つ地方、農工、商民に資本の缺乏せる事を見て、決然之れが救済に乗り出し、昭和四年四月本無盡株式會社を創立したのが初代社長本田休之助氏初め本社重役の面々である。滿腔の抱負と經綸を持ち合せながら、資金なき爲めに空しく座食する人々、一旦自己の計畫に手を染め乍ら中途資金の不足に依りて事業を中斷するの餘義なきに立至りし人々が、本無盡株式會社の出現を、恰も乾田が慈雨に打たるゝ感謝をさえて迎へた事は想像するに難くない。論より證據は、創業後僅に十年に過ぎざる今日已に契約高七萬圓に達してゐる。昭和八年十月堀ノ内彌吉氏常務取締役が就任し、同十二年十月現常務末野重藏氏之れに代つた。本社は資本金拾萬圓、鹿兒島市、鹿兒島郡指宿郡、川邊郡、日置郡、薩摩郡、出水郡の一市六郡を營業區域とし、出張所及營業所十三を有し、百二十餘名の社員を驅使して業務に當り日に月に隆昌の一途を辿りつつある。村田利之林仲藏、川畑參三、片之坂重二の四氏取締役にして、新名眞藏、石原信哉の二君監査役に就任して末野氏を補佐し、渾然一体となりて事業の進展に努めつつある。末野君は贈那郡市成の産、縣立二中を経て東大農科農學部を修了後北海道拓殖銀行に奉職し多年金融理財に經驗を積みし適材である。

故 玉川壯次郎君

鹿兒島市住吉町



全國津々浦々の大人から小供まで、ボンタン飴の珍奇優秀を知らぬ者はないが、それと同時に此の珍菓の發明創造者が故玉川君なる事實を知る者は極めて少ないであらう。此のボンタン飴の發明こそは玉川君成功の素因であり、鹿兒島製菓會社の繁榮する所以である。君は元松浦屋と號する菓子問屋を經營してゐたが、平素の研究心が報いられてボンタン飴の製造に成功し、後ち更に新菓兵六餅を考案して之を賣出し、何れも人氣に投じて異常なる賣れ行きを示すに至つた。機を見る事の敏なる君は大正八年九月好景氣の最中に資本金五拾萬圓を以て鹿兒島製菓株式會社を組織し、松浦屋の商賣を擧げて會社に移し、大正十五年よりボンタン飴製造の専業と爲したが、昭和五年以降新に兵六餅を賣出し、現在月額百萬圓に達し、日本内地は元より滿鮮北支に販路を有し、更に貿易商の手を経て遠く海外にまで輸出せらるゝの盛況にある。此の間君は取締役社長として會社の經營一切を切り盛りし、巧に世界大戦後に於ける財界の危期を脱して微動だもななく、商工會議所議員三期に及び、議員在職中の昭和十一年九月五十七歳を以て逝去した。生前島嶼引と大司を趣味とし、寸暇を偷でん眠る癖があつた。嗣子秀一郎君は明治三十九年三月廿四日生。縣立二中を卒業して、家庭に入り、會社事務に専念中嚴父の死に會し、爾來社長に就任して經營に没頭せり。

鹿兒島木村 和志武善左衛門君

鹿兒島市高麗町六四

獨り市内と云はず本縣下木村界の雄として、先づ第一指を折られるのは君であらう。現在社長として専ら經營しつゝある鹿兒島木村會社は君の發起によりて大正八年三月資本金五拾万圓を以て設立せられ、全時に社長に推され、取締役に小牧重之助、山口吉左衛門、松元万藏、岩田嘉藤二、監査役に池畑徳藏、野上賢三氏等の如き一流の顔ぶれを集め、縣、市を初め關西北九州、滿鮮地方、支那、沖繩の各地を販路とし那期に支店を設置して取引に便し、年額百五十萬圓の賣上を算しつゝありと聞くならば、以て取引の確實敏速なると、會社經營の合理的なるを察知するに難くあるまい。獨りここに止まらず昭和木村會社設立の當初より監査役に擧げられて全社の經營に參畫し、更に去る昭和初頭より現在に引續き鹿兒島縣木村同業組合長の要職に座し、外部的にも將又内部的にも斯業の進展を扶けつゝある外、防護團、經濟更生、物價統制各委員として國策の實現完成に國民としての赤誠を捧げてゐる。之を以て見るも君が私利私慾のみ念とする一介の商賈ならざるを知るに足るであらう。

鹿兒島魚類株式會社 專務取締役 谷川誠造君

鹿兒島市洲崎町

舊魚市場は元和元年島津日新公時代の創設に係り、爾來三百有餘年各問屋は連綿として父祖の業を繼承し來り、名實共に老舗の名に反かず殆んど全國に類例を絶するものであり、明治三十一年故波江野氏を中心として是れ等の問屋九名を以て鹿城魚類合資會社を設立したが、昭和十年十一月三日中央市場開設に當り右合資會社社員の外に個人問屋一人と、谷山魚市場問屋五名自發的に合同して鹿兒島魚類株式會社を組織し、翌四日より營業を開始して今日に至つた事は、洵に時勢の要求に叶へる美譽と稱すべきであらう。而して同社の事務職制は總務、會計、現業の三部制にして各部共に社長、專務直屬と爲して支配人、主事、係長を置き統制ある事務分擔制を執つてゐる。本社開業一ヶ年の賣上高二百二萬圓餘なりしもの二ヶ年目には二百三十一萬圓を突破し、順風満帆の好成績を示し、而も會社の利益は大部分社内積立てて基礎の充實に力め、現に三百萬圓の積立金を算するに至り、尙仲買人、鮮魚出入組合員、尙主代表たる縣水産會、縣外大口問屋に對して各々獎勵金を交付する等、經營大いに見るべきものがある。現會社重役は社長別府正一、專務取締役谷川誠造、常務取締役川野清藏、濱崎常吉、石塚得三、河野正彦、西元弘、別府孝兵衛の諸氏であり常任監査役は是枝周五郎、谷川榮吉、川野金之助の諸君がある。專務取締役谷川君は鹿兒島商業學校出身の新進で、本社の經營に苦心没頭せる傍ら、昭和十二年商工會議所議員並市會議員に當選し、頗る其前途を嚮望されてゐる。

昭和精油商株式會社 鹿兒島出張所

鹿兒島市泉町

本會社は本店を福岡市に有し、揮發油、礦油、石油、輕油、マシ油等の各種油類を初めとし自動車、三輪車、タイヤ、くろかね號發動機、茶谷式消火器等々の九州及び朝鮮、上海の一手販賣權を掌握し、鹿兒島、大分、熊本、長崎、久留米、佐賀、八幡、京城、上海の九市と日田町、福岡町、甘木町の三町に各々支店或は出張所を開設し、自動車會社と船舶業者の間に絶大の信用と確固不拔の地盤を有し、斷然九州同業者中の雄として其の繁榮振りを誇示しつゝある。

自動車業 林田熊一君

鹿兒島市東千石町六五

人事凡百の事、其の成ると成らざるとは一に時の勢に過ぎないと嘗て仕舞へばそれまでだが、然し少くも時勢の趨く所を見透らす頭の鋭さと、時に及んで乾坤を一抛するの決斷と、而して難局に當面して之を打開する丈の精力と氣力の持ち合せがなければ、いかに有利な時勢の波に乗り得たとしても、林田君今日の如き成功を掴む事は夢想だも爲し能はざる所である。今日こそ自動車二百臺、従業員三百人を擁し、本縣下自動車界の先覺者、關西以南に於ける自動車王として、宮崎、鹿兒島、大分、熊本各縣下の交通界に雄飛しつゝある君も、廿六七歳頃郷里宮之城町に自轉車業を經營する傍ら自動車業の前途に着目して一臺の自動車を買入れ、運轉手の免許を受けて宮之城、川内間の定期運轉を開始したのが抑も今日の君である始め、當時鹿兒島市の某氏自動車營業に失敗せる直後の事として其の轍を踏まざらんとして文字通り不眠不休の努力を續けた結果、大正八年五月鹿兒島市に進出して乗合自動車業並にタクシー營業を開始するに至つた。次で大正十二年三月鹿兒島縣フォード代理店を引受け、昭和六年十月林田乗合自動車株式會社を組織し、全七年日本フォード會社と解約してダツチプラザの株式會社の設立と共に取締役に推され、三百人の従業員と二百餘臺の自動車を驅使し、タクシー業を始めとして前記四縣下主要路線の定期運轉を行ひつゝある状態は正に自動車王の名に反かざる感がある。明治二十三年三月九日生。

高等新學 正五位 農學博士 鈴木眞吉君

鹿兒島市郡元町

君は明治十年正月鹿兒島城下高見馬場に生る。全三十四年七月札幌農學校卒業後、一年志願兵役に服し、全三十七年を以て臺灣總督府に職を奉ず、翌三十八年米國に留學を命ぜられ、加州スタンフォード大學に入學、三十九年ウイコンシン大學に轉じ、在米六ヶ年の間専ら農業化學の研究に没頭せり。次で全四十二年獨逸に渡り、後佛國に轉じ居る事各一ヶ年、等しく農業化學の探究に費せり。歸朝後「チーズ菌發酵作用に就きて」なる學位請求論文を提出し、大正八年農學博士の學位を獲得せり。翌九年朝鮮總督府に職を奉じ、半島の農業啓發に努力する事五ヶ年にして官を辭す。昭和十年五月請はれて鹿兒島高等拓殖學校長に任じ、土木科、機械科を新設して本校の使命を擴大強化し、最高智識と最大人格を以て育英に専念し居れり。本校創立當時の目的は單に滿蒙の新天地に活躍すべき青年の教育に在りしが、時代の要求に應じて土木科、機械科を新設し、内地並に朝鮮滿洲向事務家の養成に當り、修業年限を一ヶ年とし一日七時間の授業を行ひ、卒業就職後は其の勤務振りを調査して夫々本人に注意を與へ、卒業生と學校との連絡を密にし、通信を怠る者に對しては學校より督促して通信せしむる等、頗る懇切を極め居れり。本校は鹿兒島市の南部、錦光灣頭白砂青松の間に在り、四季の造造に適し、近く櫻島の噴煙を眺め、遙かに霧島の靈峯を望み學園として絶好の自然美に富む。敷地約五千坪、校舍約一千坪に及べり。

自動車 赤星明生君

鹿兒島市山下町

四十歳前の若さで本縣の自動車界に、一時フォードの黄金時代を出現した君も亦決して凡骨とは云へない。而も其の前身が全然實業とは縁もゆかりもない縣技手であつたと聞いては一層此の感を深くするではないか。君は團藏氏の長男、明治廿五年十二月六日を以て熊本市妙跡寺町九十番地に呱呱の聲を擧げた。夙に技手として愛媛縣に奉職中、鹿兒島縣警察部長たりし林壽夫氏の懇望に依りて鹿兒島に足を踏み入れたのが抑も今日あるの初めで、時に年廿六才であつた。爾來其の職に格闘を續くる事十有餘年、昭和四年官を辭すると共に自動車時代の勃興を見透して自動車販賣業を志し、知己、友人と相談りて資本金拾五萬圓よりなるアカホン合名商會を組織し、フォード自動車鹿兒島縣下特約販賣店となつた。爾來自動車交通の發達に伴れて商會の業績も亦目覚しきものあり、遂に本縣を驅りてフォード全盛を出現し、舊來市内御着屋通り鹿兒島商業銀行跡に置きし商會事務所を現在の地に移し、土地三百六十坪を買入れ、一萬五千圓を投じて社屋を新設し、従業員三十名を擁し繁榮を續けて今日に至つた。開業以來今日迄已に一千數百臺のフォード車を販賣したと云ふ。本縣自動車界に貢獻せし所多きは言ふ迄もない。宮崎市に姉妹會社壬申商會あり、延岡市に支店を出してゐる。縣技手時代を追懐して現状に及ぶ時、恐らく感慨無量なるものがあるであらう。

立市 鹿兒島商業學校

鹿兒島市下荒田町

創立以來年を関する事四十五年、卒業生を出す事約四千人、縣下實業界に多大の貢獻を爲し來つた鹿兒島商業學校の沿革を按ずるに、明治二十七年鹿兒島市第三區民(新町外十四ヶ町)は商業教育の必要を痛感し、十月一日を以て第三區費負擔下に名山小學校の一部を借り鹿兒島簡易商業學校を創立、全卅一年四月校則を改正し本科三年、簡易科四年の甲種程度に昇格して鹿兒島商業學校と改稱、全卅七年四月再び校則を改正し鹿兒島市立商業學校と稱し簡易科を廢して本科四年豫科二年となす。全三十九年四月一日第三區費負擔を市費經營に移す。大正八年一月三度び校則を改め同年度より本科を三年に短縮し定員を七百名とす。同年九月類焼の厄に遭ひ鹿兒島商業高等小學校を假校舎に充つ、全九年五月十二日鹿兒島商業學校と改稱、全月廿七日下荒田町の新校舎に移る。全十一年二月廿三日尋常小學校卒業程度を以て入學資格とし修業年限を五ヶ年とす。昭和三年三月廿七日定員壹千貳百五拾名に變更増加の認可を受けたり。本校教育の方針は、一、勸語、紹書の聖旨を奉戴し誠實勤勞の校訓に基き専心學業に精勵し智徳の修養に努め、臣民として國家有爲の人材たるを期す。二、忠孝の大本に則り立身報國の精神を涵養す。三、廉恥を尚む徳操を磨き公共心を養成す。四、禮儀を厚うし秩序を重んじ人倫の基礎を確立す。五、質實剛健、闊達進取の氣象を涵養す。六、心身の練磨を計り堅忍持久の精神を涵養す。の六ヶ條なり。第十代校長加藤義光氏は昭和十二年四月校長を拜命し商業學校の經營と生徒の訓育に勵精して今日に至る。

高等商業 鹿兒島市長田町一六六 水田淳亮君

地勢の見地より觀るも將又人文的情勢に察するも本市に高等商業學校の設立せらるべき事の當然なるは縣下識者を俟たずして明なるにも拘らず、未だ之れなきを遺憾とし、津曲學園總長津曲貞助氏は獨力高等商業學校設立を決意し、昭和七年一月廿八日文部省宛請願書類を縣廳に提出し、且つ二月中旬自ら文部省に出頭して折衝に力む。文部省に於ても地勢上鹿兒島高等商業學校の設置を必要と認め、教育視察の爲め來縣せる田中文部督學官は同校舎に充當すべき舊大林區署の建物を始め、學園事業たる鹿兒島女、全高等家政女學校、同中學校の充實せる設備を具に視察したる結果全三年三月二十六日開校の件認可あり。同日從四位勳四等古川邦彦に本校々長事務取扱を委嘱し、第一學年生徒募集開始、四月四日より六日に亘り入學考査を了し全九日成績を發表して二十日入學式を舉行し全二十五日授業を開始し、以て今日に至り。本校は他の官立高商と全然同一資格にして帝大入學豫備試験免除、計理士免許狀、中等教員英語科免許狀を得るの特典あり、尙本科生の外に聽講希望者の爲に選科をも併置せり。生徒數五百五十名、卒業生の就職口は滿鮮、大阪、東京、九州を主とす。現校長水田氏は山口縣三田尻の産、明治四十四年山口高等商業學校を卒業して福井縣敦賀商業學校教諭に赴任し、居る事六ヶ年の後小樽商業教諭二ヶ年を経て母校山口高等商業學校教授に轉じ、昭和十年六月古川前校長の後を襲つて本校々長に就任して現在に至り、質實剛健の校風顯揚に努め居れり。

縣立圖書室 鹿兒島市山下町一三〇 奥田啓市君



君は福岡縣の人、明治十六年二月廿三日を以ての先考延平氏の三男に今元村に生る。明治三十二年縣立豊津中學校を卒業して早稲田大學英文科に學び、業を卒業すると共に東京市立日比谷圖書館に奉職せり。居る事七年、大正四年十月縣立長崎圖書館に轉じ全八年八月任官待選を賜る。次で全十年一月縣立鹿兒島圖書館長を拜命して今日に至り、爾來十有八年間拮据經營を續けて毫も渝る所なし。君爲人天心流露、邊幅を飾らず城府を設けず事務を執りて公平、人に接して上下の別なく、克く今日の功名を馳す所にして、他府縣に比し必ずしも優位にありと言ふ可らざる本縣が、獨り圖書館に於て他の優秀者に劣らざるの優越感の爲に利用閱覽者に至りては寧ろ却て彼の優越感を凌ぐを見るもの、盡く君が熱誠盡瘁の功に歸す可らずんば、少くも十の八九に居ると言ふを得べし。然らば即ち君が本縣郷土文化の發達と社會教育の進歩向上に資せし所尠少なからざるは、祭說の要なからん。史蹟名勝天然記念物保存協會地方委員を囑託せられ又功勞多し。朝廷多年の功を嘉し從五位に叙し勳六等瑞寶章を賜ひ、昭和八年十月更に高等官三等を以て遇す。曩に文部大臣並に本縣高等官長より社會教育功勞を以て表彰せられ、昭和八年長くも宮中觀禮御宴に御召の光榮に並び、全十年陸軍特別大演習に際し再び賜物の榮譽を膺ひ、越へて十一年十一月天竺文相より表彰せらる。讀書登山を愛する所外、書畫の趣味を解し俳句は其尤も得意とする所童山は其雅號なり。家に二女あり長女アイ子嬢は女子師範を出で、市内大龍校に奉職せり。

鹿兒島中學校長 鹿兒島市上之園町五六 松村吉之助君



我が鹿兒島市に第一、第二兩中學の設立されしより以來二十餘年の年月を經過し、此の間人口激増して數倍となり諸施設是と平行して内外ともに整備せしにも拘らず獨り中學校の數は二校に止まり他に一つの私立中學すら之れあるなく、從つて入學難の増加日を追ひて甚しきを加へ、親子共に泣くの慘狀を招致せり果せるかな大正十五年市内各小學校父兄聯合會は市民の輿論に基きて公立第三中學校の新設促進の決議をなし、縣市當局に陳情するの舉に出で、津曲總長も亦此の決議に加はり同志と共に其の達成に努むると雖も、如何せん縣市當時の財政は之れが實現を許さず容易に實現の機運なからんを見て津曲總長は多年抱懐し來れる教育報國の一念より一種の義憤を感じ断然意を決して獨り私立中學の創設を企つるに至り。即ち昭和三年十一月六日文部大臣より設立認可の指令を受け、市内原長に地を相し校舍を新築し、縣立第一中學教頭松村吉之助氏を校長に聘し、昭和四年四月八日入學式を舉行し、爾來九星霜を閱して今日に至り生徒現在數一千四十名を算するの盛況を呈せり。松村校長は兵庫縣美方郡射灘村の人、明治二十二年三月東京物理學校を卒業して數學、物理、化學の中等學校教員檢定試験に合格し、直ちに兵庫縣柏原中學校教諭を拜命せし以來、熊本縣鹿本中學校、福岡縣立東筑中學校を経て同四年鹿兒島縣立第一中學教諭に轉じ、後ち教頭に進み鹿兒島縣中等教育に盡せしが昭和四年三月本校設立と同時に校長に就任し、爾來校長の確立と人物養成に邁進を續けて現在に至り。六男一女あり、長男吉之君は東大醫科を卒業して海軍少佐に奉じ、二男弘之君は京大工科を出で、大阪府技師に勤務中。

教育功勞者 鹿兒島市加治屋町 津曲貞助君



明治十二年四月廿七日を以て先考傳太郎氏の長男として始良郡國分村に生る。夙に日本大學を卒業して家業たる煙草製造販賣事業に従事し、尙專賣局煙草元賣捌人となり、明治四十五年以降昭和六年に及ぶ、大正十二年四月鹿兒島高等女學校を開設、女子の入學難を緩和し、尙昭和四年四月鹿兒島中學校を開設して、少年子弟の入學難を緩和す。昭和四年四月鹿兒島高等女學校に、鹿兒島高等家政女學校を併設し、同時に全校内に鹿兒島幼稚園を併設したる外、昭和七年四月專門學校程度の鹿兒島高等實業學校を市内長田町に開設するに至り、茲に一貫せる津曲學園の体系全く整ふ、即ち君は津曲學園總長として、之等學校を統率し、現在三千余人の生徒を收容し、既に卒業生を出すこと六千余名に上る。即ち鹿兒島學界の權威として、縣内外に重きをなす、此間市會議員たること、大正元年以來五期、縣會議員たること二期、商工會議所議員たること三期に及び、消防組頭としては、大正七年以降現在に至つて居る。尙鹿兒島信用組合理事、鹿兒島電氣株式會社取締役の現職にあり、昭和十年陸軍特別大演習に際し、大勳を辭遠の地に進め給ふや、君は教育功勞者として、單獨拜賜の光榮に浴す。實に一家一門の榮譽と云はざるを得ず。三男四女あり長男貞雄君は九大法科に、次男貞信君は東大文科に在學中である。尙三男貞春君は一中に在學中にして、女子は他に嫁する者多し。

鹿兒島高等女學校長 鹿兒島市下荒田町 屋代熊太郎君



本校は鹿兒島津曲學園總長津曲貞助氏が教育報國の精神に基き、本縣女子中等教育機關の缺乏を補ひ、優良貞淑なる女子を養成せんが爲め、母堂の意を承けて創立を企圖し、大正十二年一月二十日文部大臣の認可を受け高等女學校令に據りて設置せる女學校(修業年限四ヶ年)にして全四月十二日の鹿兒島縣立第一高等女學校長屋代熊太郎氏を校長に招聘して認可を得、入學志願者六百六十九名中より第一學年に二百二十九名、第二學年に行ひ、全合計三百八十八名を選抜して、爾來校運の隆昌に六月十日開校式を舉行せり。爾來校運の隆昌に隨ひ、校舎を増築して生徒定員を増加し、内容の整備充實を圖り、十四年定員五十名の補習科を設置し、翌年更に定員百二十名の修業年限三ヶ年の専攻科を設置する等諸般の設備漸年完成せしめ、昭和三年不幸火災に遭ひ、全舎を焼失し、現校長屋代君は從前一致協力して復興に努つた。現校長屋代君は栃木縣那須郡那須に生る。明治二十九年卒業と同時に母校栃木師範學校教諭に就任し、三十二年鹿兒島縣立第一高等女學校教頭に轉じ、三十八年鹿兒島縣立第一高等女學校長に就任し、全十二年鹿兒島高等女學校長に在り。君は若松部隊に加はりて中支戦線に活躍し、安政略の戦死を遂ぐ。惜しむべし。途次、昭和十三年八月某日、山附近の戦場に於て名譽の戦死を遂ぐ。惜しむべし。

縣會議員 中村猪之助君

鹿兒島市高麗町

獸醫として世の中に果立つた君が、今日縣會議員として縣政を議し、南國モータース會社支配人として所謂士魂商才を發揮してゐる變化の妙は、一技師から米國大統領に早換りしたフーヴァーの其れに髣髴たるものがある。此の變化こそ君の才分の豊さと、伸縮自在なる融通性を示す外の何物でもない。

君は先考庄左衛門氏の長男、明治廿二年正月八日を以て川邊郡加世田町に生れた。明治四十三年鹿屋農學校獸醫科を卒業して郷里に獸醫を開業、爾來廿八歳の壯歲から四十四歳迄引續き加世田町會議員として郷村自治政の發達に貢獻し、大正八年以來交通事業に關與して南薩自動車會社の經營に當り、後ち之を南薩鐵道會社に合併し。全九日本水電力會社常任監査役に推され、昭和六年南國モータース會社支配人に就任すると同時に縣會議員に當選し、全十年任期満了と共に再選重任、現に第二回目縣參事會員の要職に座せる外、郡制廢止後川邊郡畜産組合長の重職に擧げられ、専門の知識に加ふるに政治的手腕を以て其統率に任じ、兼ねて縣畜産組合聯合會評議員として縣畜産界に重きを爲してゐる等、地方的存在を放れて顯著なる中央の一存在となつた。昭和十三年自治制發布五十週年記念式當日郷里加世田町より自治功勞者として表彰せられた事は當然の結果であらう。令室との間に二男四女あり、長男博見君は一中在學中であり、長女は已に嫁した。

縣會議員 吉川前友君

鹿兒島市加治屋町



君は先考前湯喜氏の次男、明治十二年十月五日を以て大島郡知名村に生れた。明治三十四年明治法律專門學校を卒業して歸り、大正八年縣會議員に當選昭和二年再選した外、知名村農會會長、大島郡砂附同業組合代議員、畜産組合代議員、沖永良部電氣會社社長、沖永良部、與論兩島煙草元賣捌人永良部百合同業組合及産業組合顧問等に歴任し、昭和八年三月鹿兒島市會議員に當選し、全年六月更に縣會議員に擧げられ、全十年再選重任して今日に至つた。以上君の經來りし跡を見るならば、君の人物と識見、並びに大島郡民の君に對する信望の程度を知るに難くないであらう。此の間大島郡に貢獻せし所多大なるものありしは言ふ迄もないが、就中昭和四年沖永良部電氣會社の創設と、全年知名村小米港灣修築に關し、縣當局に火の出る様な猛運動を試みて半額補助の結果に漕ぎ付けた事と、和泊村と和泊港が國庫の補助を得るに至るまでの苦心と努力は、到底筆舌の盡くすべしに非ず、若し筆者が大島郡民を代表するの權利があるならば、郡民の名に於て感謝の意を表するに躊躇しないであらう。人間の一生は棺を蓋ふて論定まると云ふが特に政治家諸君の生涯に於て一段此の感が深い。加養自重此上とも郡民の爲めに努力せん事を祈つて止まない。趣味は園林。

大正六七年の交一般經濟界の好況に刺戟せられ教職員の他業に轉向する者續出するを遺憾とし、時の本縣内務部長服部教一氏の提唱により教員互助會創立の機運を促進し、同七年六月廿二三日開催の教育會代議員會に於て之れが設立の趣旨を説明して諒解を求め、同年十月視學會の席上定款及細則の協定を經、同十二月會員の募集に着手せり。翌八年發起人玉利喜造、折田兼至外數氏の名を連ねて中橋文相に社團法人鹿兒島縣教員互助會設立の認可申請を爲し、同九年一月廿一日之が認可を得たり。當時會費參拾錢にして弔慰金慰籍料も極めて少額なりし爲め會員漸次減少して經營困難に陥れるを以て、大正十二年二月臨時總會を開催して定款の改正を行ひ、會費を一圓に引上げ、會費納入期十五ヶ年を在會期間に延長し、弔慰金の支給額を百圓乃至千圓に増額すると共に被服部を新設し、専任主事として川崎君を囑託する事となれり。次で昭和二年臨時總會を開きて契約貯金開始の件を決議し、四月一日より之を實施し、全七年従來の知事會長制を廢し大久保利武侯を會長に鏡原軍人氏を副會長に推し、全十年飯牟禮實義氏を副會長に推して今日に至れり。本會主事たる川崎君は師範學校を出でて小學教員に奉じ、本縣教育會の爲めに寄與する事二十ヶ年の久しきに及び、川邊郡視學を最後として引退し、大正十二年本會主事を囑託せられ、爾來持据經營に任じて本會の進展に努力し以て今日の盛況を招來せり。明治十五年三月十九日生。

元縣會議員 末吉市之進君

鹿兒島市郡元町

起死回生の妙術を施して瀕死の中郡信用組合を今日の優良組合たらしめた事と、鹿兒島市との合併に先ち中郡宇村長として村内の耕地整理を斷行し以て現在見るが如き美田たらしめた事とは共に君の身後を飾る功績である。

君は先考新左衛門氏の長男、明治二十年七月二日を以て舊郡元村に生れた。長じて博約義塾に學び、卒業後年少氣鋭を以て郡會議員たる事二期、同時に村會議員當選運五期の長きに亘り、此の間村農會會長又四期に及び、昭和二年郷黨の推す所となりて縣會議員に當選し、同時に中郡信用組合長に擧げられ、爾來今日に至る迄持据經營して内容を整理し、外觀を改め、當時解散の一步手前に在つた同組合をして却て優良組合たらしめた苦心と努力は、克く村民の期待に應へたものであり、村民の君に對する信頼をいやが上にも高からしめた感がある。全四年遂に舊中郡宇村長に選任せられ、在職の期間こそ僅に三年に過ぎなかつたが、其間道路開鑿、耕地整理の完成に多大の功績を留め、且つ競馬場設置實現の基礎を作り、今日市に多額の財源を提供したのも君であつた。信用組合長の外郡元町會長、縣漁業組合聯合會副會長、縣耕地協會評議員を兼ねて盡瘁を續けてゐる。令室との間に三男一女あり、長男晃君は早稻田大學經濟科を卒業、現在幹部候補生として熊本驅重隊に入隊し、次男進君は同大學工科に、三男之三君は鹿兒島中學に夫々在學中である。

縣教員主事 川崎正弘君

鹿兒島市上荒田町九九

大正六七年の交一般經濟界の好況に刺戟せられ教職員の他業に轉向する者續出するを遺憾とし、時の本縣内務部長服部教一氏の提唱により教員互助會創立の機運を促進し、同七年六月廿二三日開催の教育會代議員會に於て之れが設立の趣旨を説明して諒解を求め、同年十月視學會の席上定款及細則の協定を經、同十二月會員の募集に着手せり。翌八年發起人玉利喜造、折田兼至外數氏の名を連ねて中橋文相に社團法人鹿兒島縣教員互助會設立の認可申請を爲し、同九年一月廿一日之が認可を得たり。當時會費參拾錢にして弔慰金慰籍料も極めて少額なりし爲め會員漸次減少して經營困難に陥れるを以て、大正十二年二月臨時總會を開催して定款の改正を行ひ、會費を一圓に引上げ、會費納入期十五ヶ年を在會期間に延長し、弔慰金の支給額を百圓乃至千圓に増額すると共に被服部を新設し、専任主事として川崎君を囑託する事となれり。次で昭和二年臨時總會を開きて契約貯金開始の件を決議し、四月一日より之を實施し、全七年従來の知事會長制を廢し大久保利武侯を會長に鏡原軍人氏を副會長に推し、全十年飯牟禮實義氏を副會長に推して今日に至れり。本會主事たる川崎君は師範學校を出でて小學教員に奉じ、本縣教育會の爲めに寄與する事二十ヶ年の久しきに及び、川邊郡視學を最後として引退し、大正十二年本會主事を囑託せられ、爾來持据經營に任じて本會の進展に努力し以て今日の盛況を招來せり。明治十五年三月十九日生。

一六六〇

商工會議所 山口吉左衛門君

鹿兒島市山下町一三四

君は明治十五年一月九日を以て先考覺兵衛氏の息として山下町に生る。砂糖、肥料、雜穀の卸問屋は先代の創むる所なり。市立商業學校第一期生として同校卒業後、出でて歩兵第四十五聯隊に一年志願兵役に服し、日露戰役中補充召集せられ、第二軍に屬して各地に轉戦し、武勳を以て中尉に進められ、從七位勳六等に叙せられたり。干戈止みて凱旋するや、谷村大尉等と謀り名山軍人會を組織し、推されて副會長に就任し、治に居て亂を忘れざるの覺悟と、士氣の振作鼓舞に努め、以て現在に於ける在郷軍人會の先驅を爲せり。今日名山在郷軍人分會が縣下に名を馳する所以のもの君等先輩の遺せる精神の賜たらずんば非ず。爾來亡父の遺業を繼承して經營之れ努め、傍ら大正十二年會員八十五名より成る糖商組合長に推され、潮見町衛生組合安全組合の各組合長に擧げられ、昭和九年西本願寺別院勘定役を仰せ付けられ、全年更に縣立第二鹿兒島中學父兄會評議員に推され、昭和十二年商工會議所議員に選ばれ、同時に副會頭の重職に座し、克く久米田會頭を扶けて本市商工業の振展に寄與しつつあり。別に鹿兒島木材株式會社取締役たり。

市會議員 奥善宏君

鹿兒島市馬場町四五



君は故奥常次郎氏の養嗣子、明治二十四年正月二日生。幼より學を好み秀才の譽あり、鹿兒島縣立第一中學校、第七高等學校を経て東京帝國大學法科に學び、優秀の成績を以て卒業後家庭に留まりて養父の遺業を繼承し、傍ら推されて亡父以來の不斷光院門徒總代となり、全十年財團法人錦城學會(學舎及幼稚園を經營)會長に就任し、十餘年間努力盡瘁せし外、昭和十二年、在郷軍人名山分會會長、町衛生組合長、安全組合長、防衛團警備團長等に擧げられ、市會議員に當選して商工、市場、社會各委員を兼任し、市民の間に着々存在を知らしめつつあるものあり。君の眞の活躍は今日以後に期待されるものであらう。

養父常次郎氏は本市實業界の先覺者で、商工會議所副會長として多年令名を縣内外に馳せ、鹿兒島市會第一期より數期間議員として市政に參畫し、本市女子實業學校の設立を唱へ、遂に之を實現せしめ、又實業教育の普及を期し、朝日新聞の重役として、又實業新聞社を電話架設の速進に狂奔する等、學界に選ばれ各方面の功績の著しきものあり。氏は刑務所が小川町の機織を請負した時代より、善宏君に至りて小倉地を續け、現在小倉地に換ふるに大島船を以てした。(寫眞は養父)

元助役 功七郎 福元金太郎君



市議員 功七郎 福元金太郎君

隨所に其の任を辱しめざる君の如きこそ、眞に國家有用の人物ではあるまいか。明治三十年徴兵によりて騎兵第六聯隊に入隊、滿期除隊後職を鹿兒島刑務所に奉じ、日露開戦と同時に應召出征、首山堡より黒溝臺に進撃し、次で北部朝鮮に向ひ、其間斥候たる事十數回、曾て新民屯附近に於て斥候たりし時、當時未だ其の方面の地圖なきを遺憾とし、馬上より見取圖を作りて軍の行動に多大の利便を與ふる等武勳赫々たるものあり、凱旋後勳八等に叙せられ、功七級金鶏勳章を賜つた。

大正九年二月郡宇村収入役に選任せられ、同一年八月引續き助役に推され、爾來選を重ぬる事四回、昭和九年八月鹿兒島市合併當時に於ては、村長缺員中君が代理村長として諸般の交渉と所置に當り、圓滿裡に合併を成就せしめ、直後市會議員に當選、昭和十二年三月再選して今日に至つてゐる。

助役當時勲業方面に力を注ぎ、耕地狭少なる當地方に初めて集約的農業經營法を導入し、蔬菜の促成栽培を奨励して遂に現在の繁榮を招來した外、新川尻競馬場の新設、紫原耕地整理の完成等挙げれば功績の顯著なるものが多い。現に産業組合監事、飛行場建設委員として努力盡瘁に任じてゐる。長男清輝君は同志社大學を出で、大阪府廳に奉職し、次男清春君は京都帝國大學に在學中。

市會議員 山内常吉君



市會議員 山内常吉君

十九歳の時郷里伊作町田尻を後にして鹿兒島城下に出た君がなるべく人の行らぬ職を求めて當時御着屋町に營業してゐた某

青果蔬菜商の店に奉公したのが、そも／＼君の今日ある發端であつた。此所に君の處世哲學の並々ならぬ鋭さと深さが觀取されるではないか。二十二歳の時(明治四十二年)愈々一人前の商人として同じ御着屋通りに青果蔬菜の店を開き、爾來熱心に卸、小賣の商取引に従事する事八ヶ年、次で大正十二年名山堀に移り、自ら奔走して組合組織の鹿兒島青果市場を開設し専ら經營の衝に當る中、昭和五年縣農會市場の小川町に開かるゝや君は聘せられて經營の任に當る事となつた。當時指定區域内に於ける青果卸賣市場は、前記二市場の外、大正十三年開設の西櫻島市場の三市場と個人間屋五六名あり、何れも近代市場の形式に則り活潑な取引を爲しつゝあつたが、昭和十年十一月中央卸賣市場の出現を見るや、前記各市場附屬間屋並に個人間屋業者自發的に合流し、多年の投資を犠牲として鹿兒島青果株式會社を組織し、十一月四日より業務を開始し、山内君を社長に推戴して異常なる成績を挙げつゝある。昭和十二年君は選ばれて市會議員に當選し、農務、市場、食堂、港灣の各委員として熱心職務の遂行に當り、曩に縣會議員と共に臺灣各地の視察を爲して歸り爾來本縣物資の捌け口たる臺灣への直通航路の速開を叫びつゝある。

元縣會議員 竹之内純則氏



元縣會議員 竹之内純則氏

安政四年十月を以て誠實演氏の三男に名瀨に生る。祖考は共に名瀨村與人たりき。君は若くして名瀨小學校教員に奉じ、次で名瀨副戸長、大島郡役所書記に轉じ、郡役所書記に轉じ、一等出仕に任ぜらる。明治十八年時の大島支廳長新納忠三氏大島郡の救済を企圖し、政府より拾万金を借り入れて資となし、郡の主要物産たる砂糖を直接大阪商人阿部某と取引せんとせしに、渡邊本縣知事は之を喜ばず、直ちに新納支廳長を罷免し、大島産砂糖は鹿兒島商人の手を経て他府縣に移出すべき縣令を發し、同時に阿部某を罷退する爲め鹿兒島商人に數十名の警備を附して名瀨に派遣するあり、故に阿部組對鹿兒島商人組の大騒動を勃發せしむるに至れり。君は斯の如き無謀極まる知事の下に官吏たるを耻づる旨の建白書を提出し即日官を辭して反黨を請し、全部有志を叫合して知事の意圖覆没に當り、遂に一大紛擾を醸し、知事を以て先の縣令を撤せしむるに至れり。後ち全部一致の推舉によりて縣會議員に當選せしめ、議合は必ずして罷む。次で名瀨戸長に擧げられ在職八ヶ年に及び、其の間名瀨海岸の沼池を村に拂下げて之を埋立て、村有財産に編入せしもの、今年々數千圓の收入を舉げつゝあり。又高等小學校建設の急務なるを痛感し、自ら東奔西走して克く三千圓の寄附金を募集し、内一千圓を投じて校舎を建て、殘金二千圓を該校基本財産となし、之を名瀨村外八ヶ方に寄附せり。是れ即ち名瀨東校の前身にして、彼の泉二權事總長、大和茂樹氏を初め本郡出身の英才悉く本校に出づるの體あり。後ち沖繩縣土木技師に奉職し、再び名瀨戸長に復し、大島農學校設立に盡瘁する所ありき。大正三年の頃鹿兒島に居を移して大島油業に従事し、織物同業組合を組織して組合長に就任せしが、今は已に罷む。嗣子純侃君は長崎醫大を卒業して新潟縣直江津に黨病院を經營せり。

出版業 武山宮信君



出版業 武山宮信君

小學校を卒業したばかりで、而も十九の弱冠にして見事小學校教員の檢定試験に合格したと聞くならば、それだけで直に才氣喚發なる一箇青年の姿を眼前に勞働することが出来るであらう。この青年こそ明治十九年十月二日宮幾氏の次男として大島郡和泊村に呱呱の聲を擧げた君に外ならない。

明治三十七年、免狀獲得と同時に小學校の教壇に立つて、十年の明け暮れを教育報國の聖職に専念したとは云へ、勤助たる青年の客氣と、往くとして可ならざるなき君の才分は、尊い、然し乍ら單純にして變化なき小學校教師の職に終始するを許さず、大正五年斷然職を辭して鹿兒島市に移住し、持つて生れた文筆の才を生かして大阪朝日新聞通信記者となり、傍ら同紙の取次店を經營するに至つた。然るに好事魔多き譬に洩れず、心身過勞の爲め病を得、取次店の經營を他人に譲りて靜養に努め、健康全く恢復した大正九年鹿兒島朝日新聞社に入社、居る事八ヶ年にして同社を辭し、爾來出版業に従事して今日に至つた。雑誌「奄美」は大正十四年創刊以來今日に引續き常に不變の實行を示し、「薩隅」は昭和三年以後の發刊にも拘らず等しく相當の出版數に上つてゐる。蓋し君の豊富なる經驗と、圓熟せる才筆の致す所なるは言ふ迄もない。嗣子信夫君は鹿兒島高等農林學校を出で、臺南州産業技手に奉じ、次男信孝君は京大理科を卒業して更に大學院に進み、斯界の研究に没頭してゐる。

有馬救命堂主 有馬廣雄君

有馬救命堂主 有馬廣雄君

當今の醫學の進歩と化學の發達とを以てして尙ほ未だ闡明されないので漢法藥の神効であるとかへ其の主成分がどうあらうとも、又主成分の人体への作用が究明せられずとも、治病の卓効にうそ偽りがなければこそ昭和の聖代漢藥が依然堂々として闊歩してゐる譯である。此の歴然たる事實の前には百の理論も、千の抗議も何等の意義なきものでしかあり得ない。

吾が有馬救命堂の如きは過去三百年來の歴史を有し、代々漢法醫として國手の名を誦はれ、多年研究實驗の餘に發見せる秘藥數十種を傳へ如何なる難病奇病と雖も是等靈藥の應用によりて立所に全治せしめ來つた幾多の例證を有してゐる。即ち不治の病と稱せられる、てんかん病を初め、小兒麻痺、驚風、腦膜炎、肺炎、神經衰弱、不眠症、白痴、精神病、腦溢血、中風、半身不隨、嗜眠性腦炎、痴呆症、顔面神經、斜視等の諸疾患の如きをも治癒せしむる卓効を有し頗る好評を博してゐる。當主廣雄君に至り市内山之口町高見馬場電氣交叉點に本院を移し、縣内は勿論、全國的に聲名を馳せ、或は遠く海外にまで販路を擴張し、過去其の所方によりて全治せる全國各地よりの感謝狀文字通り積んで山を爲すの實狀にある。以て本院の靈藥が如何に多數の病者を救ひ、起死回春の妙術を施しつゝあるかを知るであらう。

大島郡庶務 慶祐一君

大島郡庶務 慶祐一君

慶家は元鹿兒島加治屋町の人、舊姓矢野氏なり。君より逆算して四代承積氏の時移りて名瀨に住し、功を以て薩藩士籍に列せられ慶の姓を賜へり。承積氏は本郡最初の興人、二代承積翁も亦區長を勤役して各々治民に功を效せり。

君は明治三十三年十月十一日を以て先考承雲氏の嫡男に生る。名瀨第一小學校を卒業して縣立大島農學校に進みしも當時家産豊かならず加ふるに十七歳にして嚴父承雲氏の死に會し游學を斷念して雄々しく生活戦線に立ち、傍ら老父母への孝養と獨學を怠らず、各大學の講義録より簿記、珠算の講義に至るまで一として讀破せざるなかりき。大正五年十月名瀨村長鹿鹿甚悅氏の認むる所となりて村役場職員に採用せらるゝに及び、囊中の錐立どころに鋭脱して書記に擢んでられ、爾來稅務、會計、戶籍、庶務の各主任及係長を歴任し、昭和八年三十三の壯年を以て大名瀨町の助役に推され、幾多顯著なる功績を留め昭和十二年職を辭し、直ちに郡産業組合聯合會理事として鹿兒島出張所長の要職に轉出して今日に至れり。單に手腕の人を求むれば君の外に人なしと言はず、然も郷土大島を愛し大島を憂ふる熱と力に至りては、遂に君の匹儔を得る能はざらん。大正十四年五月十日帝國人事調査會會長子爵後藤新平閣下より、昭和二年一月大日本雄辯會講談社より各々地方開發功勞者として表彰を受け、更に名瀨町制實施十週年に際し町當局より銀製花瓶一個を贈られ自治功勞者として表彰せられたり。

本派本願寺鹿兒島別院

鹿兒島市東千石町

慶長二年二月太守高弘公の時復難なる理由の下に一向宗禁断せられしより、明治九年九月五日縣令を以て各宗信仰の自由を達せらるゝに至りし迄の三百年間は...

天主教公會 古川重吉師

鹿兒島教區主任 鹿兒島市山下町一九〇



日本西教史及本縣郷土史の傳ふる所にして誤なくんば本邦にキリスト教の傳來せしは天文十八年八月十五日...

ザペリヨ師の薩摩入國に其の起源を發する。(其間の事は載せて郷土史に密なり)師の鹿兒島滞在と布教の期間は僅に數ヶ月に過ぎなかつたが、日本が殆んど神に近き人を、而も最初の宣教師として之を本縣に迎へた事は、少くも本縣の誇りと云ふべきであらう...

鹿兒島縣 平島彦熊君

鹿兒島市下荒田町



本社の發祥は遠く廢藩置縣により職を失ひたる本縣士族を救済する爲め明治十三年四月設立せられたる爲設立後、次第で明治二十三年縣廳遷立に依り是れ等士族の救済を以て...

有限責任信用購買組合共助會

常務理事 大井藤助君

鹿兒島市易居町

本會の沿革を按ずるに大正五年以降歐洲大戰の影響が經濟界に波及し、物價漸騰して産業界に於て...

醸造業 本坊淺吉君

鹿兒島市住吉町

入りては本坊王國の支配者として焼酎賣星二萬石の醸造販賣に當り、出で、は日本穀粉工業會社取締役、薩摩合同酒類株式會社監査役、縣酒造組合聯合會副會長、川邊掛宿兩郡酒造組合長、川邊郡米商組合長、南嶺鐵道株式會社取締役...

元村長 有村貞隆君

鹿兒島市新照院町

過る大正三年一月十一日の世にも恐るべき櫻島の爆發を記憶する本縣人にして、當時西櫻島村々長であり、其の身も等しく罹災者の一人であり乍ら、爆發の其日其時以來一身一家を顧慮する暇もなく、身も心も村政の所置と罹災避難民の救済に粉骨砕心した有村君の名を記せざる者はないであらう...

元警視 正七位 勳六等

中間市之助君

鹿兒島市草牟田



明治六年を以て鹿兒島郡伊敷村比志島に生る全二十六年近衛歩兵第三聯隊に入隊、日清戦役に出征して金州旅順方面に轉戦

し後ち臺灣征討軍に編入せられて臺北より臺南に向ひ此の間蕃族と交戦する事約二十數回に及んだ。明治二十九年豫備役に編入せられて一旦歸郷したが翌三十年再び渡臺して土倉殖林事務所に奉職、居る事五年のち臺灣總督府巡查を拜命、全四十一年警部に、大正十年警視に任官し辭して故山に歸臥し、昭和八年村會議員に當選一期間村政に参畫した。君は蕃語に堪能なる爲め臺灣に於ては殆んど全期間蕃地に在り隨つて彼れ等の思想と行動に就きて知る事深く曾て總督府警務係長巡視の際君の献策尤も用ゆるを見て上司に報告せられて大島民政官、永田警務局長等に呼ばれて意見を開陳した結果、直ちに採用せられて蕃地探險を命ぜられ、主領に面會して聖恩を説き歸順を勧め豫期以上の効果を挙げ得た。君は獨り君のみは神の如く盡く彼れ等の及に驚れたるを去るに臨み四百の蕃人が見送るをなしたと云ふ。君は警務係長に於ては君の存在を絶對に必要とした關係上總督府より軍省に交渉して召集を解除せられたに見て、君の事業上に於ける君の勞苦と功績を推して、君の御差遣の際、君は村會議員代表として伺候するの光榮に浴した。

出水郡聯合分會長 正七位 勳五等 第七高等學校講師 功七位

中村森藏君

鹿兒島市上荒田町



過去四十年間一貫して軍事に終始し、今尚ほ之れに盡しつゝある君の如きは、右衛門氏の三男、明治十四年二月二十四日を以て阿久根町山下に生る。幼にして武人を志し、郷校卒業後明治三十一年十二月一日陸軍教導團第三十一期歩兵科に入團、全三十二年十一月全團を出づると共に歩兵二等軍曹に任官して歩兵第四十五聯隊附を拜命、明治三十七年日露兩國干戈に相見ゆるや、君は曹長として眞先に出征し、最後迄踏止まり、此の間鞍山、大石橋等々の激戦に於て赫々の武功を顯し、所謂薩摩健兒の名を辱しめざるものあり、爲めに特務曹長に進められ功七級金鷲勳章を賜つた。次で明治四十一年朝鮮咸鏡道守備に派遣せられ四十二年歸隊、大正六年八月十日陸軍士官學校に入校、全十一年八月十日陸軍士官學校に、全八年八月歩兵少尉に任官、全十年四月中尉に昇進、全十二年二月滿洲駐屯を命ぜられ全十四年四月交代の期至りて歸隊、翌五月一日歩兵大尉に進められ、全時に待命豫備役に編入せられた。昭和二年八月第七高等學校講師を拜命、全三年三月阿久根町在郷軍人分會長に、全六年七月出水郡聯合分會長に就任、何れも現職に在り郷土を中心として良民良兵を作る事を目標とし一日と雖も其工作を怠る所なし。君の如き標とし良民良兵の範か。讀書を唯一の趣味とし倦めば盆栽に對するを常とす。今鹿兒島市上荒田町に住す。

齒科醫 野井倉武君

鹿兒島市武町二九一



針の穴から覗いた天地も宇宙の一部分には相違ない然しこれを以て廣大無邊なる全宇宙を準するならば取り返しのつかぬ間違ひを生ずるの結果となるであらう

試験管を通して發見した眞理も亦眞理たるには相違ない、だからと言つてあらゆる人間の生活に、其の眞理を以て臨まんとするならば、隨所に豫期す可らざる種々の不都合を生むに至るであらう。此所に譬へば磁鐵に適當なる或種合金が發見され、市價の低廉なるが故に、其の質の適當なるが故に、處に専門醫家に使用せらるゝ時、もし一化學者ありて其金屬が試験管的實驗の結果僅に人体に有害にして金の優秀なるに如かずと發表したと假定せよ、金の磁鐵を誘ふ能はざる貧人は終生齒なくして嘆ひ、遂に短命に終るの悲劇を生むであらう。而して其化學者は之れを發表したるが故に賣名の目的を達成するであらう。斯の如き化學者を呼ぶに「無責任なる賣名者」と言ふならばや、庶幾きを爲すであらう。護むべきは學者の言動である。以上が君の持論であるとするならば略其人物と職見の程も知らるゝではないか。君は嶺南郡西志布志村の長老其兵衛氏の三男、明治四十三年八月八日を以て野井倉に生れた。志布志中學校を経て日本大學齒科專門部に入學し、昭和八年同校卒業後東京市久木留齒科病院單科分院主任たる事二ヶ年に歸り、一時郷里に開業して施療に應じたが、昭和十一年十一月現所に移り、技術の優秀と患者に接して親切なるを以て漸次名を馳せ、開業日尚淺きにも拘らず相當の患者を吸引して今日に至つてゐる。流石に富裕な家庭に育つた人丈に其慈悲愷淡、いかにも醫術らしい醫術である。

社會事業功勞者 三原隼治君

鹿兒島市鹽屋町四四

過去二十年間の君は殆んど寧日なく社會事業の爲に盡して來たと云つて宜しからう。君等の存在によりて住み愛き人の世もやうなるほひを生じ暖かみを恢復するのではあるまい。君は明治六年九月二十八日先代情四郎氏の息に生れた。東郷小學校卒業後の明治二十八年海軍志願兵として佐世保海兵團に入り、現役中、日露戦役に参加し勳功に依り勳七等に叙せられ、一等信號兵に進みて退役歸郷した。後ち上東郷村役場書記を拜命し庶務主任まで昇進したが、感ずる所ありて職を辭し滿洲に渡り實業界に飛躍する事多年にして歸り、爾來鹿兒島市鹽屋町四十四番地に居住して今日に至つた。當市居住と同時に全町衛生組合役員に推され、引續き現在も尙ほ其職に在りて盡瘁する外、方面委員として大正十二以來今日迄努力を續け來り、人家稠密約二千戸に上る全町の衛生と方面委員制度に多大の功績あり、去る昭和二年本縣知事より社會事業功勞者として表彰せられ、置時計一個を贈られた事は寧ろ當然の結果ではあるまいか。現在方面委員、鹽屋町安全組合幹事、市安全組合幹事、縣安全組合常務理事、縣、市衛生聯合組合理事として活躍を續けてゐる。夫人との間に男子二人を擧げた。長男は市營中央卸市場に奉職勤務中。

市會議員 永田榮吉君

鹿兒島市郡元町



明治三十六年佐世保海兵團に入團して日露戦役中長崎警備隊附となり、勳功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜つた。

滿期除隊後の明治四十五年本縣巡查を拜命して警察界に活躍する事十數年、退官歸郷後郡元消防組頭を経て中郡消防組頭に推され、昭和十二年職を辭した外大正十四年中郡消防組頭を當選し、昭和九年鹿兒島市と合併するまで其選を重ね、其他郡元町安全組合長、町會副會長、産業組合理事等の現職に在り、昭和十二年三月市會議員に選任せられ、各方面に盡瘁を續けてゐる。君は消防の功勞者で、郡元消防組頭在任中、昭和三年十一月之を公設中郡消防組に昇格せしめ、在郷軍人、青年團員其他眞面目なる青年者を組員に採用して之を指導訓練し昭和四年一月全國消防組員代表者の一人として宮城前に於て天皇陛下の御親臨を蒙つた外、前後三回の御親臨を受け、昭和御大典に際し火防警戒の任を全ふし、谷山町大火の消防に盡し昭和四年新川堤防決壊の時之れが防水に努むる等幾多の功績を殘し、縣警察部長、谷山署長より夫々感謝状を贈られた。又青年團、處女會の設立に盡瘁し、創立後は顧問に擧げられて黨育の實務に當り、昭和六年一月大日本雄辯會講談社より表彰せられ記念品銀盃を贈られ、昭和九年村より功勞者として表彰を受けた。長男靜雄君は長崎高商を卒業して日本水力電氣會社に奉職中。

郷友會會長 山之口友吉君

鹿兒島市武町一七九五



明治十二年九月廿八日を以て先考市之助氏の長男として東市來町養母に生る長じて教育界に志し、明治廿九年、梅木小學校代用教員を拜命した君は、全卅一年三月高山小學校に轉じ、其後教員養成講習所に入つて學ぶ處ありしも、全卅二年十二月徴せられて、歩兵第四十五聯隊に入隊し、卅四年十二月歩兵伍長に昇進、退營後明治卅七年三月宮崎縣高城區森林主事に任用され勤務中、日露戦勃發と共に、卅七年五月應召して出征、娘子街の戦場に於て、足部に貫通銃創を受けて卅八年七月除隊となる戦功に依り勳七等に叙せられ青色桐葉章を授與された。卅八年十月大島營林署に復職し、四十一年六月知覽營林署に轉じ其後種子島營林署谷山營林署を経て大正七年六月營林署に進み、山野營林署を経て鹿兒島營林署へ轉任し、大正十三年十二月官を辭した。其間勳績實に廿二年、營林事業に貢獻する處甚大なるものがあつた。其後は居る鹿兒島市武町一七九五番地に定め、昭和五年以來町會副會長、衛生組合長、並に郷里出身者郷友會會長等の要職にあつて盡瘁する處あり、君は家庭的には悪まれず、養嗣子ありしも既に他界し、愛孫信君は幼少にして目下小學校にあり、趣味として園芸、盆栽を好む。

成功者 小園平右衛門 君

鹿兒島市武町五二二

明治二十九年一月廿八日を以て故三左衛門氏の四男として日置郡東市來町養母に生れた君は幼時父母の膝下に於て小學校を卒へると家庭事情に依り直ちに實社會に飛出し土木事業に従事すること六ヶ年、後大に感ずる處ありて大正四年福岡縣八幡市の旭硝子株式會社牧山工場に入り硝子製造販賣其他必要なる事項を具さに研究して大正十一年歸郷、今年六月廿七日市内武町なる君の現住所に於て旭硝子會社の特約店として硝子商を開店した、即ち鹿兒島縣、宮崎縣、沖繩縣の一手販賣を特約して一大飛躍を始めたのである、爾來十數年に至る今日迄粉骨碎身奮闘の効ひあつて、業務は日に増し隆昌に向ひ時勢の進運と共に需要は激増し、隨つて其取扱高も増加するに至り現在店員十七名を有し沖繩及縣内鹿屋町に支店を開設したる外各地特約店の如きは百を以て數ふるに至つた、而して業務の發展と共に同業界は勿論町内の信望益々加り數年前より武町々會副會長に擧げられ尙業界に於ては西部硝子同盟會幹事として活躍し又南九州板硝子同業者を以て組織する明朗會なるものを起し、大正八年十二月創立と共に其會長に擧げられ斯界の向上發展に努力しつゝあるが君の如きは實に立志傳中の人と云ふべく青年子弟の範とすべきものが尠くない。君に四男二女あり長子は縣立二中に、長女は鹿高女に、其他は小學校在學中である。

吉野青年 學校長 生駒盛文 君

鹿兒島市武町

本校沿革の概要を述べんに、昭和六年四月龍水實業補習學校、川上實業補習學校、吉野實業補習學校及び各校に附設せし三訓練所を統一して吉野公民學校並に高等公民學校を吉野校に附設、全八年一月學校敷地として一町一反一畝十七歩を買収、今年十月本校舎建築を起工し、翌九年三月落成。今年八月鹿兒島市に併合の爲め鹿兒島市立吉野園藝青年學校と改稱、昭和十年四月一日青年學校令により鹿兒島市立吉野園藝青年學校と改稱して今日に至つた。

本校の特色は園藝方面に於ける職業指導の徹底にして之れが爲め蔬菜園、花卉園、普通作飼料園、桑園等を設置し、生徒をして其の經營に當らしめ、以て郷土の要求する男女青年の輩出に力を注いでゐる。初代校長太田豊吉君、二代下園善秀の諸氏を経て第三代生駒盛文氏に至つた。

君は大正二年本縣師範學校を卒業して喜入小學校訓導を拜命し、昭和二年青戸小學校長に拔擢を受け、在職六ヶ年に於て師範附屬訓導に轉じ、尋で大龍尋高小學校主席に榮轉せられ、昭和十三年三月本校々長を拜命し、爾來本校の特色を生かし、有爲有能なる青年の黨育に努力して今日に至つた。運動に趣味深く就中庭球は其の尤も得意とする所であるが、近年は大弓に轉じ現在四段の猛者として斯界に其名を知られてゐる。

紫原農藝 青年學校長 平野甚助 君

鹿兒島市武町一七三〇



大正二年鹿屋農學校を卒業、指宿、花岡の兩小學校訓導を経て大正七年田上補習學校に職を奉じ、昭和十年四月紫原農藝青年學校の創設と同時に本校々長を拜命して今日に至つた。由來田上小學校は師範學校附屬代用校なるを以て相當優秀なる人物に非ざれば本校教員たるの資格なきは勿論である。此の困難な小學校の補習教育に十八年間勤続した事を知るならば、それだけ君の人物手腕を推すに難くないであらう。本校は讀んで字の如く農藝青年の黨育を目的として建設せられた特異色濃厚な學校であるだけに、鹿屋農學校に於て専門に此の道を學んだ君には洵に好箇の道場であり、隨つて豫期以上の成績を擧げて村民の信望を博してゐる。

本校は昭和十年四月從來の宇宿青年訓練所及宇宿中等公民學校、田上青年訓練所及縣立實業補習學校を廢止し新に發布せられたる青年學校令により之れ等廢校區域を打つて一丸として設立せられたるものにして、今年度専任校長一名専任男女教員五名、兼任一名、指導員四名の決定を見、今年四月七日入學式舉行、田上宇宿兩校に於て授業開始、今年十一月御親臨拜受、全十一月十九日校舎新築移轉、全十一月廿二日御教育勅語及成申詔書御下賜、今年四月廿七日御眞影奉戴、今年十一月湯殿、斎舎、温室、校門の建築完了、生徒現在數男女合計二百八十七名を算し居れり。

元警察署長 正五位 內藤兼雄 君

鹿兒島市鴨池町



君安政四年を以て先考伊集院嘉吉氏の次男に生る。長ずるに及び東京芝新銭座なる海軍歩兵隊に入隊、明治八年大久保公が

清國に使用するに當り護衛して長崎に至りて歸學。全九年歸郷して南洲翁の經營する私學校に轉じ、翌十年一月丁丑の亂勃發するや父子四人を共に負傷せり。明治十二年本縣巡査を拜命し、後ち京都府巡査たる事三年にして大阪府に轉じ、警部監に昇進して柴島署長に榮轉す。後ち北警察署に轉じ、同市今福、平野兩署長を歴任、次で再び大阪府警察部監に復し、玉造警察署初代署長を拜命、後ち千葉縣警察部監となり、佐原、松戸、佐倉の各署長を経、警視制度の實施と同時に警視に昇進して千葉警察署長に擢られ、次で全縣東葛郡長に任ぜらる。後ち岐早縣に轉じ、山縣郡長、海津郡長を経て更に愛知縣に轉じ、幡豆郡長、愛知郡長を歴任して知多郡長に轉じ、大正九年四十有餘年の官海を辭して故山に歸臥せり。此の間千葉縣東葛郡長當時に郡内低地部落に命じて排水機を設置し、耕地の整理を斷行し、爾後復た水害を蒙るなからしめ、全部關屋町の納税を整理して町政の紊亂を正し、町民より記念品を贈呈せられし外、愛知縣幡豆郡に於て水利組合を設けて耕地の整理を爲し、組合の整理計畫を實現すると同時に、引續ぐ等功績の顯著なるもの多し。歸郷後、老翁を提げて郷土愛の實感を怠らず、今尚ほ氏子總代として敬神崇祖の思想普及に努め居れり。養嗣子兼光君は鴨池郵便局初代局長として通信事務に精勵中。

郵便局長 肥後翁助 君

鹿兒島市上之岡町



祖父翁助氏は舊藩時代の代官として大島に赴任し、其まゝ笠利村に土着した家柄で、君の先考翁江子氏は島津家砂糖製造所の役人を勤役し、維新以後推されて笠利村會議員たる事三期に及び、産業組合の創始者として信望内外を壓するものかあつた。

君は明治十五年八月六日を以て翁江子氏の長男に笠利村に生れた。夙に東都に遊學して開成中學に學び、明治四十二年同校を中途退學して熊本稅務監督局に奉職し、爾來島原、宮崎、鹿兒島稅務署等に歴任し、大正十三年十二月官を辭し、全十四年四月鹿兒島なる第四百七十七銀行書記に奉職し、後ち大島支店勤務を経て本社秘書課勤務に轉じ、昭和九年職を辭して家庭に入つたが、幾何もなく市内高麗町郵便局長を拜命して勤続今日に至り、昭和十三年二月通信開發の功に依つて勳八等に叙せられた。現在昭和十二年以來の笠利出身在職者會長、在職大島人會副會長、上ノ岡町會代議員等の職を兼ねて夫々盡瘁中である。以て其のひと爲りを推す事が出来やう。

家庭は令室との間に四男一女あり、長男は鹿兒島高等農林學校を卒業して朝鮮總督府技師に任じ、二男は鹿兒島二中を出でて東京府立第二中學補習科に、三男は鹿兒島一中を経て造士會に夫々在學中。

元村長 故 染河喜輔 君

鹿兒島市鴨池町

君は天保十一年を以て鹿兒島城下に生る。丁丑の役海軍に従ひ先輩南洲翁の爲めに身命を賭して戦へり。亂後明治十四年鹿兒島縣廳に出任し、職を警察部監に奉ず。聽て縣廳に昇り、會計主任たる事多年、明治三十四年官を辭して家に入れり。全年中郡宇村民の推す所となりて村長に就任し、至誠村政を執掌する事三年、辭して照國神社社務所に勤続せしが、明治三十九年十月十一日病みて卒す。歳六十七。君爲人眞摯正直、事を執りて苟もせず、財に蒞みて渝らず、居常五男一女を戒むるに「郷中のおきてを守る事」「噫言を吐かざる事」「弱者をいたはるべき事」「負けぬ様心掛くべき事」を以てし、子女をして不知不識の間に智、仁、勇の三者を砥礪せしむ。宜なる哉、嫡子孝助君(明治九年生)は陸軍歩兵大佐に擢進して正五位勳三等に叙せられ、大正十二年病を以て豫備役に編入せられ、次男精之進君は海軍機關中佐に任官して歸り、三男啓三君は等しく海軍に出でて大佐に昇進し、四男彌市君又海軍大尉たりしが、不幸現役中病歿し、五男省吾君は京都帝國大學農科を卒業せし後急逝する等、盡く國家有用の材となり、一女幾子女史は先に砲兵中佐郡山氏に嫁して六男一女を擧げ、夫君歿後雄々しくも貧苦窮乏と闘ひ乍ら子女の教養に没頭し、長男、次男相次で高商高農を卒業するに及びや、愁眉を開くを得たり。又女丈夫と謂つべし。

元村長 正七位 堀 金光君



鹿兒島市鴨池町

君の過去の経歴を一口に刻苦精勵の生涯と評したならば、當らずと雖も遠からざるものであらう。

慶應二年を以て當所に生れた君は二十五歳にして職を鹿兒島税務所に奉じ、明治三十三年奉職後十年にして大口税務署長に拔擢昇進せしめられた事を以て其天資の勝れて居た事と勤勉振りを知る事が出来やう。後年沖繩縣に砂糖消費税の實施を見るや、特に全縣稅務署長に轉勤を命ぜられ、新稅の取扱方と監督に努力する所があつた。次で再び本縣に召し返され、加治木、知覽署長を経て鹿兒島本署に在る事多年、川内稅務署長より延岡稅務署長に轉じ、全署を最後として大正六年官を辭した。大正十四年一月郷黨の興望を擔ふて舊中郡宇村長に就任、在職中教育第一主義を堅持して郡元、宇宿兩小學校の敷地擴張を初め校舎の増築を断行して施設に新面目を盛りたる外、中郡宇産業組合が歐洲戰亂後の財界反動期に際し營業不振に陥り、組合員は擧つて解散を叫ぶの有様なるを知つた君は、其解散が村民に多大の損失を蒙らしむるに、將來村民の間に紛擾を生ずべき因たる事を感じ、村長としての責任を以て、遂に今日の大を爲さしめた功績は特筆に値するものである。長男金次君は鹿高農を卒業して鹿屋農學校に教授を執りしが日支事變勃發と共に應召出征し、次男金次君は滿洲公廩に奉職、三男金英君は鹿兒島商業學校を卒業した。

元村長 第六位 山下源之丞君

鹿兒島市鴨池町

人間の世の中で、たとへ如何なる社會に於ても、一番偉い事は「眞面目」である。能不能の如きは「眞面目」の前に於ては元より問題でない。而して我が山下君の生涯を一貫してゐるのがこの眞面目である。

明治二十六年十九歳にして陸軍教導團に入り三十七年十二月砲兵特務曹長に進み、三十八年七月砲兵少尉に任官、四十二年中尉に進み、大正五年大尉に任じ、今六年十二月豫備役に編入せられて歸郷した。次で昭和六年九月郷土中郡宇村助役に推され、翌七年十月村長に選ばれ、在職二年の後事情によりて職を辭した。此の間日露戰役中第四軍に屬して出征し、戦功により勳七等に叙せられて青色桐葉章を授けられた。村長在職期間僅かに二年に過ぎなかつたが、新川尻競馬場誘致、(三ヶ年の日子を費す)鴨池高等農林學校開道路の開墾村内兩小學校トラホーム治療所新設等治績多し。

君は眞面目な努力家として定評あり、市合併直前に職を退いたとは云へ、合併問題に關しては少からず盡瘁した功勞者である。市會方面には特に信望があつたと聞く。競馬場誘致の如き恐らく其の信望の顯現に外ならぬのではあるまいか。現在衛生組長、町勢員等の公職を帯び、日枝社氏子總代をも兼ねてゐる。旅行、登山を趣味とす。家庭は令室との間に三男あり。

社 掌 第七位 太田軍介君

鹿兒島市郡元町

郡元に鎮座せる一條の宮は往古開闢神社又は一ノ宮と號せしも薩摩一ノ宮と誤り易き爲め當時の神祇官吉田兼運之を一條の宮と改む。貞享五年二月の棟札に一ノ宮大明神と記し、元祿十四年の記録には一條の宮とあり、以て祭祀の年代を推すに足る。當社は開闢神社の分社なりとの記録存すれども其の祭神の異なるより察して其の然らざるを知らん。本社の祭神は九座にして中宮は猿田彦大神、豐玉彦、日女神、鹽土老翁、玉依姫の五座、東宮は彦火々出見尊、豐玉姫の二座、西宮は大己貴命、天智天皇の二座なり。例祭は九月九日、十月朔日とす。一條ノ宮所藏の記録によれば島津家久公時代にては毎年正月三社詣として一ノ宮大明神、二ノ宮宇治瀬神社、三ノ宮川上天神に參詣せしものなりと。

現社掌太田君は先考彌兵衛氏の四男、明治十五年五月を以て郡元に生る。明治二十八年佐世保海兵團に入り、日露戰役中は水雷艇隊に乘組みて第二艦隊に屬し、主として臺灣海峡附近の警備に當る。戦功により勳七等に叙せられ青色桐葉章を賜り、四十二年二月退團歸郷した。日露戰役中米國より潜水艇を購入せし時君は其の機裝委員を命ぜられ、我國最初の潜水艇乗組員となつた。四十年八月支那大連海關に奉職、普蘭店上海、福州等の各海關を経て上海郵船碼頭主任に果進し、昭和十年職を辭して郷里に歸臥した。海關に職を奉ずる事實に廿八ヶ年、上海に在勤する事三回に上つた。歸來郷黨先輩の徳感もだし難く昭和十一年村社郡元神社(一ノ宮)社掌に奉仕して其の晩節を竭しつゝある。

元村會議員 淵邊元治君

鹿兒島市鴨池町



本縣選出代議士故萩亮氏は、先年關東大震災災直後の政友會代議士會に於て同僚が徒に黨利黨略を計るに専らにして、眞

に災厄復舊に忠實なる者なきを憤り、自ら立ちて滿面朱を注ぎ、斯の如きは國家に忠ならざる所以を怒號力説し、言未だ終らざるに演壇上に倒れた。此事實を知る吾人は、會ての中郡宇村會席上に於て、鹿兒島市との合併派急先鋒たる君が自席に立ちて反對論者を屈服せしめんとし盛に應酬論難中、昂奮のあまり不幸腦充血を發して卒倒した事と思ひ合せて、事こそ異なれ、愛國の志士二人の、符節を合せた如き此の出来事に對して滿腔の同情と敬意を拂はずには居られない。これ以來君の健康兎角勝れざるものありと聞くに至りて益々此の感を深くする。

君は明治五年生。夙に日本法律學校を卒業して臺灣總督府警察官たる事十數年、官を辭して歸郷後、中郡耕地整理組合の組織と同時に副組合長に推され、大正九年四月より工を起し全十一年十二月工事を完了、工費六萬三千三百圓、整理反別九十六町二反歩と云ふ、廣大な整理を爲した。次で大正十年四月中郡宇村々會議員に當選し、爾來其の職を續くる事三期十二年の久しきに及び、終始市との合併を唱へ、之を策して實現せしめた功績は偉とすべきものである。過去に於て産業組合常務理事、其他各種の公職に就きて盡瘁する所多し。

元助役 田村三之助君

鹿兒島市宇宿町



君は明治三年十二月二十八日を以て十年役參加の勇士故萬助氏の長男として宇宿に生れた。明治三十二年兵庫縣巡查を拜命

して警察界に入り、三十四年官を辭して歸郷、三十七年十月中郡宇村役場に奉職して庶務主任となり、四十年九月全村収入役に進み、大正六年十月職を辭して直ちに日本澱粉株式會社に入社し、全十年全社を罷め、全年村會議員に當選し、大正十四年九月宇宿耕地整理組合を組織し、推されて副組合長に就任して其の實務を執つた外、助役當時村長のおき女房役として自治政の運行を圓滑ならしめ、全村海岸數十町歩に亘る不毛地を拂下げ、之を開墾して村有地に編入し、後ち希望者に賣却して益金三千圓を村教育基金に編入し、其の殘部を財産に繰り入れた。其他、郡山小學校の増築、傳染病院の新設櫻島爆發避難民三百人の救助等々に盡瘁し、櫻島村民より感謝狀を贈與せられた。

宇宿耕地整理組合は大正十四年十二月創立起工し、全十五年六月整理を完了、整理反別六十七町六反、工費三萬一千二百二十圓を算する大規模のものであつた。

副子政治君は目下不動貯蓄銀行鹿兒島支店に勤務中。

元村會議員 畜産功勞者 松本啓三君

鹿兒島市鴨池町

生前多年中郡宇村々會議員として村の爲に盡した故太郎氏の次男として、明治十七年當所に呱呱の聲を挙げたのが君である。初め村役場書記に奉職したが、數年にして辭し、始良郡横川村に移りて搾乳業を開始し、居る事五六年にして歸り、現地に於て引續き斯業を經營して今日の繁榮を招來した。

此の間大正六年四月村會議員に當選し、爾來改選毎に選を重ね、鹿兒島市との合併に至りて罷めた。元々君の村會議員出馬の目的は、市との合併を促進實現せしめんが爲めで、従つて機會ある毎に其の必要を力説し、其の促進の氣運醸成に努力した事は茲に説くまでもない。其の他鹿兒島競馬場の設置、中郡耕地整理組合、産業組合の整理等々に關し多大の貢獻を爲した外畜産方面に盡した功勞も亦非常なもので、就中馬は君の尤も好む所なるが爲め、數年前英サラ系及アラブ系二十頭をシンガポールより輸入し中一頭は農林省牧園種馬所に飼育せらるゝに至つた程の名馬であり、君自身も競馬用數頭を飼育する等頗る熱心なる獎勵振りである。日枝神社氏子總代たりし事多年に及ぶ敬神家でもある。初めて村會議員に當選した時の如き一文半錢の費用をも費さなかつたと云ふ程の信望の所有者である。三男四女あり、長男正雄君は實業學校を卒業して家業に従事し、次男信雄君は縣立二中を卒業した。

元村長 八等 原田藏助君

鹿兒島市田上町五六一〇一

明治二十五年近衛騎兵に徴せられ日清戦役中廣島大本營附として玉體守護の大任に當り、歸郷後田上小學校、守山小學校に教鞭を執りしが後ち辭して郡書記に奉じ、明治四十三年五月西武田村助役に選ばれ、在職四期の永きに亘り大正十五年更に村長に推され、昭和三年五月職を退いた。此の間大正八年より昭和三年まで農會長、昭和五年再び農會長に就任し、鹿兒島市編入に至る迄其の職にあり、大正八年廣木産業組合を組織し、設立と共に組合長に就任し、組合の基礎を確立し、組合精神の普及徹底に努め、組合事業略其緒に就くや大正八年組合長を他人に譲り自ら監事となりて今日に至つてゐる。鹿兒島市合併後は團藝支部長、煙草評議員、統計調査員、町會長、衛生副組合長、方面委員等の多數要職を帯び公益の爲めに老軀を擡げて盡瘁を續けてゐる。助役在任中櫻島爆發被害復舊所置に忙殺せられ、武の耕地整理に關與して功績あり、村長としては廣木耕地整理組合を組織して組合長となり三十町歩に亘る整理を完成し、田上縣道の開鑿に苦心し、紫原農藝青年學校敷地問題の解決に當面して圓滿實現を見る等特筆すべき功績多し。

元分會長 七等 山下奎太郎君

鹿兒島市田上町一三三七

明治十七年日本最初の機關部徴募兵の一人として當時の東海鎮守府機關部火夫となつた。(横須賀鎮守府を東海鎮守府と稱したり)。次で二十一年横須賀機關學校に入學を命ぜられ、二十三年三等機關手、二十五年二等機關手、二十七年一等機關手、三十年上等機關兵曹、三十八年兵曹長に任ぜられ、大正二年休職となりて歸郷、全九年官制改正に付機關特務少尉に任官せられた。

元村會議員 縣工務部 七等 吉村與助君

鹿兒島市武町



今日ある所以も亦全く此所に因由するもの外ならない。君は明治九年生れ、夙に博約義塾に學びて業を卒へ、明治二十九年輻重兵第六大隊に入隊、後ち經理部に轉じて二等計手に進み、日露役第二軍に屬して出征し、勳功により勳七等に叙せられて青色桐葉章を賜つた。明治四十一年朝鮮總督府に奉職、在職中判任官登用試験に應試して見事に合格、朝鮮統治に貢獻する事十七ヶ年の長きに及び、大正十三年辭して歸り、翌十四年十一月鹿兒島朝日新聞社に入社して今日に至つた。歸郷後郷村の窮状を見るに忍びず、決然立ちて村會議員に當選し、全八年四月選を重ねて西武田村の市部編入連進に狂奔し、或は時の内務大臣に陳情書を提出し、或は知事、市長、市會議員の了解を求むる等第一線に立ちて盡瘁せし功空しからず昭和九年八月一日遂に本村多年の懸案たりし合併の實現を見るに至り、君の村會議員としての使命を達成した外、武岡公園道路(二間巾)の開通を主唱し、自ら用地の一部を寄贈して範を示し、工費千六百圓の寄附募集に奔走する等多大の寄與を爲した。大正十五年鹿城工場懇話會會長に推され昭和十二年辭した。現に縣聯合工場懇話會副會長の要職にあり鹿兒島朝日新聞社印刷部主任兼工場主任たり。

方面委員 東 森文君

鹿兒島市田上町廣木



自治政の爲めに貢献を續けた功勞者で、廣木産業組合の如き氏の一擧で設立決定を見たと言ふ程の人物であつた。其長男森藏氏は橋代の秀才で、夙に東京帝國大學工科を卒業して土木技師となり、熊本、秋田、福島、千葉の各縣に歷任して勤任技師に陞り、内務省土木局に奉職し昭和十年九月シヤム國顧問に招聘せられて赴任した森文君は其の令弟、明治二十六年を以て其家に生る。大正二年徵兵に合格して四十五聯隊に服役して歸り、農事小組長八ヶ年、村會議員三期、統計調査員八ヶ年等を経て昭和十二年九月縣方面委員を囑託せられて今日に至つた。昭和五年託兒所を開設して農繁期に備へ、各家庭の臺所改善に着手し、浴場、竈の改良を部落六十餘戸に勵行せしめ、宅地内の雜木を整理せしめて代るに柑橘を以てし、斯くして柑橘栽培を奨勵せし爲め現在當部落の柑橘は約五町歩に達し、尙ほ年々増加の一途を辿りつつある。村會議員在職中、紫原、伊佐野兩線の道路開通に盡瘁し、村よりの補助金を積立てて消費せず部落民の勞力奉仕によりて之れを完成せしむる等舉げ來れば功績の特記すべきものが多い。嗣子森榮君は師範學校在學中、同君は書に堪能で展覽會に出品して入賞せざるなしと聞く。

一六七四

耕地整理 七等 村場嘉之助君

鹿兒島市田上町一八三六

明治三十三年歩兵第四十五聯隊に入隊、全三十六年滿期除隊、全三十七年日露戦役勃發と同時に動員下令、第二軍に屬して出征し、終始軍旗の下に行動して各地に戦功を樹て、就中奉天の大戦に於ては君の屬する中隊は半數死傷し當時下士なりし君は小隊長の代理として指揮の任に當り克く其の職責を全ふした功績は偉大なるものであつた。爲めに軍曹に進められ、勳七等青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を下賜せられた。

凱旋歸郷後、田上耕地整理組合の設立を見るや、推されて全副組合長に就任し、組合の實務を執りて事業の遂行を助け、工費二萬二千圓と約一ヶ年の日子を費し、總反別五十四町歩の整理を完成した。時に大正六年なり。元來本組合は大正二年に設置起工する筈なりしも、櫻島爆發によりて中止の止むなきに立至り、大正五年初めて着手を見たもので、其の結果從來の温田は一朝にして麥作並に蔬菜の植栽に適するに至り、自然本村民の經濟状態を改善せしむるに役立つた事は思の外であつた。大正九年縣耕地課に職を奉じ縣下各地に亘りて耕地整理の指導監督に當り、昭和五年縣耕地協會に轉勤して今日に至つてゐる。全七年第二回田上耕地整理組合の設立を見るや再度副組合長に推されて其の職責を果した。大弓は二段の腕前である。長男正義君は市電氣課に勤務中。

村社 建部神社

鹿兒島市武町

古老口碑の傳ふる所に依れば、近江國瀬田に建部神社鎮座し、大名持命、倭武命の二柱を奉祀する由なり。中古平清盛の胤子國領守護職たるの祈願有り、御感あり、大隅國小根占郷主郷を拜命、家族は田代郷、佐田郷を主領するに及びて小根占を領するを根占氏、田代、佐多を領するを田代氏佐多氏と稱す。此の時より神社の名號を遵奉し平姓を建部と改む。根占家の二男建部山城守後に小根占郷に建部神社を建立、其後當武村の内高麗町に奉遷し、更に現所に遷座せり。年月不詳。社家鳥集君は明治四十一年二十一歳にして稻荷神社に奉じ大正三年當社に轉じて今日に及べり。其間本殿の修理より拜殿の改築を初めとして大正十二年基本金を募集し、昭和三年參道を石階に改め、境内なる村有地を寄進せしめて神域の淨化整備を行ふ等、經營頗る努めし外、社會教化に思を潜め、昭和六年今上陛下初めて鹿兒島に幸あらせ給ふや君は謹んで玉体の御安泰を祈願すると共に千載一遇の光榮に浴する喜び難く、滿腔の赤誠を込めて薩摩琵琶歌「奉迎歌」一編を謹作し、斯道の大家たる縣立一高女校囑託萩原秋彦氏に囑して作譜し、鹿兒島朝日新聞社の擴聲機を通じて市民に放送を行ひ、行幸記念日當日は熊本放送局より萩原氏により演奏を放送し、君自ら其の梗概を説明した。君は夙に國文學に精通して和歌、長歌は尤も其の得意とする所である彼の大伴家持作の喻族歌(やからをさとす歌)の如きは君の力によりて始めて世に顯れたと云つて過言であるまい。

一六七五

軍事功勞者 功七等

岩崎彌八郎君

鹿兒島市武町一七八七



喉元過ぎれば熱さを忘れ勝ちな吾々日本人も目下の日支事變に直面して先づ思ひ起こされるのは、日本の存在を世界列國に知らしめた日清戦争と、そして一躍日本を列強の間に伍せしむるに役立つた日露戦争に従軍して、君國の爲めに尊き生命を捧げ、死を鴻毛の輕きに比して鬼神を泣かしむるが如き忠勇無雙の働きを爲した先輩の精忠である。我が山崎君の如きも其の代表的一人である事は以下述べる所によりて知られるであらう。

明治三十年野戦砲兵第六聯隊に入營、三十二年十二月伍長に進みて歸休、日露戦争勃發と共に應召して原隊第四中隊に編入せられ、三十七年六月長崎港出帆、張家屯上陸以來蓋平、大石橋、遼陽、沙河、奉天の各戦闘に參加し、奉天大會戰中毛家屯北方畑地に於て激戦中敵歩兵の包圍攻撃を受け我が隊伍稍々動亂せんとせし時當時小隊長代理たりし君は沈着其の隊を指揮し克く中隊長の命を守りて進退せしめ、他の小隊に比して損害極めて少きを蒙り、砲兵第六聯隊長より賞状を授けられた。凱旋歸郷後の四十年一月戦功により勳七等青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を下賜せられた。明治四十年鹿兒島聯隊區司令部に奉職し、大正三年職を辭し、全八年市役所兵事課に勤務、全十四年八月兵事主任に進み、昭和八年辭して家庭の人となつたが、退職に際し特別賞與金貳百圓を授けられた。以て其の手腕と恪勤の程を察するに足る。

堀之内市之助君

鹿兒島市田上町一八三〇

人間一代を通じて一つの職業に終始する事は當然の事の如くして却て稀なものである。我が堀之内君の如きは其の稀な人の中の一人である。

君は明治十三年四月十八日を以て舊西武田村田上に生れた。二十四歳の時から煙草の製造に従事し、後年煙草専賣法の實施を見るに及び鹿兒島煙草専賣局工場に採用せられ、爾來精勵格勤して工場長に昇進し、昭和十年十一月辭して家庭の人となつた。専賣局奉職中君は作業能率の増進に意を用ひ、從來巻煙草の紙が綻びて能率上らず且つ製品に遺憾の點多きを見、百方研究を重ねた結果遂にグリセリンの塗布によりて綻びを防止する方法を發見すると共に、一度に口紙五百枚づつ切斷せし機械に工夫を加へて十倍五千枚の切斷を可能ならしめ、兩者を直ちに全國各工場に採用せらるるに至りし如き、一に其の職務に熱心なるの致す所、大正十一年専賣局長野中清氏より衆の模範なりとして表彰せられ、名譽賞牌並に金五千圓を下附せられた。退職の年田上町上落戸主會長に推されて晩年は郷土の爲めに捧げてゐる。過る櫻島爆發當時は本區青年會長として避難民救助のたき出しから、死者の埋葬等に當り、寢食を忘れて盡瘁したと云ふ。昭和三年今上陛下御即位御大典に際し地方賜饌の光榮に浴した。長男一男君は縣立二中、大連電信電話練習所を卒業して大連電信局に奉職中。

一六七六

大迫正市君

衛生組合長 方面委員

鹿兒島市西別府三七三八

西別府有力者として將又功勞者として見落してならぬのが君の名である。農事小組合長を公職の振り出しに、大正六年四月西武田村會議員に當選し、爾來昭和八年四月に至るまで四期十六年間其の職を續け、戸主會長二十ヶ年の現在に及び、昭和九年市方面委員を囑託せられて等しく今日に至つてゐる。去る昭和七年西別府耕地整理組合の組織を見るや、推されて副會長の要職に座し組合の實務を執り組合長(村長)を助けて翌年四月面積三町三段の整理を竣工せしめた。爲めに地價高騰して倍額を示し、且つ本町民の生命とする蔬菜園藝の上に著しき好果を齎す等大の効果を收むるを得た。又村會議員としては特に道路と橋梁の改修に意を注ぎ、從來牛馬すら幸じて通過した耕作道路に人車を通せしめ、五ヶ別府に通ずる村道八百米並に本村伊集院間縣道の開鑿に努力して之を實現せしむる等、交通上に遺した功績は頗る大なるものがあつた。過去二十數年來の懸案たりし村社諏訪神社の改築決行を主唱し、昭和十一年遂に其の落成を見るに至つた如き、君の力其大に居る外、西武田産業組合設立以來の理事として今日尙ほ盡瘁しつゝある。農會總代をも兼任せり。家庭は夫人との間に四男あり、長男和君は豫備工兵准尉たり。

榎園金助君

鹿兒島市田上町

君は明治三十七年徴せられて熊本工兵第六大隊に入營、翌三十八年日露戦争に従軍出征、同年三月昌圖に進撃、後法庫門に止まりて滿洲守備に任じて歸り、功により勳八等旭日章を下賜せられた。

大正七年五月、田上、前、下の三組合を合併して西武田産業組合の創立を見るや、君は直ちに推されて常務理事に就任し、同十二年更に組合長に擧げられ、爾來銳意組合の繁榮を策して遂に今日の隆昌を招來し、組合員の信望を一身に集めてゐる。本組合は保證責任にして信用、販賣、購買、利用の各營業科目を備へ、創立當時組合員僅に二百餘名に過ぎざりしもの現在七百十七名の多きを算し、組合員の貯金の如き二萬圓より二十七萬六千圓の多額に上り、購買高も亦一萬七千圓より七萬七千圓への飛躍を示し、全く面目を一新するに至つた。去る昭和九年度より更に舊西武田村内に生産せらるる茶を原料として製茶業を開始した。今日本組合が斯かる大發展を爲した最大の源因として擧げたいのは昭和三年婦人會を設立して組合精神の理解に努め、其の利用を奨励した事で、其結果數年前五ヶ年二十萬圓貯金計畫を樹立せしに三年ならずして早くも二十三萬圓に達し、本年更に三十萬圓貯金の計畫中と聞く。昭和十三年縣下優良組合の一として産業組合中央會鹿兒島支會より表彰せらるるに至つた事は、一に君の功勞に歸すべきものであらう。

川畑暎助君

鹿兒島市田上町五一一七

君が主宰してゐる廣木産業組合は、大正四年五月の創立にかかり、最初は信用部のみであつたが、翌五年購買部を新設し、後必要に應じて販賣、利用の各部を附設して保證責任となした。現在組合員二百二十七名、出資口數四百六十二口、拂込金總額四千六百二十圓に達してゐる。

君は大正九年以來組合長に推され、約二十年の今日迄其の職を續け、一意専心之れが經營に没頭し、自己の天職として其の繁榮を策してゐる。本組合加入者の居住區域は狭小なる爲め、組合中心の理想出現には極めて便利よく、例へば敬老會若しくは組合員の家族慰安會を初めとして、苟も有利有効と信する萬般の施設と行事は、悉く組合主宰として之を敢行し、眞に組合精神の實現實行に邁進してゐる如き、他所の見る目も美はしきかぎりである。近き將來利用部に於て醫療設備を爲す豫定ありと聞く、若し眞なりとすれば洵に時宜を得たる措置であらう。君は明治十年を以て當所に生れ、同三十年歩兵第四十五聯隊に入隊、日露の役豫備召集に應じて師團衛生隊に編入せられ、三十七年六月出征、三十九年二月凱旋歸郷した。戦功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜つた。日支事變勃發以來一段の緊張振りを以て銃後國民の覺悟を固め組合員を指導激勵して雄々しく立働く姿は正に崇高其のもの感がある。

宮脇己之助君

方面委員 正八位 鹿兒島市田上町二九一八



若くして四方に官遊し、其の晩節を郷土愛の實踐にいそしみつゝある君は明治十八年を以て舊西武田村田上に生れた。縣立第一中學を経て東京帝國大學農科に學び、卒業後一年志願兵役に服して工兵少尉に任官、滿期除隊後大阪大林區署及京都大林區署に奉職し、大正七年官を辭して三菱商事株式會社に入社、北海道、樺太、シベリヤの各地に勤務し、大正八年外務、陸軍兩省の囑託を受けてシベリヤの森林調査に従事し、三菱商事名古屋支店請を最後に、幾多の功績を留めて昭和四年辭して歸つた。

歸郷後率先して田上耕地整理組合を組織し、第二回目の整理を完成して現在見るが如き美田となした外、從來稍々もすれば氾濫して土砂を流出し、水害後地味の復舊に空しく十年の歳月を努力せねばならない田上川治水工事の急務を痛感し、自ら縣當局に狂奔した結果、昭和十二年度より向ふ三ヶ年の繼續事業とし、工費金八萬圓を投じて起工する事となつた。等々郷土百萬年の大計樹立に努力して今日に至つてゐる。流石に着眼の高邁を窺はれるではないか。更に昭和九年縣方面委員を囑託せられ社會事業にも善き隣人としての責務を果しつゝある。令夫人も亦田上婦人會々長に推され、夫君と共に努力を競つてゐる。

一六七七

元村會議員 町會議員 八等

宮下仙次郎君

鹿兒島市西別府町



明治十三年八月二十一日を以て先考仙之助氏の長男に生れた君は、全三十四年熊本編重兵第六大隊に入隊、日露戦役勃發するや全三十七年五月應召入隊、架橋從列に屬して三十七年六月出征、清國張家屯に上陸して開原に進撃、三十九年三月凱旋歸郷した。戦功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を下賜せられ一時金貳百圓を附與せられた。

大正二年區の附屬員に擧げられて百方盡瘁に任じ、昭和八年四月區民の推す所となりて舊西武田村々會議員に當選、翌九年鹿兒島市との合併に際し、最後の村會議員として其の職責を果し、圓滿裡に合併を見るに至つた。農會總代、衛生組合副組合長等の職に在りて努力した事もある。

西武田産業組合の設立を見るや、君は組合評定員に推され、昭和九年全理事に擧げられ、爾來榎園組合長を助けて組合の繁榮を招來し、遂に昭和十三年産業組合中央會鹿兒島支會より優良組合として表彰せらるるに至つた。其他昭和十二年西別府町々會長に就任して其の現職にあり、村社諏訪神社改築に際しては會計並に工事監督として親しく其の事に當り、非常の苦心を拂つて之を完成せしめた。夫人との間に一男四女あり、令息國徳君は現に鹿兒島驛に勤務中。

元郡長 正六位 元村長 第五等

窪田武洪君

鹿兒島市川上町

慶應元年五月を以て舊鹿兒島郡吉野村川上に生る。夙に警察界に身を投じて拮据勉勵、明治三十年警視廳警部に進み、全三十七年轉じて岐阜市岐阜署長に補せられ、居る事四年頗る其職務に努む。明治四十一年岐阜縣不破郡長に任ぜられ七ヶ年間郡政を掌りて令名を馳せぬ。次で大正四年岐阜市助役に擧げられ、一期間克く市長を助け、具さに市政の改善向上を圖り以て市民の好意に酬ゆる所ありき。大正八年辭して故山に歸臥し悠々、自適の生活に入りしが、大正十一年五月郷黨の推挽難く吉野村々長に就任在職三期の永きに亘り、吉野村が鹿兒島市と合併するに至りて辭しぬ。時に昭和九年なりき。其間、郡内に率先して青年學校を設立し、川上尋常小學校に高等科を併置せし事の如き治績中の治績と謂ふべし。彼の南洲翁の開墾に屬する地は當時鹿兒島の人黒松某の所有する所なりしが、君は懇切丁寧に黒松氏に説き、之れを吉野村に寄附せしめて公園と爲し、寺山なる名稱を附し、道路を新設して訪客の便を計り、以て村内に一名勝を附加すると共に、偉人の遺跡を不朽に留むる一石二鳥の妙計に出でたる如き眞に君を待ちて初めて實現せられたるものと言ふべし。現に川上尋常小學校後援會長の職に在りて教育の改善に努力を續け居れり。家に二男六女あり。

一六八〇

元村會議員 伊地知彌吉君

鹿兒島市吉野町中別府

君の先考謙藏氏は丁丑役薩軍に投じて肥後に轉戦し、田原坂の激戦に負傷した勇士である君は其の長男、明治十六年を以て中別府に生れた。

二十四歳のまだ青年時代、早くも村會議員に當選して村政を議したといふから、其の人物の程も察せられるであらう。而も爾來選を重ぬる事六期(中途二期中斷)の久しきに及び、其の間土木委員多年、常設學務委員十五六ヶ年、本村教育の改善に資する所多大なるものあり、大正十四年郡教育會長より感謝狀を贈られた。

其頃村税の滞納者多く之れが整理員として役場書記に奉職する事數年に及び、當局と心を協せて苦心整理に當り、成績極めて良好なるを得た。昭和二年陸軍演習場設置に際し、君は縣當局の委嘱に對し決然として之に應じ、一時の毀譽を顧ずして官民の間に折衝し、數句の間文字其のまゝ寢食を忘れて晝夜奔走を續け、遂に圓滿調停に導いた功績は偉大で、土地買収完了後師團當局より感謝狀を贈られ、又吉野無電局の設立に際し、其の用地買収に盡力せし所も少くなかつた。蒲生街道(縣道)開墾に當り村内紛擾の際も之れが調停に乗り出して圓滿解決を見るに至つたのも君の力其の多に居ると云へる。之れを要するに一身一家の利益を後にし、常に大所高所に立ちて事に當り萬事を所理するの君の持ち前である。長男巖君は鹿兒島高農を卒業して岩手縣農林技手に奉職中日支事變勃發により中支に出動した。他に五男四女がある。

塚田十次郎君

鹿兒島市吉野町實方

明治二十六年から昭和四年に至る三十六年間の生涯を鐵道從業員に捧げ來つた君の如きは、我國鐵道交通史に其の名を留むべき一人と言つてよからう。

十九歳の時開通直後の山陽鐵道會社に入社して交通運輸の第一線に活躍する事多年、後ち轉じて九州鐵道、阪鶴鐵道等に奉職し、明治三十七年十二月陸軍鐵道大隊に職を奉じ、日露戦役中安東縣、奉天間の鐵道事務を執り、兩國の平和克復後引續き南滿鐵道株式會社に入り、鶏冠山驛長を最後として辭職歸郷、明治四十三年再び鐵道院に奉職し、神戸管理局區内湯田驛長を最初に、後ち九州管理局に轉じ大隅、横川、伊集院驛長を経、大口驛長を最後に昭和四年官を辭して故山に入つた。當時郷村吉野は鹿兒島市との合併問題に關し、賛否兩論鼎沸のさ中で、實方區より推されて村會議員たらんとするや、君は豫め區民の諒解を求め、例へ實方區に不利なる合併條件にありても吉野村全體として有利なりと思考せし場合は、躊躇なく賛成すべしとの同意を得し如き、君の全貌を髣髴せしむるものがあると共に鹿兒島市との合併に際し、如何に多くの役割を演じたかを窺ふに足るであらう現に實方道路改修に盡瘁中。亡父十右衛門氏は明治十年小隊長として蕙軍に従ひ、三月二十六日八代附近の戦に於て左腕に負傷した勇士で、後ち吉野村政に參畫する事多年、昭和四年二月八十二歳の高齡を以て歿した。

故 四枝勇之助君

鹿兒島市吉野町帶迫

君は安政五年十二月を以て舊吉野村下田に生る。先考伊兵衛氏の嫡男なり。明治十年丁丑戦役に薩軍に従ひ肥後田原坂の激戦に参加して右手中指を失へり。幼時貧困の中に人と爲りて身志を鍛錬し、居常嚴格周密些事と雖も苟もせず身を持する事儉素、然も子女に對しては物心共に寛宜しきを待たり。四枝家が舊吉野村内屈指の富豪たるに至れるもの一に君が勤儉力行の賜ものたらすんばあらず。

吉野産業組合の設立を見るや、直ちに推されて初代組合長に就任し、拮据經營、具さに組合の繁榮を計り遂に組合今日あるの基礎を確立せり。由來帶迫區は飲料水乏しく住民は日常の生活に窮し、植物野菜の類爲めに枯死するの状を慨き、立ちて水道敷設を提唱し、親友黒松某が水田開墾用水とせる貯水池を特に請ひて貰ひ受け之れを水源地として帶迫水道の敷設を實現せしめし功績は身後百世に留むべきものならん。其の日露戦役後數百金を投じて牝馬を拂ひ下げ、他日露戦役後數百金を投じて牝馬を拂ひ下げ、其の産める子を本願寺に寄贈し或は神社境内を擴張する等社會公共の爲めに圖る所多し。下田より帶迫に移住せしは子女の黨化を慮りてなりと言ふ。教育に意を注ぐ斯の如し。昭和十一年二月二十逝く享年七十九。嗣子國彦君は昭和七年師範學校を卒業して川上校に奉職せり。

元助役 北原豊熊君

鹿兒島市川上町花畑



大正七年鹿兒島高等農林學校を卒業した後農商務省に奉職する事一ヶ年、辭して英領ボルネオ島に渡航し、其雄志を伸ばさんとしたが、家庭の事情上僅々一ヶ年滞在の後ち歸國の止むなきに至つた。大正九年歸國勿々二十七歳の壯歳を以て舊吉野村助役に選ばれ、昭和九年に至る十五ヶ年間其職に盡し、歴代の村長を助けて村治に専念し、就中道路改修と産業の開発に働いた君の力は非常なもので、君が助役就任當時に在りては村内自動車を通ずる道と言つては唯縣道一筋に過ぎなかつたのが、昭和九年迄には村内各部落に通ずる主要道路にして自動車を通ぜざるもの皆無の狀態にまで改善せられた。それと同時に從來一雨降れば必ず落ちるものと極まつてゐた村内の橋といふ橋を悉く落ちぬ橋に架け換へ、交通の樂易を圖つた功績は、事實上君の功績であり、又吉野無電局、陸軍演習場用地買収に際しては、所謂粉砕心の苦勞を嘗め、殊に陸軍演習場用地買収の場合の如きは生命の危険をすら感じた程であつたと聞く。昭和九年村長代理たる事數ヶ月、其の間鹿兒島市との合併問題に奔走善所して遂に之を圓滿裡に解決した手腕と勞苦は、舊吉野村民の腦裏に今尚ほ新なる所である。

因に令弟靜雄君は醫學博士の學位を獲得して京都帝國大學醫學部助教授に任ぜられたが、惜しむべし二十九歳の若さで早世した。

産業組合長 田尻榮助君



鹿兒島市吉野町

君は明治十三年を以て先考五左衛門氏の長男に吉野に生る。三十五年本縣師範學校を卒業して谷山小學校訓導に赴任し、同

榎草耕作組合長 林徳次郎君



鹿兒島市岡之原町

福を轉じて福となすのも、或は福を轉じて禍となすのも、要は其人々の努力如何に存する。君の如きは正に禍を轉じて見事に福となし得た一人である。以下其の然る所以を述ぶる事にしよう。

方面委員 吉元喜太郎君

鹿兒島市下町一七八四

人間一代の仕事の中で、自分の子女を立派な人間に教育し、國の爲め世の爲めに働かせる事程有意義な、そして大事な事はない。此の事は口でこそ甚だたやすく言へるが其の實頗る困難な仕事である事は、これに成功した人が甚だ少い事を以て見ても知られるではないか。吉元君は此の難事を見事に成し遂げた人の一人である。

明治三十年看守試験に合格して鹿兒島刑務所に奉職、十四ヶ年餘の勤務を経て明治四十四年退官した。全年直ちに吉野村役場に入りて學務係となり、在職八年にして辭し、大正七年五月下田産業組合を創設して組合長に推され、爾來其職に在る事十ヶ年、又村内産業聯合會會長として共同水車事業の經營に當る事數年、其の間六組合中の三組合没落するに至りて聯合會を解散した。又村會議員に當選する事二回、現に方面委員として社會の改善向上の爲めに晩年の努力を捧げてゐる。

家に七男一女あり、長男家彦君は海軍少佐として軍艦陸奥の副砲術長たりしが昭和十三年砲術の權威者として海軍兵學校教官に轉じ、次男國彦君は臺北醫學專門學校を卒業して滿鐵撫順病院に勤務し、三男爲彦君は家に在りて農耕にいそしみ、四男生彦君は臺北醫學專門學校を卒業、五男昌彦君は鹿兒島商業を卒業して滿洲國官吏に奉職し、六男隆彦君は加治木工業學校を出でて太刀洗飛行聯隊に勤務中。

元船長 田尻盛秀君

鹿兒島市川上町川上



鹿兒島商船學校出身者中、甲種船長たりし最初の人、冬期樟太航路に一新機軸を開き、碎氷假裝々置を施せし人等々の一人にして多くの記録を保持せる君は明治廿四年を以て吉野村川上に生れた。大正三年三月第四期生として鹿兒島商船學校を卒業し、母校練習船錦丸乗組みより轉じて逕信省所有船小笠原丸に乗組み、後再び母校船霧島丸に移り、大正十年全船々長に進められて學生の指導に任じた。全十二年三月全校を辭して神戸川崎汽船に奉職し、冬期に於ける樟太航路の通航を可能ならしめ、田尻の名を全航路の存続する限り不朽のものたらしめ、爲に全汽船會社は冬期間も王子製紙の荷物運送を爲し得るに至つた。即ち君は全航路が冬期濃霧なると、結氷を破壊すべき碎氷船を使用せざる可らざるに鑑み、先づ冬期に於ける潮流の關係を限なく調査し、普通船舶に碎氷装置を假設して結氷中の航行を可能ならしむるに至つたもので、碎氷装置を視察する爲め當時の樟太航路長官縣忍氏は全航を訪ねたと云ふ。昭和九年川崎汽船を辭して横濱大村組運送店に入り東京支店長の要職に應ずると共に自らも亦田尻運送店を開業するに至り、前途頗る光明に輝いたが、故國に淋しく君を待つ老父に孝養を盡す爲め、總べてを犠牲にして昭和十一年十一月故山に歸臥した。

元村會議員 第八等 小坂元七太郎君

鹿兒島市岡之原町花野



君は日清、日露の兩役に従軍して武勳を顯した勇士であり、其嗣子愛次郎君も亦日支事變に出動して目下各地に轉戦中と云ふ名譽の家である。明治二十一年徵せられて熊本歩兵第二十三聯隊に入隊、日清戰役勃發と共に應召出征し、大連より孤山の戰鬪を経て威海衛に向ひ、同地を攻略して全二十九年目出度く凱旋次で日露の役再び後備召集に應じ三十八年一月原隊を出發して二月某日大連に上陸し、第三師團長の指揮下に入り、滿洲軍總豫備隊に加へられ、三月張家屯の戦に参加して功あり、凱旋後勳八等に叙せられ白色桐葉章を下賜せられた。公職方面に於ては區長六ヶ年を経て明治卅六年吉野村々會議員に選ばれ、爾來其職を續くる事四期十六年、村勢の發揚に盡す所多大なるものがあつた。君は農事熱心家として郷黨の間に定評あり、先代より譲り受けた一反八畝歩の田畑を資本に、勤儉力行して今日の産を作り上げた成功者である。嗣子愛次郎君は歩兵第四十五聯隊に入營して千葉歩兵學校附となり、後ち再び四十五聯隊機關銃隊附に復歸し、全隊に於て射撃の神様と迄噂される名手で、在隊中數回の表彰を受けた程であるが、除隊して吉野青年學校教師奉職中日支事變勃發と共に召集せられ、竹下部隊、成友隊の小隊長として出征活躍中。(寫眞は小坂元君父子)

元村會議員 根元矢一君

鹿兒島市吉野町高蒲谷



當家は遠く藤原氏に家系を發する名門である。先代故盛一氏は明治十年戰役の勃發と共に南洲先生の揮下に投じ、奮戦して熊本至り、田原坂の激戰に於て指に負傷したといふ勇士で、六十二歳の高齡を以て歿した。生前高蒲谷の顧問として各方面に盡瘁せらざるなく、區内の長老として、衆望を一身に集めてゐた。君は明治二年盛一氏の長男に生る。三十九歳の時嚴父の死に會ひ、翌年から亡父生前の役目(顧問)を引受けて今日迄其の職に盡してゐる外村會議員に當選する事五期の久しきに及び、高蒲谷に於ける長老としても亦亡父の善き後繼者となつた。村會議員に在る中は委員に擧げられて吉野無線局用地の買収に當り村民と當局との間に斡旋奔走して圓滿裡に其の目的を達した事と道路委員として、村内各地に通ずる道路の開鑿改修に努力し、今日見るが如き状態を出現せしめた事は、功績中と言はねばならぬ。東高蒲谷に公會堂の建設を主唱し、之を實現に導いたのも亦君であつた。夫人との間に嗣子なく令弟盛重君を養子とした。全君は三十八年第四十五聯隊に入隊し、滿洲守備に任ずる事一年にして歸つた。舊村政時代農會總代として公事に盡した。矢一氏は飼鳥と狩獵を趣味としてゐる。

元村會議員 有水金七君

鹿兒島市川上町花柳

明治三十四五年頃小學校教員に職を奉じ、在職五六年にして辭し、全四十年志を轉じて川内大林區署に奉職し、森林主事に任ぜられた。爾來精勵恪勤を續けて本縣林業の進展開發に努力し、大正八年鹿兒島大林區署に轉じ、屬官に任官せられ、大正十四年官を罷めて故山に歸臥した。

大正十四年故郷に歸へると同時に、待つてゐた様に村會議員に推されて當選し、以來改選毎に必ず當選して昭和九年八月吉野村が鹿兒島市と合併する迄村會議員在職を續け、合併に少からざる功績があつた。村政當時吉野養蠶實行組合理事として十年間其の普及發達に盡し、後年部落單位の組合に改組せらるるや組合長に擧げられ依然盡瘁を續けて今日に至つてゐる。又青年學校の獨立に力を注ぎ、自ら縣内各地を廻りて青年學校を視察し、短を棄て長を採り、土地の買収から校舍建築の工事監督に至るまで自ら之に當り、縣下に異色ある吉野園藝青年學校を出現せし功績は、本青年學校の存續する限り永久不滅の功績として残るであらう。昭和九年方面委員を囑託せられ、頻りに盡瘁に任じてゐる。家庭は夫人との間に五男あり。長崎益夫君は縣廳文書課に勤務し、次男恩君は家庭に在りて實業に従ひ、三男實君は市來農藝學校を卒業後大根占村神之川小學校に教鞭を執り、四男正人君は縣立二中四學年に五男力君は鹿兒島商業に夫々在學中。

社學校後援會長 原口鶴翁君

鹿兒島市吉野町平松

郷社平松神社は元龍水山心丘寺と稱し、島津家第十六代の太守義久公の建立する所なり、寺は鹿兒島福昌寺の末寺にして曹洞宗に屬し抱巖龍強和尚を開基とせり。然るに明治三年寺號廢せらるるに及び平松神社と改め、第十五代陸奥守貴久公の第三子貴久公を祭神として祀るに至り。

貴久公は貴久子の庶腹にして第三子たり。資性勇武調達、天文の頃より薩、隅、日、三州を馳驅して諸豪族の島津氏に順はざる者を平定し天正十四年家兄義久公に隨ひ、大軍を指揮して豊後なる大友氏を討ち策功績赫々たり。公薨するや武の神として崇められ、又安産の神、腹痛の神として尊信する者多く、妊婦の難産と腹痛には靈驗いやちこなりとして四時賽者を絶たず大正十四年十一月二十八日第一皇女昭宮御降誕の初、時の女官長島津治子女史より鹿兒島市大龍校に御依頼あり、當社に御安産祈願祭を執行せられたり。

原口君は明治二十三年生、大正二年四月平松神社社掌に任ぜられ九年九月社司を拜命して今日に至り、龍水小學校後援會長たる事十年の今日に及べる外、昭和四年四月吉野村會議員に當選、學務委員を兼ねて各々盡瘁する所あり、現に衛生組長、方面委員として特に精神的救済に力を注ぎ居れり。平松神社の昇格に功ありしは言ふを俟たず。

社掌 久米護吉君

鹿兒島市吉野町磯



當社は俗に磯天神と稱し、菅公を奉祀す。舊記の傳ふる所によれば貞保三年太守島津光久公の建立に係り、御神体なる菅公

像は太守自身の作なりと言ふ。爾來歴代の藩主崇敬措かず、種々寄進する所あり、現社殿は天保五年燒失後、時の藩主齊興公特別の恩召を以て手元金を割きて造營せし事棟札に明記しあり。歴代の藩主本社を學問の神として尊信せし爲め、下亦之れに倣ひ、鹿兒島市内は言ふに及ばず、縣内の學者學生の崇敬する者頗る多く、我國農學の權威者玉利喜造博士母堂の如き、文久三年其の良人に死別せし後、困窮の裡に三男二女の教養を女手に引受け、偏に當天滿宮の加護を祈り、常に三子に向ひ刻苦精勵して榮達す可きを諭し、自ら肉食、梅干を斷ちて兒童將來の大成を禱り、毎月二十五日必ず三兒を伴ひて當社に參詣したり。宜なる哉長男親賢氏は正四位海軍大佐に、次男喜造氏は從四位農學博士に、三男一誠氏亦從四位に叙せられて技師に任ぜり。本社大祭は二月、九月、十一月廿五日。六月燈七月廿五日なり。

現社掌久米君は西櫻島縣社月讀神社々司故國生護彦氏の三男、明治三十二年出生。昭和五年當菅原神社々掌を拜して今日に至り、此の間神殿の改築、社務所の新築、神域の擴張を完成して現在の美觀を呈せしめ、神威を増すと共に、境内に井戸を穿ちて水鉢に引水する等功績の顯著なるものがある。

特務少尉 緒方藤吉君

鹿兒島市吉野町磯



何れの職務に従事しても、平素精勵格闘して、愈らず、一旦大事至るや身命を賭して之れに赴く勇氣ある人であるならば必ず成功を贏ち得ず成功を贏ち得るであらう事は言ふまでもない。緒方君の如き正に其の模範的な一人である。君は明治十三年十二月十五日を以て吉野村に生る。三十三年佐世保海兵團に入團し、爾來軍務に服して精勵三十八年三等兵曹に進み、大正八年兵曹長に進級、昭和二年特務少尉に任ぜられ、全三年豫備役に編入せられて歸郷した。此の間北清事變に際しては陸戰隊に編入せられて奮闘し、論功賞として金拾圓を下賜せられ、日露戰役に在りては驅逐艦に乘組み、明治三十七年二月八日の第一回旅順港夜襲に於て、倭艦白雲、朝潮、曉の三艦と共に港内より突撃し來れる敵の驅逐艦九隻と會戦し、遂に之を撃退し、司令官淺井正次郎氏は聯合艦隊司令官東郷大將より感狀を附與せられた。後更に幾多の戰闘に参加して死生の間を往來し、最後對馬海峡の大海戰に加はりて大功あり、勳七等に叙せられて青色桐葉章を賜つた。去る昭和十年十一月陸軍特別大演習並に地方行幸に際し、君も亦賜儀の光榮に浴し、玉座にま近き最前列に席を賜り、畏くも龍顏に咫尺する事を得た。これも畢竟日露戰役に於ける君の功勞の結果である。趣味は漁、獵

骨董

元驛長 杉山四作君

鹿兒島市吉野町磯

杉山家は元尾州藩士、君は明治十二年を以て東京市赤坂區丹後町の家に生る。

明治三十四年二十三才にして初めて東京市の支關として開えた新橋驛に奉職したが、鐵道に終始するに至つたキツカケで、當時天下に籍甚した高橋驛長に認められて其の愛顧を受け爲めに新橋驛に引留められて多少出世の機を誤まられた氣味があつたと聞く。新橋驛から東京驛に移り、大正十二年初めて鹿兒島運輸事務所勤務に轉じ、饅頭石驛長を最後として昭和八年職を辭した。鐵道界に在る事二十有九ケ年、我が國の交通運輸に貢献した功績の少くない事は言ふ迄もない。鐵道界引退後昭和七年七月磯の景勝の地を選びて休憩所錦波を開店し、之れが經營に餘生を樂しむ傍ら磯區長に就任して頗る功績があつた。例へば從來兎角不一致で納税の如きも頗る不成績であつたが、區長就任後君自ら勞を厭はずして戸毎に徴税し、屢々歩を運びて督促に努めた結果、今日に於ては面目を改め成績良好なるものとなつた如き其の一の顯れに外ならない。鹿兒島市との合併速進にも功勞があつた。嗣子正君は吳海軍守鎮府建築部に勤務中。

甲斐猛一君

鹿兒島市吉野町磯



織田信長は捕狭間の冒險に成功して武名を天下に布き、義經は壇之浦の冒險によつて平氏の討伐に成功した如く古來成功者の記録であつた。我が甲斐君の今日ある所以も亦或意味に於て冒險の結果と言ひ得るのであるまいか。

君は明治十八年十月を以て宮崎縣延岡市に生る。延岡中學第一期生として同校を卒業し、明治四十年東京高等工業學校(工業大學前身)電氣科を出づると同時に三井礦山部に採用せられて三池炭坑に奉職、六ヶ年の勤務を経て北海道夕張炭坑に轉じ、大正十年登川炭坑勤務を命ぜられ、全坑々長に昇進し昭和六年途を後進に開いて勇退し、當市に來住して今日に至つた。君が登川炭坑に在勤當時、坑の命脈正に盡きんとせしを以て三千尺の下層に在る炭層の發掘を計畫し、五千尺のクロスカットを開鑿に成功し、爲めに五十年の命脈を延長した功績は偉大であつた。此のクロスカットの開鑿は三萬尺の距離を隔て、測量作業に従事するの必要あり、一萬圓以上の測量費を要するを以て、初め之を會社に請求せしめ許されず、從來使用し來りし不十分なる測量機を以て此の冒險を敢行し、遂に克く初一念を貫徹し得た喜びは恐らく君の外に知る人はあるまい。電氣科出身の君が採礦科出の人も及ばぬ難業に成功したのも畢竟は冒險の賜ものと言つてよからう。謡曲、大司を趣味とす。

元通信書記 第七位
方面委員 第八等

吉村新右衛門 君

鹿兒島市吉野町



明治三十一年
鹿兒島郵便局に
職を奉じて書記
補となり、全四
十一年通信局に
進み、全四十二
年通信書記に任
官し、大正十二

年退官した。在職二十五年の内大正三年門司郵便局に轉勤を命ぜられ一ケ年の勤務を経て再び鹿兒島局に復歸した。在官中は終始郵便課に職務を續け、大正六年主事に任ぜられ郵便課の實權を掌握する事多年に及んだ。
退官して郷里に歸るや大正十三年四月郷黨の推す所となりて舊吉野村村會議員に當選し、一期間村政の樞機に參じて劃策する所あり、期滿して辭し、爾來家庭に在りて悠々自適の生活を樂しんでゐたが、昭和九年十一月縣方面委員の囑託を受け、中別府、雀ヶ宮、中ノ町、七社の四字六百戸を擔當區域とし、社會事業の爲めに勇往邁進して今日に至つてゐる。出でて官游し、入りて郷土の爲めに其の晩節を竭す君の如き人ありてこそ、我帝國は永久に泰山の安きにあり得るのではあるまいか。目下日支事變の最中に於て君等方面委員の活躍一層要望せらるるの秋、更に一段の努力あらん事を切望して筆を擱く。以上の間大正三四年事變の功により一時金を賜り、大正七年正八位に叙せられ全八年六月勲八等瑞寶章を賜り、全十一年從七位に叙せられた。長男眞一君は九州帝國大學法文系を出でて名古屋中部電力會社に奉職し、次男福馬君は師範學校を卒業して郷土小學校に教鞭を執り、三男威君は鹿兒島高等商業學校を卒業して勸銀鹿兒島支店店頭に奉じ、四男春夫君は縣立一中在學中。

國藝組合長

加治屋三四郎 君

鹿兒島市吉野町帶道

舊藩政時代、不世出の英主齋彬公が舊吉野村上の原に牧場を設置せられてから本村の馬産は急に面目を改め大正初頭から全七八年頃までは千數百頭の牝馬を飼育し、一時嚼嚙那を凌駕するの盛況を示し、縣下に吉野馬の名を高からしめたものである。
君は明治四十年頃産馬組合の創立に奔走して之れを實現し、自ら種馬二頭を所有して吉野馬産に貢獻した外、鹿兒島郡牛馬組合評議員、大正十五年より鹿兒島牛馬畜産組合副組合長、昭和六年からは鹿兒島畜産保險組合副組合長に就任し共に盡力を續けて今日に至つてゐる。産馬功勞者として近く其の筋より表彰せられる筈は聞く。現在當地に於ける産馬は已に昔日の俾はないが、それでも年産額五百七十頭餘を算し、本年の如きは日支事變の關係上多少増産の見込らしい。君は以上述ぶるが如く畜産界に貢獻しつつあるのみならず、又舊吉野村を打つて一丸とせる農藝組合を組織して其の組合長に推され頻りに其事に盡瘁し、近く吉野柑橘組合をも團藝組合に合併する豫定と言ふ。其他、郷土出身の偉人川上大将の記念碑建設及び種馬所の移轉等にも多大の盡力を各まなかつた。明治十五年二月十六日生の五十七歳。五男一女あり。



明治二十九年
を以て先考七木
郎氏の息に下田
に生る。大正七
年加治木中學校
を出でて歩兵第
四十五聯隊に入
隊、一年志願兵

役に服して歸る。歸來區長に推され、職に盡瘁する事三期、大正十年より昭和九年鹿兒島との合併成立迄村會議員の職に在り、合併委員として市當局と諸般の交渉に當り、功勞著しきものありき。先に吉野村在郷軍人分會長に奉じ、合併後更に川上分會長に推され、吉野青年學校後援會副會長を兼ねて共に盡力に任じ居り。
亡父七太郎氏は明治元年十月廿五日出生。天資顯明、幼時郷校に學びて成績群童に秀で、業を卒へて家にあるや夙夜農事の改良に志し、百方研鑽して其の典義に通ぜり。又壯蕪廣く人に交りて友誼に厚く、兼ねて其の識見を啓發し、徳器を磨ぐ所多し、從つて平生の所論普く背緊に中り人皆其見識の高遠なるに敬服す。町村制の實施を見るや村會議員に推され、尋で郡會、縣會議員に擧げらる。其の公職にある事廿九ケ年の久しきに及び、終始教育産業土木の事業を擔任し、隨所に功績の顯著なるは人皆稱贊する所也。君尙ほ春秋に富み前途大に爲すあらんとせしに天此の人に年を貸さず大正九年二月病みて歿す、享年五十有三。惜しむべし。郷人相謀り昭和三年二月頌徳碑を氏神の境内に建てて以て後世子孫の典型に貽せり。

元小學校長
元村會議員

永田直一 君

鹿兒島市吉野町中別府

君は明治五年十月十二日を以て當所に生る。十六歳の弱冠にして授業生に採用せられ、川上簡易小學校に教鞭を執る事三年、次で吉野小學校在職十七ケ年を経て明治三十九年龍水小學校長に拔擢せられた。明治四十五年谷山小學校主席訓導に轉じ、更に海瀉小學校に轉補せられ、海瀉校在職一ケ年にして辭して歸り、中別府區青年會長に推されて青年の指導誘掖に努むる所ありしが、後ち再び吉野小學校に奉職し、三ヶ年を経て谷山女子尋常高等小學校に轉じ、大正九年に至つて教育界を引退した。歸郷の翌十年吉野村役場書記に奉職し、昭和六年辭任、全八年村會議員に當選、鹿兒島市と合併するに至つて職を辭した。

以上の經歷に於て、龍水小學校長當時は校舎の改築、學校の敷地擴張に功績をとり、村役場書記としては庶務保時代新舊書類の整理に努め、以て事務の刷新と進捗に多大の便益を興へ鹿兒島市合併に際しては合併委員として盡瘁する等、君の之く所必ず相當の功績を擧げざるはなかつた。現に吉野産業組合理事、青年學校後援會評議員及び昭和十年以來の少年救護委員を兼ねて努力に任じてゐる。長男純直君は臺灣總督府交通局鐵道部庶務課に奉職し、次男純夫君は基隆市役所に在勤、次女ちか子氏は東京帝國女子專門學校を卒業後、三井物産大阪支店人事係長丸目美良氏に嫁した。

區長 加治屋仁介 君

鹿兒島市吉野町帶道



鹿兒島電氣株式會社技術部員に採用せられたのが後來君が電氣と離れられなくなつた切つかけで、鹿電から轉じて長崎造船

所電氣部に入り、在職四五ケ年、日露戰役當時は海軍省に奉職、三笠艦引揚げの爲め作業船猿橋に乘組みて其の目的達成に協力し、明治四十四年更に島津電氣部に入り、大正六年まで勤務を續け、後ち日本電氣株式會社に入社、同社花瀬川發電所主任を最後とし、昭和八年電氣と絶縁して故郷に歸つた。日本水電在職中肝屬郡谷田發電所主任當時、鹿屋署管内工場懇話會副會長に推され、全會の爲に盡瘁する所があつた。去る昭和五年十一月八日電氣協會九州支部理事上田萬平氏の名に於て、十年以上電氣事業に従事し、精勵格勳、功績顯著なるものありとして表彰を受けた。
退職歸郷後の昭和九年推されて帶道區長となり、防衛團吉野分團長を兼ねて郷土愛の實踐に忙殺せられてゐる。當帶道區は百五十餘戸の大部落で、さらでだに復雜多端な區務は、日支事變勃發後の今日一段の甚しきを加へ、君の敏腕を以てするも決して容易の業でない。家庭は夫人との間に二男あり、長男充二君は東京電氣專門學校を卒業して日本水電株式會社に奉職中、事變勃發と共に召集せられて出征した。二男充男君は縣立工業學校機械科在學中、秀才の聞えあり。

軍事功勞者 功七級 福吉八太郎 君

鹿兒島市吉野町帶道



明治三十二年
歩兵第四十五聯
隊第十中隊に入
隊、日露戰役勃
發と共に三十七
年五月勲員下令
第二軍に屬して
養平の攻撃に火

蓋を切り、爾來劉家屯、五臺山、大石橋、海城鞍山站、首山堡、遼陽、沙河、黑溝臺、奉天の大小戰に參加し、同三十九年三月原隊に凱旋して召集解除となり、戰時中の赫々たる武勳に對し功七級金鷄勳章を賜ひ、勲八等に叙せられて白色桐葉章を下賜せられた。
君は戰役當時司令部附勤務中、我が騎兵隊の乗用たる軍馬の貧弱にして爲めに屢々露軍騎兵隊の乗する所となりし事實を目撃し、痛奮遺る方なく、戰後馬匹の改良に捧ぐべきを誓ひ、凱旋後直ちに北海道に渡り、北見國尋常呂郡尋常呂村に住して牧場の經營を開始し、盛時は馬五百頭を放牧したと云ふ。傍ら消防小頭として盡瘁する事十三年の長きに及び、尋常呂川出水及尋常呂村の火災に際して善く其の職責を盡した廉により大正八年十二月北海道警察部長及北海道長官より感謝狀を贈られ、全十四年五月尋常呂村長より感謝狀に金時計を添へて贈られた。
大正十四年家事の都合によりて歸郷、後ち部落の世話役から養蠶小組合長に推され、現職に在りて盡瘁中である。明治十二年四月十九日生。

方面委員 鹿七位 竹迫勝熊君



鹿兒島市坂元町國科

君は明治十年二月十六日西南戦役の勃發當時舊吉野村國科に呱呱の聲を挙げた。長じて全二十九年十月二十歳の時普通文官試験に合格したといふから天資も勝れてゐたであらうし、それと同時に勤勉努力家であつた事も窺はれる。試験合格と同時に神戸郵便局通信書記補に任ぜられ、全三十四年鹿兒島郵便局に轉じ、四十五年更に久留米郵便局勤務を命ぜられ、大正四年更に鹿兒島大林區署に奉職し、事一ヶ年、全十年再び鹿兒島郵便局に復職し、昭和七年三月退官した。此の間大正十三年十二月勲八等に叙せられ、全十四年七月正八位を賜ひ、昭和七年三月從七位、同六月勲七等に陞叙せられ、瑞寶章を授けられた。

大正二年四月一日逓信大臣より多年勤続して精勵格勳、功績顯著なるものありとして表彰せられた。官を辭して故郷に歸るや、同六年四月吉野村々會議員に選ばれ、鹿兒島市合併當時の議員として盡瘁する所あり、合併直後の十月縣方面委員を囑託せられ、全十年十月國科區附屬員に任ぜられ、共に現職に在りて轉旋を續けてゐる。陛下幸直後附屬員に就任したので萬事頗る多忙を極めたのも無理はない。過去大正三四年戦役の功により陸軍大臣から一時金を下附せられた。長男勝男君は鹿兒島郵便局に奉職、次男勝進君は海軍下士として某方面に出動し、三男勝純君は宮崎郵便局に在勤、四男勝義君は鹿兒島商船學校に在學中。

元村會議員 瀨戸口彌四郎君



鹿兒島市坂元町龍馬

君が一箇眞正の風雲児である事は、以下述ぶる所の經歷によつて自ら判然するであらう。明治二十五年頃といふから明治四年生れの君がヤツト徴兵適齡期を過ぎた二十二歳の時、單身遙々海を渡り山を越えて山梨縣に赴き、而もそこで最も冒險事業と稱せらるゝ金山採掘に着手した。いかに冒險を好む年頃であつたとはいへ、乗るか反るか、人間一代を棒に振るか振らぬかと云ふ、所謂乾坤一擲の事業を、僅々二十二歳の時に創じた君が風雲児でなくてはならぬ。爾來此の事業に心身を打ち込む事二十餘年、所期以上の成果を収めて大正五年故郷に錦衣した。即ち一箇の風雲児は立派な成功者として故郷入りをしたのである。

大正六年四月友人知己に推されて舊吉野村會議員に當選、次で大正十四年四月再度村會議員に當選、爾來毎期選を重ね、昭和九年鹿兒島市と合併する迄其の職に在り、舊吉野村の爲に寄與する所頗る大なるものがあつた。歸郷後柑橘の栽培に力を注ぎ、一時相當多數の植栽を試みたが成績思はずから今日に於ては中止の状態である。彼の吉野無線局開設に際しては、用地買収に關し君の意を用ふる所多大なるものがあつた。三男信雄君は佐世保海軍團に入りて軍艦に乗組み、四男新吉君は京都武術專門學校を卒業して陸軍歩兵隊備少尉に進み、現在京城商業學校に奉職中。

園藝組合長 有村伊太郎君



鹿兒島市吉野町中ノ町

吉野園藝組合は大正七八年當時の組織にかゝ主として雀ヶ宮區民之に加入し居れり。君は昭和七年第三代組合長に就任し今日に至つてゐる。當區内に於ける觀賞園藝木の栽培は縣下第一なるも未だ副業たるの域を脱せず、之れを遺憾として君は年々品評會及び講習會を開催して業者を刺戟奨励し、或は先進地を視察して參考とし、昭和九年市より囑託せられて京阪地方を視察して歸り、之れ等を標準として熱心指導に力めたる結果、數年前に比し全く面目を一新するを得た。君は夙に組合員に説きて氣候風土に適したる南國特有の植物とも云ふべき棕櫚竹、觀音竹の栽培に力を注がしめ、成績頗る優良なるものあり、目下縣内外よりの注文殺到して到底之に應じ難き現狀にある。君は其の統制上より見るも將又吉野の園藝を更に隆昌ならしむる見地からするも、現在の副業より一步を進めて専門業たらしむべく鋭意勸説に力めてゐる事は、流石に當を得た考へと稱すべきであらう。

本縣名物春の木市に於ける出品者の場所割には非常に苦心したと聞く。昭和八年以來更に秋の木市をも始めた。以上園藝家としての功績の外、村會議員に當選する事二回、鹿兒島市との合併に盡力した外、多年の懸案たりし村社白山姫神社改築に際し委員として其の職責を完ふした。長男文雄君は飛行母艦能登呂に乗組み、次男行雄君は台灣歩兵第二聯隊に入隊中。

元園藝組合長 福永豊吉君

鹿兒島市吉野町雀ヶ宮

吉野の園藝組合の産みの親であり育ての親として且つは吉野の園藝を今日の隆昌に導いた恩人として、初代吉野園藝組合長福永君の苦勞と恩恵とを忘れてはならぬ。由來雀ヶ宮は觀賞木の栽培に於て縣下第一の地たるは論なき所であるが、事此所に至る以前に於ては業者の間に統制なく、相互の研究を發表すべき機會なく、爲めに年々衰微の一途を辿るべきを慨し、君は決然立ちて村當局を動かして、大正七八年の交約二十名の業者を以て園藝組合を組織し、推されて組合長に就任するや、郡、縣に請ふて補助金の交付を受け、縣外先進地を視察して其の長を獎勵、相互に研究を發表して斯界の向上を計り、或は熱帯植物例へば棕櫚竹、觀音竹、大葉風蘭、ピンロー樹等の栽培を奨励して縣外輸出を計る等、少からざる功績を留め、現在に於ては組合員百四十名の多數を算するに至つた。雀ヶ宮は由來水不足の地で飲料水を初め灌漑用水にすら不自由なる爲め鉢物の栽培困難なるを見、君は率先して吉野水道の擴張延長を策し遂に目的を達成して保建衛生と樹木灌漑用水の不足を補ふを得しめた外、村社白山姫神社改築委員として之れを完成する等功績の擧ぐべきもの多し。長男光雄君は小學校卒業後福岡縣に派して實地研究に當らしめ、次男良憲君は小倉園藝學校を卒業したる後兵庫縣下に於て研究を積み、今共に家庭に在りて郷黨に範を示しつゝある。猶ほ他家の小供をも目下福岡縣下に派して研究せしめ居れりと云ふ。

元村會議員 熊谷義秋君

鹿兒島市吉野町雀ヶ宮



顧みれば君の半世は實に努力實行の記録であつた。明治二十八年始めて京都府巡查を拜命して警察界に投じて三十二年鹿兒島縣巡查に轉じ、全三十四年巡查部長に昇進し大正五年官を辭して故郷の人となつた。

此の間横川署勤務を振り出しに加世田署、徳之島署、出水署詰を轉々し、宮之城署勤務を最後として警察官の足を洗つた。斯く書し去れば僅々六七行の文字に盡きりけれども、治安維持、人民保護の二十二年の星霜は決して短いものでなく、勞苦も亦昔々のものではなかつた。明治三十七八年の日露戦役當時出水署員として米之津に在り、召集事務を執る傍ら軍馬の輸送、軍需品の發送に忙殺せられ、文字共まゝ寢食の暇さへない位であつたと云ふ。

官を辭して歸郷するや、推されて家屋稅調査員、農會總代等に歴任し、昭和八年四月吉野村會議員に當選し、鹿兒島市との合併に際して活躍する所あり、又村社白山姫神社の改築に當りては會計を擔任し、改築費の借り入れより物品買掛け代金の支拂に至る迄舉げて君の意を経ざるなく、遂に克く改築を完成せしむるを得た。長男義夫君は縣立工業學校を卒業し奉天造兵所に勤務し、次男富士夫君は關西大學を出で、三男人君は大阪外國語學校を卒業して滿洲國官吏に採用せられた。

元村會議員 中村七郎君

鹿兒島市吉野町中ノ町



困苦缺乏に堪へ忍従の生活に慣れた者は一旦事ある時に臨み毅然として立つ氣概に乏しい憾がある。平素我を殺す習慣がつ

けられてゐるからである。それと反對に常に正義の味方を以て任じ、理を以て非理に抗する者は兎角辛抱の根氣に乏しい缺點がある。而して此の兩者を一身に兼ね備ふる人物に至りては洵に寂寥の感がある時、我が中村君が其の模範的人物なる事を發見した事は筆者の喜びに堪へない所である。君は高位の顯官ではない、又一代の富豪でもない。然し乍ら人間としての立派さに於ては恐らくいかなる顯官も、君に一籌を輸するであらう。君は明治四年を以て當所に生る長するに及び明治三十年鹿兒島電氣株式會社の創立と同時に全社に入り、専ら技術方面を擔當して格勳精勵する事三十四年の永きに及び、暗黒と云はざる迄も、ランプ時代の薄暗い鹿兒島市を輝かしき鹿兒島市に化せしめ、昭和四年目出度く退社して郷村の人となり、爾來村會議員に當選する事二回に及び、舊吉野村最後の村會議員として鹿兒島市との合併に善所した外、吉野陸軍演習場設置に當り、其の買収面積と價額に關し只獨り村民全般の利害に立脚して其の主張の貫徹に努め、遂に其の目的を達成せしめた氣魄は、孟子の所謂千萬人と雖も吾行んの語に當る者である。長男仙藏君は熊本市某電氣商會に奉職中。他に二男子あり。

元村會議員 中島宗次郎君

鹿兒島市川上町花棚



農事小組合長 五期を経て昭和四年四月舊吉野村會議員に當選し、同八年三月再選重任、任期中に目出度く鹿兒島市との合併が成立した。君が公職者として郷土に遺した功績中尤も顯著なものが二つある。一は字木ノ迫より分岐せし村道の開鑿にして他の一は、舊花棚區を上花棚、下花棚の二區に分轄した事である。

花棚區は舊來兎角一致協力を缺ぐの恨あり、上部落は議論多くして何事にも一致せざるの風あるに反し、下部落は極めて平和な部落なるに鑑み、君は断然立つて上下分轄説を主張し、部落民九十五戸團結を固くして君の主張を支持した爲め、上部落の反對を押し切り遂に初志を貫徹して目的を達し、從來と打つてかはつた榮土を建設するに至つた。又曾つて花棚産業組合監事たりし時、八千圓の不足金あるにも拘らず、他の役員が之を等閑に附して問題とせざるに憤慨し、君は決然之を指摘して組合長に賠償を迫り組合を解散して組合員に損害なきを得せしめたる如き、區民によりて銘記せらるべき功績であらう。君は明治四十五年から柑橋の栽培に従事し、現在では一町歩餘の柑橋園を經營してある一時熱心に區民に奨励したが遂に盛大に至らずして止んだ。長男藏重君は鹿兒島郵便局電信係に奉職し、次男政義君は農業に従ひ、三男利雄君は鹿屋農學校を出で、清水小學校に奉職し、昭和十三年滿洲開拓義勇軍指導員に採用せられて渡滿中である。

元村會議員 武盛吉君

鹿兒島市吉野町高瀬谷



舊吉野村最終の村會議員として、鹿兒島市との合併に非常な骨折りを爲した功績にも優る功績は、昭和二年陸軍演習場の設置に當りての用地買収の件であつた。當時吉野村民と、軍當局との折衝ならず、紛糾難雜して收拾す可らざる状態に立至つたが、君は此の間に所して公明正大、國家的見地に立つて村當局と協心戮力し、普ねく村民の間に誘説を試みて事件の解決に努め、遂に圓滿なる終結を告ぐるに至らしめた努力奔走は、永く君の記憶に生くる出来事たるのみならず、演習地と共に永遠に留むべきである。

君は明治三十九年歩兵第四十五聯隊に入隊して兵役の義務に服し、滿期除隊後舊蒲谷部落役員、國勢調査員等を手始めに漸次村内に存在を認められ、昭和四年四月再選されて村會議員に當選し、同八年四月再度當選を重ね、鹿兒島市と合併するに至つて罷めた。昭和四年土木委員に擧げられ、救済事業の遂行に努めた外、畜産の進展に寄與する所多く、又産業組合監事、同評定員として多年組合事業の進歩發達に貢献する所があつた。家庭は夫人との間に三男あり、長男侃君は逓信省熊本逓信局建設従業員に奉じ、次男義則君は農業に従事中。

元村會議員 塩屋新太郎君

鹿兒島市吉野町龍ヶ水

部落の幹部役員たる事三十ヶ年、その間部落の爲めに盡した功績には顯著なものがあり、部落より表彰を受けた。大正十四年四月區民の推薦する所となりて舊吉野村々會議員に當選、昭和四年四月再選、其の間道路委員に擧げられて道路の改善に努め、就中龍ヶ水坂の改修には必死の努力を傾注し、遂に現状を出現せしむるに至つた。即ち舊時に在りては龍ヶ水坂は千三百三十三段の石階より成り、九十九折の屈曲を有し、重荷を負ひて此の坂を登り行く馬が、足を失して打ち倒れ遂に死亡した例頻々たるの有様であつたが、修理後の今日では三十の屈折を減じ、危険の個所には柵を設け、舊態に比し面目を一新したる觀あり、以て本部落八十三戸の住民の耕地への往來を容易ならしめた事は、部落民によりて銘記さるべき功績であらう。從來此の坂路修繕に關しては、村より何等の補助も受けたなかつたが、君が村會議員に當選した後は、年々之に補助せしむる事とした事も大なる功績と云はねばならぬ。龍ヶ水小學校の高等科併置につきての勞苦も普々ならぬものであつた。農會法實施以來引續き農會總代に推され、市と合併後の今日も尙ほ其の職に盡瘁中。明治十六年生。

元村會議員 中島盛助君

鹿兒島市吉野町七社

明治二十八年十月二十二日を以て七社に生れた。大正四年徴せられて歩兵第四十五聯隊に入隊し、兵役の義務を全ふして歸つた。次で大正八年本縣巡查を拜命し、在職十ヶ年に及び縣警察界に活躍したが、昭和四年老父母に孝養を盡す爲に官を辭して歸郷した。昭和八年四月舊吉野村々會議員に選ばれ、翌九年鹿兒島市との合併に際して盡瘁する所多く、之れを實現せしめた當時の議員として今尙ほ時人の記憶に新なる所である。

嗣子要君は大正八年十月生、加治木中學校を優等の成績を以て卒業し、初め海軍兵學校の入学試験に應試して見事にパスしたが、其の嗣子たるの故を以て入学を許されず、次で陸軍士官學校入学試験に應じ、これ又難なく合格して目下士官學校豫科に在學、攻々として文武兩道に精進しつゝある。由來本村は別府晋助、桐野利秋の如き南洲門下の麒麟兒を輩出し、近くは元參謀總長川上大將の如き名將を出した由緒ある土地柄にも拘らず、大正、昭和の時代に入りては更に振はず、陸軍に在りては少佐が最上位と云ふ今日、要君の如き有爲有能の青年によりて再び昔の吉野に返へして貰ひたいと思ふのは獨り編者だけの希望ではあるまい。

軍事功勞者 谷口四右衛門君

鹿兒島市下田町



君は明治十六年七月十六日を以て下田に生る。同三十六年徴兵に合格して歩兵第四十五聯隊に入隊、日露戰役の功勞を見たり、同十六年六月鹿兒島港を出發して征途中上り、同十六日清國張家屯に上陸、十月四日第二軍戰團序列に入り、同月九日蓋平の戰を皮切りに大石橋、海城、鞍山に轉戦し、引續き首山堡附近に於て激戦を交へ、九月一日より同四日に亘り遼陽攻略に参加して之を抜き、九月十一日一等卒に昇進、同十月十日より同二十一日迄沙河附近に於て戰ひ、三十八年一月二十五日より同二十九日に至るまで黑溝臺附近の戰闘に参加し、三月一日より十日間奉天の大會戰に加はりて殊勳あり、三月二十四日第四軍の戰團序列に編入せられ、十二月二十日病を發して双樹日大連出帆、一月七日門司歸着、同三十九年一月四日四十五聯隊補充大隊に編入せられ、同年三月二十八日上等兵に進められ、同年十一月三十日退營歸郷した。此の間三十九年十一月十五日善行證書下附、同月下士適任書受領、同三十九年四月日露戰役中の功により勳八等に叙せられ、功七級金鷄勳章並に年金百圓を下賜せられ、同四年八月十七日豫備召集に應じ陸軍歩兵五長に任官した。歸郷後は在郷軍人分會役員、農事小組合長、衛生組長、區長等に推され多年村治に盡瘁して今日に至つてある。長男鐵男君は十九歳にして新保海兵團に入り、現在下士官に昇進し、新保教育係に勤務し、次男兼彦君は鹿兒島機關庫に奉職中。

元村會議員 田中五七君

鹿兒島市岡之原町泰山

自治制布かれて五十年、いかなる山村避地と雖も遂に克く今日の發達を遂げしもの、父より子に、子より孫に相承け相譲りて滅私奉公の實踐窮行にいそしんだ結果に外ならない。例へば田中君父子の如く。先代仲之進氏は生前舊吉野村及び春山區内の各種公職に推され、村會議員三期の長きに及び村及び春山區の爲めに骨身惜しまず働いた功勞者で、昭和七年に其の多忙な生涯を終つた。君は仲之進氏の五男、明治二十年五月八日を以て其家に生れた。春山區の各種役員を経て其の人物と手腕を認められ、昭和八年遂に吉野村々會議員に選ばれ、吉野村最後の議員として鹿兒島市との合併に盡瘁する所あり、後ち區長に任ぜられ、在職一期、現在農會總代として農事方面に力を效しつゝある。去る昭和十年に開通せる大久保、春山間の道路開鑿は本村多年の懸案で、其の實現に就きては多大の奔走斡旋に任じ、又區長在職中春山堰の改造を斷行し、コンクリート造りの半永久的のものを造りて同區百年の計を樹てた如き、功績中の功績と云つて宜しからう。

家に五男三女あり、嗣子繁裕君は家庭にありて農耕を助け、次男耕男君は青年學校に通學中。

鹿兒島高等商業學校

鹿兒島市長田町

鹿兒島中學校

鹿兒島市藥師町

鹿兒島高等女學校

鹿兒島市藥師町

財團法人

津 曲 學 園

鹿兒島市加治屋町



Faint vertical text columns at the top of the right page, possibly a list of names or a preface.

Faint vertical text columns in the middle of the right page, surrounding the portrait.

Faint vertical text columns at the bottom of the right page.

資本金參百萬圓

鹿兒島市六日町十五番地

電話

一五三番一〇五三番
二〇五〇番三〇九番

株式會社 鹿兒島銀行

- 鹿屋支店 種子島支店 高山支店 栗野支店
- 出水支店 川邊支店 指宿支店 加世田支店
- 垂水支店 國分支店 岩川支店 枕崎支店
- 伊作支店 大根占支店

昭和十三年十月十五日印刷
昭和十三年十月二十日發行

非賣品

編輯者 鹿兒島市平之町六番地 高瀬武彦

印刷者 熊本市京町本丁六十九番地 稻本新吾

印刷所 熊本市京町本丁六十九番地 稻本報徳舎

電話 二八九番
四三四三番

不許
複製

發行所 鹿兒島市平之町六番地 郷土研究會

381
502

終